

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その九)

鈴木 満 訳・注

*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』(一八五三)(略称をDSBとする)の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig. Verlag von Georg Wigand. 1853. Reprint. Nabu Press.

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとウィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』(略称をDSとする)を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München. Winkler Verlag. 1981. Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版(略称をGLとする)も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol. 1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human

Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合はここには記さず、本文に注番号を附し、「DS***に詳しい」と注記するに留める。

5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があろうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といった高教を賜ることができれば、まことに幸いである。

7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その一)	一	六〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号一一七〜二三五ページ、平成二十四年十一月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その二)	六一	九〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号四六三〜五三〇ページ、平成二十五年二月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その三)	九一	一三四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号七五〜一七六ページ、平成二十五年三月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その四)	一三五	一八四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号一五七〜二八五ページ、平成二十五年十一月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その五)	一八五	二二五	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号九五〜一八〇ページ、平成二十六年三月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その六)	二二六	二八八	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号二〇九〜三三〇ページ、平成二十六年十月

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その七) 二八九——三三九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第二号一五一〜二四六ページ、平成二十六年十二月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その八) 三四〇——三九四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号(本誌)

*本分載試訳(その九)の伝説

- 三九五 ヴァルケンリート修道院の話 Vom Kloster Walkenried.
三九六 魔法の広間とルタールターの陥穽おと Zaubersaal und Lutherfalle.
三九七 最後のクレッテンベルク伯 Der letzte Graf von Klettenberg. *DS35 Die vier Hufeisen.
三九八 ケレ Die Kelle.
三九九 救難のマリア Maria im Elende.
四〇〇 乙女ニムフフラウイルゼ Jungfrau Ilse. *DS317 Jungfrau Ilse.
四〇一 レーゲンシユタイン城の井戸クンツの亡霊 Der Brunnengeist auf Regenstein.
四〇二 悪魔トイフェルの壁 Die Teufelsmauern. *DS189 Die Teufelsmauer. / *DS190 Des Teufels Tanzplatz.
四〇三 馬ロストラッスの足跡とクレートクレートの淵 Roßtrappe und Creyfuhl. *DS319 Der Roßtrapp und Kreyfuhl.
四〇四 湧き出る銀貨 Das quellende Silber. *DS161 Das quellende Silber.
四〇五 娘メークデシユフヤンクたちの跳躍 Der Mägdesprung. *DS320 Der Mägdesprung.
四〇六 ファルケンシユタインダイヤモンドダイヤモンドFalkenstein und Tidian.
四〇七 櫃ヒツの中の神 Der Gott im Kasten.
四〇八 死人トイデの道 Der Todtenweg.

- 四〇九 踊りの池 Der Tanzteich.
- 四一〇 花冠 Die Krone.
Die Quäste.
- 四一一 発祥の城アンハルト Stammschloß Anhalt.
- 四一二 アンハルト城のファウスト博士 Doctor Faust auf Anhalt.
- 四一三 「これぞかの男の地所なる」 „Das ist des Manns Feld.“ *DS575 Ursprung des Grafen von Mansfeld.
- 四一四 マンスフェルト城 Schloß Mansfeld.
- 四一五 ヴェルフエス森の石の合戦 Stein und Schlacht am Welpesholz. *DS492 Graf Hoyer von Mansfeld.
- 四一六 アルンシュタインの亡霊たち Die Geister auf Arnstein.
- 四一七 一度に九人の子ぶもたまき Neun Kinder auf einmal. *DS521 Ursprung der Wellen. / *DS577 Die acht Brunos.
- 四一八 聖ブルーノと驢馬ヶ原 Sankt Bruno und die Eselswiese. *DS578 Die Eselswiese.
- 四一九 ゲホーフエンに出現した修道女の亡霊 Der Nonnengeist zu Gehofen.
- 四二〇 生き続ける鴉 Der immerlebende Rabe.
- 四二一 司教の猫 Des Bischofs Katze.
- 四二二 テューリンゲン族とサクセン族の由来と争う Der Thüringer und Sachsen Herkunft und Streiten.
- *DS415 Herkunft der Sachsen. / *DS416 Die Sachsen und die Thüringer. / *DS424 Die Merovinger. / *DS425 Childerich und Basina. / *DS550 Amalaberga von Thüringen. / *DS551 Sage von Irmenfried, Iring und Dieterich.
- 四二三 ボニファチウスのプフヒヨ Die Bonifaciuspfennig.

- 四二四 髭めじやのルートヴィヒとユネの子孫 Ludwig mit dem Barte und sein Stamm.
- 四二五 ヴァイセンブルクの奥方 Die Frau von Weissenburg. *DS552 Das Jagen im fremden Walde.
- 四二六 キービヒェンシュタインからの跳躍 Der Sprung vom Giebichenstein. *DS556 Ludwig der Springer.
- 四二七 聖ウルリヒの教会 Sankt Ulrichs Kirche.
- 四二八 皇帝フリードリヒと Kaiser Friedrich. *DS494 Der verlorene Kaiser Friedrich.
- 四二九 皇帝フリードリヒの贈り物 Kaiser Friedrichs Gaben. *DS23 Friedrich Rotbart auf dem Kyffhäuser.
- / *DS297 Der Hirt auf dem Kyffhäuser. / *DS304 Der Zwerg und die Wunderblume.
- 四三〇 山の惑わし Bergentrückung.
- 四三一 皇帝フリードリヒの宮廷の人人 Kaiser Friedrichs Hofgesinde.
- 四三二 穀棒使 Die Flegler.
- 四三三 懺悔の事業 Werke der Buße.
- 四三四 啼き叫び Geheul und Geschrei.
- 四三五 ゲリンゲンのギェンター聖者 Der heilige Günther in Göllingen.
- 四三六 シュヴァルツブルク伯爵家の起源 Ursprung der Grafen von Schwarzburg.
- 四三七 聖女がたのお引越 Die Auswanderung der Heiligen.
- 四三八 茶色の丘 Der braune Bühel.
デア・ブラウネ・ヒューヘル
- 四三九 たいつたいつ教会 Die wilde Kirche.
ダイー・ワイルデ・キルヒ
- 四四〇 病癒えたるダゴバート王 König Dagobert heil.

- 四四一 悪魔の説教壇 デス・トイフェルス・カンツェル Des Teufels Kanzel.
- 四四二 ちびっこの仕立て屋さん Der kleine Schneider.
- 四四三 ライフエンシュタインの修道士 Der Mönch von Reifenstein.
- 四四四 王の偉業 Des Königs Abenteuer.

三九五 ヴァルケンリート修道院の話

今は昔、ローレ⁽¹⁾のうら若き女伯アルハイデイス——ローレの殿ルートヴィヒの息女——は、かのクニゲンデ・フォン・キユナスト(D S B 六三七)と全く同じことをした。すなわち求婚する者があると、居城の城壁の周りを三度騎馬で廻らせたのである。これで彼女は死ぬことはなかったが、少なからぬ男たちが命を落とした。やがてクレツテンベルク伯フォルクマール殿⁽²⁾がこの冒険を雄雄しく達成、女伯は彼と結婚し、自らの非道罪業を後悔、修道院を建立しよう夫君と心をつにした。夫妻はライン河畔のケルンヤトリーア⁽³⁾にはるばる足を運んで聖なる殉教者がたの墓に詣で、カンペン修道院から十七人の修道士を所領のヴァルケンリートに連れて来た。一一二七年この地に聖ベネデイクトウスの戒律に依拠する壮麗な修道院が着工された。もつとも後にシトー会派の修道院に変わったが……。二千人の労働者が脇目も振らず工事に邁進^{まいしん}した。ただし竣工^{しゅんこう}まで三十年も掛かったという話である。ヘルツベルク伯とラウターベルク伯も修道院建設に喜捨し、両者は百万個もの石を運搬させた由。とりわけ極めて熱心だったのは女性創建者のアルハイデイスで、彼女は自らの装身具さえも修道院建設に捧げ、祝福につけ呪詛^{じゆそ}につけ修道院が中心だった。呪詛は、建設の邪魔をしたり修道院から盗みを働くような輩^{やぶ}に対するもの。このように不信心な盗つ人どもへの呪いはこんな具合で肌に粟^{あわ}を生ずるばかりの恐ろしさだった。いわく「かやつ^{こやつ}の所業は悉く呪われよ。その終わりもその初めも呪われよ。その生もその死も呪われよ。かやつ^{こやつ}の死は犬の死のごとくであれ。かやつを埋葬する者は抹殺されよ。埋葬される土地は呪われよ。かの盗人が悔い改めねば、悪魔と悪魔の使いどもの許^{もと}で永劫の火に焼かれ続けるがよい」。

かくもキリスト教徒らしく祈念を凝らし、併せて施設の建築と装飾には善美を尽くし、惜しげもなく費用を使っ

たので、修道院の回廊に囲まれた中庭は天国パラダイスと呼ばれた。従つて当然悪魔もそこにちよつかいを出した。悪魔は修道院で実にさまざまな所業を行ったが、とりわけ悪戯わるざを恣ほしいままにしたのは農民戦争中。この折はこの上もなく壮麗な修道院附属教会と素晴らしい修道院の建物をただただ冒瀆行為を働きたい一心でほとんど完全に打ち壊し、快哉かいざいを叫んだ。その結果ヴァルケンリート修道院は鳥や狐の棲処すみかに成り果てた。農民たちは当時武器を携えて強大な軍隊と化し、だれかれとなく同志にしようとした。ヴァルケンリートを占拠した農民軍にバルテフェルト出の羊飼いで向こう見ずなハンス・アーノルトなる男(6)がいて、これが隊長だったが、鏢広帽つばひろぼうに雄鶏おんどりの尾羽根を飾り、踏み反りかえつてローレ伯とクレッテンベルク伯の前へ歩み出た。二人の伯爵はこよなく尊い農民友愛同盟に参加を強制されていたのである。この豪傑は片脚を軸にぐるりと回転、槍を振つて、こう叫んだ。「なあ、兄弟きょうだいエルンスト、分かつたかよ、わつちに戦いくさができる、指揮が執れるちゆうことが。あんたにやいつてえ何ができるだな、ヘッヘッヘ」。クレッテンベルク伯エルンストは素っ気ない口調でこう答えた。「まあやらなきやならんことくらいはできようて、ハンスくん。なるほど麦酒ビールは目下ぶくぶく醸醇はつじゆしておる。しかし時至ればしかるべき樽たるに収まるものよ」。これは棘とげのある言葉で、農民諸氏はそう言われて大いに憤慨し、すんでのところ伯爵をぶん殴るところだった。しかし伯爵は正しかった。形勢が一変すると、麦酒ビールは澀おりもろともしかるべき樽に収まり、槍は逆方向に、つまり向こう見ずな農民どもの胴中に突っ込まれたのである。

三九六 魔法の広間とルターカザセの陥穽

ヴァルケンリート修道院では、以前は広間だった、という昔の荒れ果てた敷地を示される。宗教改革後ブラウン

シユヴァイク公クリステイアン・ルートヴィヒ⁽⁹⁾は、他の善意の諸侯がプフォルテ、マイセン、シユロイジンゲン、ロスレーベン等等で行ったのと同様、ヴァルケンリートに立派なラテン語学校を設立させ、ヴァルケンリート修道院のこれまでの全収入をその費用に充てさせ、宗教施設の資産からは一文たりとも私するつもりはない、と宣言したものである。さてある時、右に述べた広間で生徒たちが目印を置いて、自分たちの内でだれがそれを越えて一番遠くまで跳べるか、という遊びをしていた。その仲間の中に近くの小さな町エルリヒ⁽¹⁰⁾の出身で名をダミウスという少年(後に有名な教区監督となつた)がいたが、突然ある場所——跳んだ先——で呪縛されたように動けなくなり、どうやっても引き離せなくなった。校長が呼んで来られたが、この人にもどうしようもなかった。そこで校長は、これには秘密の魔法が介在しているに違いない、と考え、その生徒に、何か徴か文字がないか、周りを見回してごらん、と言つた。少年がそうしてみると、頭上に円が描かれており、東の壁にはギリシア文字が一字、南の方にはまた幾つか符号が記されているのに気付いた。それらを描き、その字を唱えると、少年はまた動けるようになった。校長はこのことを報告した。やがて広間西方の壁の窓辺にある壁龕の中に石製の壺一杯の薄型貨幣——どれもオルツターラー銀貨大⁽¹¹⁾(三分の一ターラーないし二分の一グルデン銀貨大)——が見つかった、ということである。後にまた他の者が魔法の呪文と占い棒^{ヴンネルレヤ}を用いて探したことがある。占い棒はびくつと動きもしたし、また真つ昼間だつたにも関わらず、彼らは恐慌に襲われた。まるで突風が彼らの間を吹き抜け、天井まで巻き上げような感じだつたそうな。例の校長はひそかにお宝を掘り出し、この「財物」^{デサウルス}をいわば「仏蘭西王太子御用」として自分の財布に移したのだ、と説く者もいる。またある者は次のように主張。名高いベネディクト会派修道士にして化学者バジリウス・ヴァレンティヌス——エアフルトのペータースベルク修道院で暮らした——は賢者の石を所有していたが、一時期ヴァルケンリート修道院にいたことがあり、校長が発見したかの魔法の広間の隠された宝

こそこの賢者の石なのだ、と。さりながらこの説は多くの理由から容易に疑問に附されるし、いささか以て突拍子もない。

〔ヴァルケンリート修道院については〕まだこんな伝説もある。マルティン・ルター博士はノルトハウゼン——この地で説教を行い、かのマインツ大司教についても言及した——からハールツ山地を通る旅の途次、マインツ大司教と同行して、ヴァルケンリート修道院へやって来たことがある、と。そこでこの宗教改革者の所業が甚だ気に喰わなかった修道士たちは奸策を廻らして彼をひそかに葬り去ろうと、ある陥穽へ案内した。これはかねてから罪人どものために設けられていたもの。この装置は「マリアの接吻」と呼ばれ、見かけは小さな礼拝堂で、中では黒い聖母像の前に常明灯が燃えていた。しかしこの像は実は鉄の処女のようなもので、だれかがこの礼拝堂に足を踏み込むと、床がさつと動いて、恐ろしい深みに顛落するのだった。ルターがこの陰険極まりない場所に近づくと、なんとまあ、飼っていた小犬が前に走り出て、先に中へ入り、キャンと一声啼いて姿を消した。そこでルターは片手で陥穽を、片手で天を指し、厳かな声を張り上げ、「神は見守りたもう」とただ二語洩らし——立ち去った。修道士たちは慄然とした。

三九七 最後のクレッテンベルク伯

②① ホーエンシュタイン、ローラ、およびクレッテンベルク伯爵家はハールツ山地の所領豊かな一門であり、エルリヒとブライヒャーオーデの両都市は彼らに帰属、また数多くの町村、城塞、農場、粉挽き小屋をも保有していた。最後のクレッテンベルク伯——もしかしたらあの農夫のハンスくん——にヴァルケンリートですこぶる適切な返辞をし

たあのエルンストの孫かも知れぬ——はエルンスト七世伯⁽²⁶⁾である。この大胆不敵な武士⁽²⁶⁾は青年時代——と言つてもこの人は残念ながら老境には達しなかつた——愉快な飲み仲間であり果敢な酒豪だつた。ある時エルリヒなる伯爵の居城の煖炉^(ケムナール)部屋⁽²⁶⁾にハールツの伯爵や騎士たちの相当な人数が集まつたことがある。幾つもの把手^(フ)付き大杯^(ペン)が楽しく巡り、朗らかな酒機嫌に盛り上がった陽気な一座は、他の全員が卓子^(デッフル)の下に酔い潰れても倒れずにいられた者に、報償として黄金鎖^(きん)を提供したそうではござらぬか、と決めた。戦いは白熱、長長と続き、廻つてくる高脚杯^(ポカール)はひっきりなしに乾されていたが、とうとう並み居る人人の頭は重くうなだれ、戦士たちは倒れていった。二人だけがまだ持ち堪えていたが、とどのつまり一人が——玉山^(きよくだ)まさに崩れんとすという態^(ぐたい)ではあつたが——黄金鎖^(きん)を掴^(つか)み、鎖^(ろ)は呂律^(ろれつ)も回らぬ勝利者の頸^(くび)にぶら下がつた。勝利したのはエルンスト伯爵閣下だつた。伯爵は酒宴の場にはもう用はなかつたので、外気が吸いたくなつた。酒合戦^(あひた)で夥^(おびた)しい殿輩^(とのぼら)が死屍累累とあひなつたのに戦場に勝ち残つたのは並大抵のことではない。赫赫^(かつかく)たる勳^(いさおし)を挙げて贏^(か)ちえた黄金鎖^(きん)を身に飾つた伯爵は、愛馬に鞍を置かせるとこれにうちまたがり、エルリヒの町を速歩で駆け抜けて行つたが、どうもなんだか蒸し暑く、外気のせい——外氣以外に特段の理由がないとしてだが——で鞍上の伯爵はふらふらした。折しも日曜日のこと、扉が開けつ放しになっている聖^(ザント)ニクラス教会の中からありがたい風琴^(オルガ)と聖歌の合唱が聞こえてきた。さてホーエンシュタイン伯爵⁽²⁷⁾エルンスト七世、ローラ、およびクレッテンベルクの領主、まことに敬虔^(けいけん)な英傑にしてヴァルケンリート修道院の管財人⁽²⁷⁾としては、神様をなおざりにはできない、と思えたから、駒を静かに教会に向けた。向けたのはいいが、ただ一つ、門前で下馬するのを忘れた。会衆の間を騎乗のままご機嫌上上、恍惚^(こうこつ)として押し通り、真つ直ぐ祭壇を目指したので、諸人^(もろびと)は愕然^(もろびと)とし、坊さんたちはてんでに十字を切つた。しかし、なんと、騎乗の姿も無礼千万だつたが、これまた礼拝を著しく妨げていた夏夏^(かつかつ)という蹄^(ひづめ)の音が突然止んだのである。かかる冒瀆^(ぼうとく)に震怒した神が奇蹟を示して

馬の脚から四つの蹄鉄を同時に外したのだ。そればかりか馬自体も騎り手もろともくたくたくずおれた。少なくとも膝を突いた。その後エルンスト伯爵は音を立てずに教会から馬を出した。四つの蹄鉄はいえど証拠の品として教会の扉に釘づけにされ、火事で教会が焼けるまで長いことそのままそこにあり、火事の後市庁舎に移された。このたびこそ勝利に輝いたものの、かような激戦にどうやらしばしば参加したらしいエルンスト伯爵の生涯は三十一一年四箇月と二十二日で終わったが、その間二度妻を娶った。敬虔なキリスト教徒として死に、ヴァルケンリート、それもかの美しい修道院附属教会——以前の司教座聖堂——内にその奥津城が設けられた。家紋を描いた盾、伯爵の幾つかの印章、および佩剣とともに埋葬された。伯爵のためにまことに立派な葬礼が行われ、堂々たる記念碑が建立され、碑面には武装して跪いている等身大の像が彫られており、その胸には高価な宝玉を鑲めたかの名高い黄金鎖が垂れている。ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン騎士の墓碑に極めて似ている。

三九八 ケレ

ケレ⁽²⁹⁾というのは見物客の多い石膏洞窟だが、以前は、徐々に崩壊してしまつた現在とはまるで別物でずっと美しかった。これについては少なからず伝説がある。本来の名称はケール⁽³⁰⁾、すなわち「咽喉」⁽³¹⁾ほどの意味である。伝説によれば、この美しいが、おどろおどろしくもあるかっと開いた口は、毎年一人人間の生贄を要求した、という。これを宥めるため、昔はエルリヒから司祭が教区の全住民から成る行列を従え、キリスト磔刑像、教会旗、聖人像を掲げ、洞窟近くの聖ヨハンニス礼拝堂へお練りをやり、次いで洞窟自体に訪れ、氷のように冷たい水面に十字架を浸してから再び引き揚げ、こう叫んだもの。

こうしてケレを覗いたからには
そなたは地獄に行きはせぬ。

ケレにはやはり女の水の精が一人棲んでいて、冷たい毒水に人間を誘うことを習いとしている。ここでは蛙が水中に投げ込むとすぐに硬く強張ってしまふ。蛙ならぬ人間であればどうなることやら。

リスボンが恐ろしい地震のため倒壊したあの日(一七五五年十一月一日)、ケレを覆うケールの森では奇妙な地鳴りが聞こえた。エルリヒの人人は長く続く遠雷のような轟きを耳にした。また粉挽きたちは、水流が突然異常な力で水車に奔騰してきた、と指摘した。同日同様にザルツング湖は激しい動揺に見舞われ、水が漏斗のように深みへ渦を巻いて呑み込まれ、次いで轟轟と音を立てて再び噴出したので、岸边一帯は洪水に見舞われた。まだ(一八)二〇年代でも、身を以て目撃した、とこのことを語ってくれた信頼するに足る老人がいたが、新知識のお利口さん連はこれをせせら笑い、他愛のないお伽話さ、と片づけたがる(DSB七四九)。

三九九 救難のマリア

冬の最中、ハールツ山地深くで一人の車力が葡萄酒の荷を運んでいたが、道もない沼地で荷馬車がにっちもさっちも動けなくなつた。それどころか、何もかも一切合切雪溜まりと泥濘の中に沈んでしまひそうだった。人里離れた深い森のこととて、人間の手助けはまず得られそうもない、そう思いながら、車力は神と聖処女に、この難儀からお救いください、と呼び掛けた。すると、なんと、天の女王(「聖母マリア」)が目の前に御姿を現して、助けた

もうたのだ。まず聖母は、どんな貨物を運んでいるのか、と訊いた。「葡萄酒ワインなんできて」と答えると、聖母は、その葡萄酒ワインを味わいたい、とおっしゃった。もちろん車力はすぐさまお望みに応えなかったが、「お杯がござんせん」と悔やんだ。するとマリアは近くの茨いばらの繁しげみに触れた。途端に薔薇ばらが何輪も咲き開いた。マリアはこれを手折ると酒杯の形にし、車力に渡した。車力が葡萄酒ワインを〔樽たるから〕薔薇の杯に注ぐと、脆もろい杯なのにちゃんと酒が溢たえられた。けれども車力ワインがその葡萄酒ワインを救い主に捧げようとする、相手の姿は消えていた。ぐるりを見回したがどこにも見当たらなかった。さてそれからというもの輓馬ばんばたちは楽たのしと荷馬車かまの重荷おもを牽ひいて行き、やがてぼつんと建っている小さな教会へとやって来た。これは既にポニファチウス39の時代この荒涼とした森の奥に建立されたとか。輓馬たちが教会の傍で脚を留めたので車力は、これはここで感謝の祈りを捧げよとの天の啓示だ、と悟り、中に入った。すると、堂内に安置されているマリア像が先ほど現れて救いの手を差し伸べてくれた優雅な女人じよにんとそっくりであることに気付いて仰天した。跪ひざまずいてお礼を申し上げ、あの奇蹟の器うつわ、花の杯を祭壇に置いた車力は、それから出逢う人ごとに崇高な奇蹟を物語った。間もなく救難のマリアのありがたい御力に縋ろうと、遠近おとちから信徒の群れがどっと押し寄せるようになった。ちょうどヘンネベルク地方のグリーンメンタールで起こったこと（DSB七三五）と同様で、ここは巡礼地となり、救護所ができた。教会の壁には新たにたくさんの扉が作られ、四壁はここへ詣でて癒やされ帰って行った蹇者あしなえたちの撞木杖しもくづえで覆われた。やがて女子修道院と壮麗な新教会が建立され、薔薇ローゼンキルヒェの教会と名付けられた。なぜなら七十四の石の薔薇がその軒蛇腹を飾ったからである。六人の司教座聖堂参事会員のための館も造られ、莫大な財宝が集まった。これはまだ同地に埋藏されたままだとか。栄光と敬虔けいけんな奇蹟信仰はもうとつくに消え去って久しい。劫略の時代が襲来すると救難のマリア像は隠されたが、その後世に出てハイリゲンシュタット40へと動座し、同地で今日に至るまで篤信のキリスト教徒の崇敬を集めている。

四〇〇 乙女イルゼ

巖だらけのプロッケン山(36)の高みから溪流が迸り、急な滝つ瀬となってターレ(37)へと流れ下って行く。これがイルゼ川である。下の谷間の、かつてのイルゼンブルク修道院から程遠からぬところに鉄製の十字架を戴く険しい巖根が屹立している。これはイルゼン山の巖という。この巖は溪流の女の水の精、乙女イルゼの棲処である。しばしば彼女は月明の夜か暁刻に巖の中から出て来て清らかな流れで水浴をする。幸いにもその姿を目にする——ただし、こうしたことは滅多にない——ことのできた者は、彼女に裕福にしてもらえる。イルゼはハールツの王の息女だったが、ある邪な魔女に妬まれて巖に変えられたのだそう。救済される時が来るまでこうしていなくてはならない。完全に純潔で徳高く、乙女イルゼと同様に美しい若者だけがそうできる。つまり、この若者はそれまでに一度も恋されたことがなく、ひたすら愛を捧げる最初の娘がイルゼでなくてはならない。かつてある炭焼きが早朝に道を外れてこの木の生い繁る谷間に迷い込んだことがある。彼は乙女イルゼに出逢い、挨拶をした。彼女が手招きをしたので、その後随いて巖まで行くと、これまで見たことのない扉が巖にあるのに気付いた。この門の傍らでイルゼは炭焼きの背囊を取り、巖の中に入った。間もなく出て来た乙女イルゼは背囊を返してくれたが、家に帰り着くまで背囊を開けてはいけません、と言った。背囊は初めの内は軽かったが、歩くに連れて重くなった。中に何が入っているのか、炭焼きは一步一步重さが増すことに知りたくて堪らなくなった。もしかしたら彼女は自分に悪ふざけをして、石ころを入れたのかも、とささえ考えたのである。そこでイルゼ橋の上で立ち止まり、背囊を開いてみると、入っていたのは団栗と椀の毬果ばかりだった。「こんなつまらないものをどうして運ばにやなんねえ」と言うなり、炭焼きは中身をイルゼ川に振り落とした。すると河原の石に当たってチリンと音が聞こえ、純

金のように何かがびかつと光つて、消えた。急いで背囊を閉じると、まだ幾つか団栗がころころぶつかり合った。家へ帰つて調べると、それは皆金貨だった。それでもこの残りだけで炭焼きが裕福になるには充分だった。

四〇一 レーゲンシュタイン城の井戸の亡霊

レーゲンシュタインあるいはラインシュタイン⁽³⁸⁾というのは下ハールツのごく古い巖石城^{がんせき}である。ハインリヒ捕鳥帝^{デア・フインクラー}の時代に築かれたもので、全体が巖^{いわ}から斫^きり出された。ここを居城とした伯爵一門は紋章に牡鹿^{ヒルシユ}を入れていた。この一門でその名をフリードリヒという人は奥方との間に嗣子がなく、二人は自分たちで一族が絶えることを憂えていた。さて、レーゲンシュタインには深い巖井戸があり、そこには祖先の亡霊が呪縛^{ヒルシユ}されていて、時時忠告をしたり、未来のできごとを予言したりした。そこでフリードリヒ伯爵の奥方⁽⁴⁰⁾は夫に、一族が存続するのは無理なのか、どうか亡霊に訊^きいてください、と頼んだ。——そこで聖母マリアの日の真夜中、フリードリヒ伯爵が井戸に近づくと、祖先の亡霊が現れ、「そなたらの望みは成就するだろう」と言った。伯爵が亡霊に、憩いと救済の希望はないのですか、と問うと、亡霊は「このラインシュタイン城が瓦礫^{がれき}と化せばもう、そういたせばわしは安息を見出すだろう」と答えて姿を消した。これはあまり見込みのない言葉だった。なにしろこの城塞、この巖石城がいつの日か瓦礫と化すなんて想像もできない、と思われたからである。その年の内にフリードリヒ伯爵の奥方は伯爵に跡継ぎを生んだ。元気な男の子でコンラートと命名された。その翌年、また男児が生まれ、ヘルモルトと名を付けられた。この子の誕生の際、祖先の亡霊は井戸の中に出現していわく「わしの名を名乗るこの子こそわしの救済を実現してくれるだろう」と。そこで井戸の亡霊がかの悪逆無道^{あくぎくむどう}だった祖先ヘルモルト・フォン・レーゲンシュ

タインであることが明らかになった。次子ヘルモルトは躰しづけを受け付けられない少年で、やがて出奔して盜賊団の首領となつた。両親が死ぬと、ヘルモルトは兄のコントラートに遺産の相続分を要求、拒否されると、手下どもを糾合きゆうごうして城を制圧、兄から相続分を無理やりせしめたが、その後仲直りもして、兄を追剥ぎ行為に誘い込んだ。その結果ブラウンシュヴァイク公が城を包圍、占領、強盜の巢窟かんとくを完膚無きまでに破壊した。かくして祖先の亡霊はようやくレーゲンシュタインの井戸から解放され、永遠の憩いとわを授かつたしだいである。

四〇二 悪魔の壁トイフェルスマウアー

ブランケンブルク近郊(42)の古き巖石城がんせきレーゲンシュタインからゲルンローデとバレンシュタットの方角を望むと、これらの町とクヴェードリンブルクとの間に高く尖つた巖山(43)が連なっているのが見える。遠見にはところどころ崩壊した壁の廢墟はいきよそっくりである。これらは砲撃で突破孔つらを開けられた昔の城壁に似ており、さまざまの幻想的な嗜好かっごうをしている。伝説にいわく。主なる神が地をお創りつくになつた時、元祖共産主義者(44)たる悪魔は分配を要求、早速このハールツの麗しき地域で自分の王国の境界を設け始めた。とりわけ、己おのが玉座の山プロッケンのあるハールツ山地、ターレ近くの悪魔の淵(45)、それから他にもかなりの場所——悪魔は今日に至るまでまだ全て放棄したわけではない——を自分のものにし、神様には平地を譲つたのだ。そしてお気に入り(46)の山地とそこにある悪魔の浴場トイフェルスバート、悪魔の寢台トイフェルスツット、悪魔の説教壇トイフェルスカンツエル、幾つもの悪魔の水車小屋の所有権を一層確実(47)にしておこうと、周りを巨大な巖壁いわかで囲い始めた。神様はしばらく悪魔の仕事を傍観まがわしていたが、とうとうけりをつけることにして、ちよいと睫まつげを動かしただけで壁を壊したのだ、と。ゲルンローデからクヴェードリンブルクへ徒歩道を行くと、壁の中央部を針の穴

を通るように通り抜けることになる。

四〇三 馬の足跡とクレートの淵

ハールツ山地の巖塊群の中でもターレ村近くで山の激流であるボーデ川が奔騰して穿った恐ろしい掘り鉢谷ほど数多くの伝説の舞台となつているところはない。昔むかしのその昔、ハールツ山地には巨人たちが蟠踞していた。こうした巨人の一人に綺麗な娘がいて、やはり巨人の息子である若者と恋をした。若者の名はヴィッティヒ、今日馬の足跡と呼ばれている巖根の向かいに棲処があつた。しかし娘の父親は二人の恋など歯牙にも掛けず、娘に厳しく禁じた。そこで巨人の乙女はひそかに家出をしようと決心、こうした状況であつてみれば父親が婚資など考えてくれるわけはなかつたから、これも自分で持つて行くことにした。そこで他の宝物とともに父親の重い黄金の冠を盗み、頭に被り、馬に乗り、恋人の棲処の近くに身を隠そうと巖だらけの山地に急いだ。しかし家出はほどなく知れて、追つ手が後ろから急迫して来た。ぐるりには巖また巖が聳え、谷底では黒黒と山の流れが渦巻き泡立つ、切り立った絶壁に突き出している高い巖頭で彼女は取り囲まれた。しかし乙女は馬に途方もない跳躍を強い、掘り鉢谷を跳び越えて、追つ手が跟いて来られない向こう側へ無事に着地した。ただ冠が頭から転げ落ちてボーデ川の渦に沈んだ。昔日のハールツ王の冠が相変わず深淵に眠っている場所は今日でも人呼んで冠穴という。馬が力一杯跳躍した折巖に刻んだ蹄の跡はありありと残っていて、ために辺り一円の荒荒しくも壮麗な巖塊群全体に「馬の足跡」なる名を与えている。この近くには「踊り場」といわれる場所がある。巨人の娘は、追つ手を免れ、恋人と一緒になれた嬉しさのあまりそこで踊つたのである。ここを悪魔の踊り場と呼ぶ者たちもいる。プロツ

ケン山頂の高みにある大きな悪魔アストイフェルステンフワフの踊り場の雛形というべきか。

ある時周辺の住民たちが、ハールツ王の黄金の冠を引き揚げたい、と思った。潜水者が募られ、ボーデ川の渦に跳び込むことになった。好きでやったわけではなかったが、潜水者は幸い冠を発見、片手を挙げ、冠のぎざぎざが水上に燦きらめいた。しかしその直後手から冠が落ちた。男はもう一度潜り、もう一度発見、光るぎざぎざを夥おびただしい群衆に見せた。——しかしまたしても冠が手から落ちた。なにぶんにも重かったからである。潜水者は改めてクレイトの淵深く(19)に潜ったが、二度と浮かんで来なかった。一条の血が渦から噴き上がった。冠を守護している地下の力が潜水者を殺した徴しるしだった。今でも一頭の黒犬が冠を見張っているそう。この身の毛もよだつ深淵の上には深沈たる静けさが支配していて、ボーデの川水だけが黒黒とした巖の上を絶えず滔滔とうとうと流れている。

四〇四 湧き出る銀貨

ボーデ川が馬ポストラップスの足跡の峡谷から奔出し、それまでよりは穏やかに流れ下って行く谷合いに、その昔貧しい農夫が住んでいた。農夫は娘を近くの森にやって薪たきぎを集めさせた。女の子は地面に落ちている大枝小枝で背負よい籠かごを一杯にすると、できるだけたくさん持って帰ろう、と手籠にもぎっしり詰め、それから家路についた。すると髪も髭ひげも雪のように白い小人の爺じいさんに出逢った。爺さんは「拾った薪は籠からうっちゃって、わしに随ついといで、もつといいのを見せたげる」と言った。そして女の子の手を取り、来た道を引き返してとある丘の麓ふもとに來ると、卓子テーブルが二つ置かれている場所を指さした。卓子テーブルの上には銀貨ばかりが大小入り混じって湧き出していた。銀貨にはごく古い銘が記され、ハールツ山地縁辺の都市ゴスラール(20)の紋章に描かれ、そこで鑄造された多くの貨幣にあるような

聖母マリアの像が刻まれていた。少女は湧き出る銀貨にびっくり仰天、怖がったが、小人はごく古いけれども今なおピカピカ光っているハールツ・ゲルデン銀貨を女の子の手籠に手ずからぎっしり詰めてくれた。しかし小娘は背負い籠を空にしたがらず、「うちでは小さい子たちにお乳を温めたり汁を煮たりしてあげるのに、それからお部屋を暖かくするのに、薪がやっぱり要るの」と言った。——すると小人はそれで打ち切りにして、娘を家へ帰らせた。この子が自分の好運を話し、その噂が村中に拡がると、大変な競争がおっぱじまり、我こそ一番乗り、とばかり意気込んで、火事かなんぞのようにおのおの消火用の水桶やら手桶やらを引っ提げて行ったが、小人の爺さんに逢えた者も、湧き出る銀貨の場所を見つけた者もいなかった。ブラウンシュヴァイク公はその古銭をまるまる一磅分（フント）購入、貨幣を金蔵に保管させた。

四〇五 娘たちの跳躍（五）

ゼルケ谷（タール）には、イルゼ谷（タール）のイルゼの巖（イルゼンシュタイン）にも似て、こごしい巖壁（いわかべ）がそそり立ち、その頂きにはやはり同様に鉄の十字架が飾られている。もう一つ、かつては仲間同士だったかのようないくらか低い巖がその向かいにある。この二つの巖の上にはそれぞれ足跡が一つづつ深く刻み込まれており、イルゼの巖の話のような伝説が語られている。

恋しい男が向かいの巖の上で待っているの、愛しさに駆（か）られたある娘が必死の大跳躍をし、こちらとあちらの巖に足跡を附けたそう。地域によっては、こんなことができるのは巨人の娘だけだ、とする。一説では、これは可愛い女の子が遊びの時に残しただけのこと、とか。つまり、ペータース山（ペル）から巨人の少女が来たのだが、遊び友だちがラム山（ベルク）山頂悪魔の風車小屋（トイフェルスマユール）の下にいるのを見つけ、思い切って跳んだのである。この子は、友だちが向

こうから手招きしていたけれども、しばらくの間決心がつかずに佇み、距離を測っていた。すると下の谷間でハールツゲローデの土地を耕していた下男がげらげら笑って「跳びな、跳びなよ、巨人のあまつこ」と呼び掛けた。そこで巨人の女の子は大きな体を谷に屈め、新鑄のスイスの貨幣に刻まれている乙女ヘルヴェツィアのように片腕を長く伸ばし、下男を馬たちや犁もろとも攫うと、前掛けにくるんで、これと一緒にびよんと跳んだ。それから二人の巨人の娘たちはちっちゃな人間、ちっちゃなお馬、へんてこりんなちっちゃな道具、ちっちゃな犁といった可愛い玩具で大いに楽しんだ。

四〇六 ファルケンシュタインとティーディアン

ハールツのゼルケ谷を見下ろす威風堂堂たるファルケンシュタイン城は世に遍く評判だが、とりわけこの城の名が喧伝されるのは、既に遙かなる昔から雄雄しきハールツの伯爵ファルケンシュタイン家の居城だったからで、中でもファルケンシュタイン伯ホイアーなる人はかの世に名高い古の法律書をザクセン宝鑑と命名、エッコ・フォン・レプカウなる貴族に編纂させ、ラテン語からドイツ語に翻訳させた。

ファルケンシュタイン城には城附きの精が棲んでいて、数数の妖かしごとを行つた。かつて一帯の伯爵や領主たち——中にはアンハルトのさる伯爵もいた——が数多くファルケンシュタイン城に集まって賭け事にいそしんだことがある。アンハルト伯は所持金を悉く失い、とうとう生やした髭を一本だか数本だか賭けの担保にし、これも摩つてしまった。この髭をあえて引っこ抜こうとする者はいなかったし、伯自身もそうしなかった。しかしその夜城の精がふわふわ訪れて賭けの担保を要求、これをせしめた。別の殿の話だが、錠の下りた部屋で眠っていたとこ

ろ、この精によって寝台から投げ出されたということである。もつとも精は精でも酒精アルコールのなせるわざだったかも知れない。ファルケンシュタイン城は今日なお見事に保存されていて、興味深い物がたくさん見られる。

ファルケンシュタイン城近傍にはティーディアン(50)の森があり、森には深い洞窟どうくつがある。ティーディアン洞と呼ばれている。これには少なからぬ伝説がある。洞内にはさまざまの豊かな財宝の他に全身黄金でできた男子像がある。幸いこの像の一部を取って来た者が、金細工師がやるように成分を調べたところ、精錬の度がまたと比類無い黄金だった。また、例の魔法の花をうまく見つけることができたある羊飼いが、このティーディアン洞をも発見。鉄の洞門が開いて黄金をどっさり手に入れた。クヴェードリンブルクのある金細工師がこれを羊飼いから買ったのだが、羊飼いは金細工師にどこで手に入れた隠し立てをしなかった。金細工師が「もつと持っておいで」と言ったので、有卦うけに入った羊飼いは相変わらず魔法の花を持って洞窟に行き、もつと持ってきた。たまたまファルケンシュタイン伯が装身具を求めにこの金細工師の許もとに立ち寄り、極上の黄金製の物を望むと、金細工師は「極上の黄金はティーディアンから出ます」と言った。——「なんと、ティーディアンからとな。わしの領分にある森の」と伯爵はびっくりして問い返し、羊飼いの好運の話を知ったのである。伯爵はこの好運を羊飼いと分ける気は毛頭無く——伯爵がたのような上つ方が下下しもしもと物を分かち合うなどということはどこでだって決してありはしないし、金輪際友だちにはならないからで——これを独り占めにしたかった。そこで羊飼いを呼びつけると、なにゆえ自分（伯爵）の山から黄金を運び出したのか、と容赦無く糾問きうもん、ただちにそれを見つけた場所を教えよ、と命じた。悪事を働いたなどとは思ってもよらず、親切な山の精が恵んでくれた物を貰もらったに過ぎなかった羊飼いは心底震え上がり、手にしていた帽子を取り落とした。すると伯爵の飼いの猿が跳びついて帽子を奪い、それを玩具おもちゃにし、「帽子に挿さしてあった」魔法の花を噛かみ裂いて、ずたずたにしてしまった。羊飼いは従順しゆんに峻厳しんげんなご主君をティーディアンに案内し、洞

窟を見つけどもしたが、以前は開いて中へ入れてくれた鉄門は無く、険しい巖壁(いわかべ)が行く手を阻はまんでいた。

伝説にいわく。ファルケンシュタイン城に一人は警者(めし)、一人は蹇者(あしなえ)、一人は聾啞(ろうあ)の殿が三人生まれ、城主となるまで、ティーディアン洞はその財宝を守り通さなければならぬ、と。こうしたことはいまだかつて起こっていない。

四〇七 櫃びの中の神

ハールツゲローデとギュンタースベルクの辺りにごく古い村があり、ヴァーターレーベン(60)(ヴァッサーレーベン)という。この村に、高德なハルバーシュタット司教フリードリヒの時代、二人の信心深い姉妹が住んでいた。一人はかつがつではあったが、まあ、なんとか暮らしており、もう一人はせつせと働いていたのに、生計は苦しくなる一方だった。そこで少なからず嘆き、姉妹を羨み(うらやま)、口に出してそれを訴えもした。困っていない方の姉妹がこう言った。「なんだってあたしを羨むのさ。あたしやあね、主なる神様を櫃に入れてあるんだよ。神様はあたしの持ち物一切適切祝福なさって、あたしが眠ってる間に幸せを恵んでくださる」。貧しい姉妹はこの言葉を真に受けて、復活祭(オーステルン)の夜食に「教会へ」行った時、聖餅(ホステア)を呑み込まないで口に含んだままにし、それからこっそり布切れにくるんで持ち帰り、櫃にしまった。そうして二、三日後櫃の中の神様が何か大した品を授けてくれたかどうか確かめようとしたところ、麦酒樽(ビールだる)の前に聖餅(ホステア)を埋めたマルク地方のツエーデニックの女(D S B三五〇)の時みたいに、聖餅(ホステア)から血が浸み出して——くるんである布全体がぐっしり濡れていた。仰天した女は夫を呼び、夫は司祭に、司祭はハルバーシュタットの司教にこれを見せた。そこで境界の坊さんがたが全部集まり、司教を先頭に行列

して、この聖餅ホステアを推戴、聖歌を歌い、燃える蠟燭ろうそくを手に手に、ハウスラール（ホイデバーと言いう者もある）まで練れんつて行いった。本当はハルバーシュタットへ持つて行くつもりだったのだ。ところがその教会の祭壇ホステアに聖餅を置くと、もうそこから引き離はなすことができなくななった。で、聖餅ホステアをそこに留とどめざるを得えず、聖餅ホステアはずつとそこで血を流ながし続つけた。かくしてこの地へ大勢の敬虔けいけんな巡礼者じゆんりしやが引きも切きらずに詣よつたので、その献金けんぎんですぐに修道院しゆどういんが建立けんりやうされた。神様かみさまを櫃ひつの中に欲ほしがった例れいの貧しい女むすめに聖なる血ちが何か良いことをしてくれただろうか、伝説でんせつは何も語かたっていないが、願ねがい事は叶かなったのであろう。

四〇八 死人トイデシヴェルクの道

ヴァーターレーベンから程遠ほどとほからぬところにあるロツトレベローデ村ドーフの近くに、池ツェーが一つと人呼ひとよんで死人トイデシヴェルクの道ストという凹道くぼみちがある。数あるハールツの伯爵グラーフの中でシュトールベルク伯爵グラーフボート七世（64）、その舅うぢシユヴァルツブルク伯グラーフハインリヒ（65）、並びに剛胆たけなま伯グラーフと添そえ名なされたホーンシュタイン伯グラーフハインリヒ（66）が領土相互相統あひた契約者けいぎやくしやとしてハルバーシュタット司教ビショップブルヒャルト三世（67）に対して戦いくさつた。この司教は黄金オールドネーアウエの沃野わくやで数数の劫略せつりやくを働こき、狼藉ろうぜきの限かぎりを尽くしたのである。伯爵たちはハールツ山地に幾つも道を切り開ひらき、この凹道くぼみちで司教の軍勢ぐんせいに襲おそい掛かかった。そして夥おびただしく屍骸しかいの山を築たき、七百人以上を捕虜とらとし、残余ざんゆをかの池ツェーに追おい込んだ。以来凹道くぼみちは死人トイデシヴェルクの道ストと呼ばれ、夜ともなればしばしばこの道で合戦がっせんの荒荒あはしいどよめきが聞こえ、亡霊むしやうたちがお互あひたいに激あしく闘たたかう姿すがたが見みられた。

四〇九 踊りの池タンツタイヒ

ザクスヴェルフェン村の傍、ノルトハウゼンからイーレフェルトに通じる街道沿い、険しい石灰岩の巖壁の直下に広さ六モルゲン以上の池がある。昔この場所に旅籠屋が一軒建っていて、毎週日曜必ず踊りが行われた。本来ならこれ自体は罪深いことではなかったが、踊り熱が高じた余り、人人は教会にいる時からもうびよんぴよこ跳ね始めたもの。最初こんな始末になった時は嵐が襲来、一本の木に雷が落ちた。二度目には地震が起こって、梁という梁がみしみし音を立てた。三度目、踊り手たちがこうした予兆に平然としていたので、主は嵐と地震を同時に送ったもうた。雷が旅籠屋を直撃、地震が栗士たちと踊り手たちを残らず奈落の底に埋めた。旅籠屋のあったところには深い池が生じ、今日に至るまで踊りの池と呼ばれている。池には夥しい魚が棲み、中にはごく歳古りたものもいるとのこと。何年も前この池でだれにも正体の分からない謎めいた生き物が見掛けられた。捕まえようとしたが、潜ってしまい、二度と現れなかった。踊りの池の水は黒黒として不気味である。小舟で池を渡ろうとすると、小舟がぐらぐら踊りだす、とも伝えられる。池の傍には牝山羊穴なる洞窟があり、池の水がここに奔入する由。

四一〇 花冠クヴェーステ

ハールツ山地の縁、ロスラとヴァルハウゼンから程遠からぬところ、クヴェーステン山の頂きに城の廢墟がある。クヴェーステン山はその昔陰鬱山と呼ばれていた、ということ、山裾のクヴェーステンベルク村はかつて町だったそう。

いつの頃の城主であろうか、まだいとけない息女が城から遊びに出て、花を探す内、城の周囲の森で迷ってしまった。幼い姫君が帰って来ず、行方不明となったので、城主夫妻は娘の身を氣遣つて大層心配し、召使いを悉く捜索に送り出した。ある炭焼きが深い森の中で娘を見つけたが、この子は無邪気に摘んだ花で冠を編んでいた。炭焼きは子どもの氏素性については何も聞き出せぬまま、とりあえず自分の小屋へ連れて行き、食べ物を与え、面倒を見てやった。何分そこは人里離れた森の奥だったので、行方不明の子どもを人人が氣遣つたり探し回つたりしていることなど何も聞こえて来なかつたが、やがてマンスフルト伯領の村ロータの村人らがこの女の子がある草原でまたしてもせつせと花冠を編んでいるのを見つけ、炭焼きの小屋へ案内された。村人たちは子どもの行方不明事件を知っていたから、炭焼きにいろいろ問ひ質し、彼がこの子が森に独りでいるのを見つけたことを聞かされた。そこで一同は子どもを連れてフィンスタールベルクへ急いだ。この時炭焼きは女の子が編んだ冠を頭に被っていた。こうした花冠は当時クヴェーステと呼ばれた。子どもが無事に戻つたので城では大喜び。城主の騎士は炭焼きとロータの村民に姫が発見された草原を贈り物とし、姫が見つかった日である聖霊降臨節の三日目に毎年祭を行うよう取り計らわせた。城址——というのは「城が無くなつた」今日もなおお祝祭が行われているからだ——へ若者たちは太い柏の樹を引っ張つて来、馬車の車輪ほど大きい花冠を梢に飾り、これを立てる。記念の弥撒さえ捧げられる。さて、城主の騎士は以来自城をフィンスタールベルクではなくクヴェーステンベルクと呼ぶようになった。民衆は今日なお荒涼とした廢墟をクヴェーステと称する。

四二一 発祥シュヴァムンシュロスの城アンハルト

フアルケンシュタイン城のほんの近く、たった半哩マイルしか離れていない大きな里山ハウスベルクの上に城の僅かな名残がある。この城こそいまだに栄えている王侯一門、かつて全ハールツに覇を唱えた一族発祥の地である。すなわちアンハルト(23)で、遙かな昔「樹木オーネ・ホルツの無い」碧玉ヘンリッヒスの巖根いわねに築かれたので、オン＝ホルトといわれた。山上には極めて深い巖井戸がある。これは長いこと埋まっていたが、近世底まで掘り返された。井戸には宝が隠されている。これは釜かまに入っているのだが、いまだにだれも引き揚げる事ができないでいる。かつてある団体が坑夫を一人井戸に降ろそうと計画した。この坑夫は必要な呪法を無事にやってのけた。すると、なんと、本当に釜が上がり始めた。これには昔のターラー銀貨と金貨がぎっしり詰まっていた。そしてもうちょっとで掴つかめるほど坑夫に近づいた。坑夫が手を差し伸べて袋に入れようとすると、釜はつんと澄ました美女みたいにすつと退き、それからまた近づくという具合におちやらかし続けたので、とうとう坑夫はこんな悪ふざけに堪たりかね、一言呪詛じゆを吐いた。ドッスン、途端に釜は奈落の底へ。坑夫の耳には長いこと金貨銀貨が転がって井戸の巖壁にリンリンと当たって鳴る音が聞こえた。井戸の近くには平鍋プランネグアイゼの原なる草原がある。この原に金貨銀貨で一杯の醸造用鍋が隠されているから、というのが名の由来。魔法で呪封された山の宝が隠されている、との伝説はハールツ山地一帯とその縁辺には際限なく語られているが、これもその類たぐいである。

四二二 アンハルト城のファウスト博士

冬のこと、アンハルトの伯爵の許へ高名なファウスト博士がやって来たことがある。ファウストは伯爵の奥方が妊娠しているのを知り、「身持ちの女性には珍らかとは申せませぬか、何か特別に召し上がりたい、欲しいと思し召す品はござるまいか、もしおありなら魔法を用いて調達いたしましょうぞ」と言った。伯爵夫人はこうした懇切な申し出を喜んで受け、こう返辞した。「水気のないお砂糖菓子や乾いた胡桃などではなく、葡萄や桜んぼ、桃といった新鮮な果物が戴きましたらねえ、欲しくて欲しくて堪りませんの。でも、こんな厳しい冬の真つ最中ですもの、いかにあなた様でも、それから他の魔法使いのかたでもこうした物を取り寄せることはおできになりませんでしょう」。するとファウスト博士は白銀の皿を三枚手に取り、それを食堂の窓の外へ置き、何か呪文を唱えた。そして、一枚目の皿に採れたての林檎、梨、桃が、二枚目の皿に桜桃、杏、李が、三枚目の皿に青い葡萄や緑の葡萄が山盛りになると、これらを早速室内へ持ち込ませ、「ご斟酌なく召し上がれ」と言った。伯爵夫人は大層喜んでそうした。

ファウスト博士がアンハルト城に暇を告げる時が来ると、彼は伯爵夫妻に「ご散策がてらてまえに随いていらっしゃってはいかが。さすればおもしろいものをお目に懸けましょう」と言った。伯爵家の従者たちも同行してのこととなり、皆が城門の外に出ると、ロームビュールという丘の上に新築の館が聳えているのが目に入った。館を取り巻く広広とした濠には水鳥が何羽も泳いでいる。館には塔が五つあり、一行が近づくと、二つの門と空濠が珍獣・奇獣の飼育場となっているのが分かった。中には、お互いに危害を加え合うことなく、尾無し猿や尾長猿、熊、羚羊、駝鳥などが歩き回ったり、跳びはねたりしていた。広間の一つには選り抜きの朝食が待っており、ファ

ウスト博士の学僕クリストーフ・ヴァーグナー⁽⁷⁾が給仕役で控えており、目に見えぬ楽士たちが音楽を奏でていた。料理といい葡萄酒^{ワイン}といい、素晴らしいもので、だれもかれも上上の機嫌で満腹した。——一時間以上も滞在してから一行がこの館の外へ出て、アンハルト城にまた近づきながら、新築の館を振り返ると、銃や砲を撃つようなパンパン・バリバリという音とともに館は焰^{はのち}に包まれ、ファウストとヴァーグナーは消え失せていた。そして皆物凄^{ものすごい}い食欲を感じた。だれもかれもひもじくてならなくなり、もう一度朝食を摂^とらずにはいられなかった。なぜなら彼らが先刻食べたものは一切まやかに過ぎなかつたからである。

四一三 「これぞかの男の地所なる」

皇帝ハインリヒ⁽⁷⁸⁾がその所領ヴァルハウゼンの黄金^{グールドネーアウエ}の沃野に御座所を設けていた時、臣下の一人に恩寵を示そうとした。するとこの男は「黄金^{グールドネーアウエ}の沃野に接する地所で、それがしが一シェツフェルの大麦をぐるりと播^まけるだけの広さをご下賜くださいませよう」と言上した。皇帝がこの請願を嘉納すると、当該騎士は普通に平らに播種^{はし}しないで、線状に長長と播いて行き、伯爵領ほどの地面を囲い込んだ。これに腹を立てた皇帝扈從^{こじやう}の騎士の面^か面と従士たちは「あの荒武者め、なんとも図凶しく事を運びましてござる」と皇帝に訴えた。しかし、皇帝は呵^か呵^か大笑していわく「約束は約束。かの男がぐるりと種を播きし分、これぞかの男の地所なる⁽⁷⁹⁾」。以来新しい伯爵領はその名をマンスフェルト⁽⁸⁰⁾と名付けられ、連綿と続いた。歴代伯爵の家紋には大麦の粒が配置されている。もつとも紋章学者たちは、その後その由来を忘れてしまった上、はつきり描かれてはいない粒粒なので、これを菱型^{ヴェックゲン}図形と称しているが……。彼ら紋章学者は同様に、古^{いにしよ}のヘンネベルク伯爵家の紋章にある帽子^{いばし}を貫く孔雀^{くわんく}の尾羽根を意味もない

一対の蒲の穂だ、と考えており、その他まことに夥しい昔の家紋の解釈でこうした過ちを犯している。——信頼するに足る過去の史家たちは、過去の紋章学者同様、マンスフェルト家の始祖を皇帝ハインリヒの時代より遙か前としている。史家たちによれば彼らは既に円卓の騎士たちの中で武勲を輝かせたとのこと。

四一四 マンスフェルト城

マンスフェルト城が建っていた場所にはその昔、かの聖ゲオルクに斃された無翼龍が——それも巨大な科の木リンデンの森の中に——巣くっていた、という伝説がある。城山は今日に至るまでリント山と呼ばれている。そして聖ゲオルクはマンスフェルト伯爵家の守護聖人として極めて熱烈に尊崇され、無翼龍を殺している彼の肖像が騎馬のベルクも徒歩立ちのものもマンスフェルト伯爵領鑄造の貨幣に刻印されているし、そればかりか小都市マンスフェルトの教会は聖ゲオルクに奉獻されたものである。事実、町の住民はこの聖人をマンスフェルトの伯爵様の一人と思いつむほど讚美渴仰し、家家の窓硝子や煖炉、建物の外壁、柱、橋梁など至るところにその像を描かせ、立てた。マンスフェルト城は大規模で、壮麗にして堅固、世紀が改まるたびに拡張され、装飾の限りを尽くし、数数の彫像も飾られた。人人は現の証拠として修道士と修道女の頭部の像を指し、こういう言い伝えがある、と物語る。修道誓願を立てた身ながら相思相愛の間柄となったこの二人は城に幽閉された。そしてうら若い修道女は哀れにも暗い部屋で縊死し、修道士は城から跳び降りたのだ、と。比翼連理の恋の道に殉じた二人の亡霊は、以後、城の随所に出没することに専念した。また陽気な飲酒像が幾つも入口を飾っていた。なにしろ伯爵がたは天晴れな酒徒で、少なくともあのクレッテンベルク伯のような所業に及んだからである。かつてルター博士が招かれてこの高貴な殿たちの許

を訪れたことがある。階段を昇っている時にもう葡萄酒が上から降って来た。階上では吞兵衛どもがふらふらとこ
酪酩めいて。そこでルターは大声でこう予言した。「なんとあなたがた殿輩とのぼらはけっこうな肥やしを撒まいておいでだ。撒い
た跡地には上等の草が育つでしようて。」——そしてまさにその通りになったのだ。マンスフェルト城の階段や廊下、
中庭に草が——丈高い草が生い繁しげるようになってから久しい。伯爵がたはとつくの昔に死に絶え、彼らの城の黄金
の広間は廢墟はいきょと化している。

四一五 ヴェルフエス森ホルツの石と会戦

小都市ヘットシユタットから程遠からぬヴェルフエス森ホルツの近くに石が一つある。ヘルムスドルフとゲルプシユ
テットの耕地境界に位置し、ツアーベンシユテットからヴェルフエスホルツへ通じる環状道路からほんの二、三歩
離れているだけ。この石は甚きだ有名である。

マンスフェルト伯爵家の祖先ホイアー伯(86)は皇帝ハインリヒ五世(87)の元帥フェルトマルシヤルであり、皇帝軍司令官として、グロ
イチユ伯ヴィープレヒト(88)麾下きか下のザクセン軍に戦いを挑んだ。ホイアー伯はかの偉大なローマ人ユリウス・カエサル
と同様帝王切開で世に出た。(89)ヴェルフエスホルツの会戦が始まろうとした時、伯爵は前述の石のところを馬を寄せ、
昂然としてこう宣言した。

我、ホイアー伯、「女により」生まれざりし者、
いまだ戦いに敗れしことなし。

この石を我のかく掴みしごとく、
この戦いも我がものとならむ。

そして鉄のような片手でさながら麵麩めんこの捏ね粉のように石を掴み、会戦の幕が切つて落とされた。しかしながら伯爵の確信と自負は不倶戴天の敵グロイチュ伯ヴィープレヒトの前で潰えた。ヴィープレヒトは、極めて勇猛な反撃に遭つたものの、一騎打ちでこの武將を斃した。ザクセン軍は勝ち鬨を揚げ、皇帝軍は戦場から敗走、多くは命だけは助かった。ある柳の樹が阿鼻叫喚の合戦の最中に「ヨドウーテ、ユドウーテ」——遙か昔の救いを求める叫び——と叫んだ。これが勝利に繋がつたのである。その後ザクセン軍は勝利記念柱を立て、これをヨドウーテと名付け、さまざま畏敬の念を示した。後代礼拝堂がその場所に建立された。頭の良い僧侶たちはこのヨドウーテを救いの徴にでっちあげ、愚昧な民衆はこれをヨドウーテなる新規の聖者だと勘違いした。ヴェルフエスホルツの石だが、これは現在なおその場所にある。厚さ、幅ともほぼ一肘尺で、英傑の拳の痕は深く残されている。石質は白い珪酸石の類で風が来ると柔らかくなる。棒などで叩くと、中が空洞であるかのような響きがある。

四一六 アルンシュタインの亡霊たち

アイネ川の谷を見下ろすハルケローデ村の近くにマンسفエルト家の城アルンシュタイン(註)の廢墟が鎮座している。皇帝カール五世の時代ホイアー伯なる御仁がここに居を構えていた。彼はその高名なご先祖であるヴェルフエスホルツの会戦で斃れたかのホイアー伯と同様、この皇帝の元帥にして敵軍の脅威だったが、まことに苛酷、

残虐、専横であり、多くの虜囚(とりこ)をアルンシュタイン城の地下牢で衰弱するに委せた。加えてその奥方も同様に厳しく無情な女だった。そのためこの兩人は生前からたびたび呪詛(じゆそ)されていたが、死後その呪詛が成就して、夫妻は高い城壁内部の隅に向かい合つて坐り、泣いたり呻(うめ)いたりする羽目となった。伯爵夫人はしょっちゅう糸紡ぎをしているが、最後の審判まで際限もなくそれを続けなければならぬ。

城山の麓には修道士の幽霊が徘徊する。そして七年毎に一度城に登り、城中を喧(かまひ)しく騒ぎ廻る。日曜日に生まれた子どもにはその姿が見えることもあるが、他の者には見えない。もつともこの修道士を目撃するのは別段得でもなければ、楽しくもない。なにしろこれを見掛けると言いようもなくぞつとするからである。

四一七 一度に九人の子どもたち

クヴェーアフルト(93)の伯爵にその名をゲープハルトという者がいた。弟は——アーダルバート聖者に次いで——異教徒プロイセン人の間にキリスト教を弘めた使徒ブルーノ聖者(94)である。伯爵ゲープハルトは峻厳な上、頑冥固陋、軽挙妄動の殿だった。さて彼がしばらくの間領地を留守にした折、奥方——ザクセンの名家の出——がクヴェーアフルトの館で一度に九人の赤児を出産した。かくも豊かなお恵みに奥方および侍女たちは少なからず驚愕(きやうがく)、主君たる伯爵が穏やかならぬ反応を示すだろう、と恐れた。というのも伯爵はまことに妙な御仁で、これまでにも再再、双子とか三つ子といったように一人以上の子を産む女どもはけしからぬやつらだ、と言明していたからである。それなのにこれは三掛ける三。伯爵は、全くもつて多過ぎる、これには良からぬわけがあるう、と考えるに決まっていた。そこで女たちはお互い相談し、最初に産まれた上、一番丈夫な子だけを残し、残りの八人は始末することに

した。侍女の一人が言い付けられ、八人の赤児を同じ釜かまに入れて運び出し、石を重しにして近くの城の池に沈めることになった。ところが運び役の侍女はブルーノ聖者に出くわした。聖者はその頃クヴェーアフルトに住んでいて、朝まだき美しい噴泉のほとりをそぞろ歩きしながら、祈りを唱えていたのである。赤児の泣き声を耳にした聖者は「そなたは何を運んでいるのだ」と侍女に訊ねた。どきんとした女は「生まれたてのヴェルフリン（仔犬）でございます」と言いざま、急いで通り過ぎようとした。けれどもブルーノは被せていた外套マントを釜から取りのけるように強い、そして八人の赤児を発見した。「子どもたちの母親はだれか、正直に打ち明けなさい」と言われた侍女はなにもかもありのままに喋しゃべってしまった。ブルーノは侍女に固く口を閉ざしているように命じ、母親の意向に背き、噴泉の水を用いて、赤児たちが寝ている銅釜の中で子どもらに自身の手により洗礼を施した。そして我が名を取って子どもら全員をブルーノと命名、次いで正直善良な人たちに庇護と養育を委ね、これら一切を再びプロイセン人の許もとに赴く時が来るまでごく内緒にしておいた。独り取りのけられた男の子はブルクハルトと名付けられた。後の皇帝ローターの祖父(96)がこれである。さてブルーノはこの国を出立しようとした時、兄にこの秘密を明かしたが、夫人が犯した非道な行為に報復しない、との約束を取り付けた。夫人は、子どもたちが死んだとばかり思い込んで、年来深い悔恨と胸を締め付けるような悲愁に苛さいなまれていた。こうしておいてからブルーノはいずれも同じ服装をさせた八人の子どもたちを城に連れて来させ、両親に引き合わせた。両親は、彼らが容姿とよい振る舞いといふ九人目の嫡子ちやくしとそっくりそのままのを目の当たりにして、悲喜こもごもだった。もつとも伯爵は奥方に全く罰を与えずにおいたわけではなかった。彼は妻のために一足の靴を新調させた。これは皮革ではなく、鉄でできていた。伯爵はこの鉄製の靴を灼熱しやくねつさせ、奥方は真っ赤に焙あけた靴をしばらく履かねばならなかったのである。なんといつても彼女が子ども殺しの相談に同意した、との理由で。この靴は、洗礼に用いられた例の釜とともに現在な

おクヴェーアフルトの町の教会に陳列されている。あの噴泉はいまだにブルンスボルの泉と呼ばれ、「ヴェルフリン」が沈められようとした城の池を人人は今日に至るまでヴェルフエンの池と称している。

クヴェーアフルト近くのラウター城にはちいぢやな鍵女なる幽霊が今なお出没する。

四一八 聖ブルーノと驢馬ヶ原

復活祭週の木曜、ブルーノ聖者が兄に別れを告げてプロイセンに旅立った時、彼は驢馬にまたがり、兄と大勢の殿輩が見送りに随行した。一行がクヴェーアフルトのすぐ背後にある牧草地に差し掛かると、聖者の驢馬が頑として動かなくなり、一步も進もうとしなかった。そこで見送りの人人はこれを、神がブルーノの旅をお望みにならぬ徴である、と看取り、城へ戻るよう意見した。しかしながら聖者は心騒いでならなかった。使命に駆り立てられたからである。使命とは殉教の死に他ならなかった。制止を振り切つてプロイセンに向かい、福音を説き教えたブルーノはかの地で殉教を遂げたのだ。彼は十八人の仲間とともに囚われ、酷い拷問を受け、体を切り刻まれて殺された。これは一〇〇八年、あるいは一〇〇九年ロシアとの国境に近いリトアニアで起こった。さて、ブルーノ聖者の驢馬が立ち止まった原——今日に至るまで驢馬ヶ原と呼ばれている——には礼拝堂が建立され、驢馬の霊場と名付けられ、復活祭後の木曜日には毎年惜しみなく贖宥が授けられたので、大層巡礼の参拝があり、夥しい善男善女の群れが四方八方から蝟集したものだ。とうとうこの日を目当てに歳の市が開かれるようになり、遂には三日にも亘つた。つまりは動かなくなった驢馬が民衆をこぞつて動かし、歩かせた、というだけで、こうした奇蹟は聖ブルーノの時代に留まらず、後世にもそここでしばしば発生しているようだ。

四一九 ゲホーフエンに出現した修道女の亡霊

クヴェーアフルトとヘルドルンゲン⁽⁹⁸⁾の間にあるゲホーフエン⁽⁹⁹⁾にフォン・エーバーシュタイン夫人フィリップピーネ・アグネスなる尊敬すべき貴族の女性が住んでいた。一六八三年のこと、修道女の姿をした亡霊が出現、彼女にこう囁いた。「夕方の六時にお城の中庭に行き、そこで莫大な宝物を掘り出しなさい。これはあなたへの贈り物で、他のだれの物でもありません」。この亡霊は小柄で、白装束、被^かつている面紗^{ヴェール}には赤い十字が記されており、手には数珠を提げ、当時の通常の服装に倣い小さな口許隠^{フオーアシネテニツクライン}して口を覆^{おお}っていた。フォン・エーバーシュタイン夫人の夫君は重病で床に就いており、夫人は夜の看護で疲労困憊^{こんばい}、それにひどく怖くもあつたので、修道女の要求に従わずにいと、大層悩まされる羽目に陥った。修道女の亡霊は実際に手を出し、彼女を打ったり抓^{つか}ったりし、財宝を掘り出せ、とせつついて止まず、肉体的な苦痛を与えた。またうるさく迫る一方、しきりにこう説明もした。「わたくしはトレプラ一族⁽¹⁰⁰⁾の生まれ。かつてわたくしどもの一門のものであったこの領地に住んでおりました。三十年戦争の最中わたくしは宝物を埋めたのです。掘り出しなさい。掘り出しなさい。あなたの懺悔^{ざんげ}聴聞司祭を、この城のだからを連れて行きなさい。危ない目には遭^あわせません。わたくしがあなたを守ってあげます。わたくしが宝を見張っている黒い犬を追い払ってあげます。宝を掘り出せば、二度とわたくしの姿を見ることはありません。宝を見つけたら、その上に前掛け^{エフロン}か手巾^{ハンカチ}を投げるのです。宝を掘り出しなさい。宝のところには指環^{ゆびわ}も三つありましてね、これはご家門に幸運を齎^{もたら}すでしょう。あなたが宝を掘り出したら、四年後にまたあなたの娘御に宝を掘り出させてあげます」。こういう調子で延延と続くのだった。奥方はこうひっきりなしに責め立てられてほとほと参^まりてしまつた。その後城の中庭を横切っている時、彼女は亡霊が礼拝堂の近くに佇^たみ、懇願の身振りで財宝が埋められてい

る場所を指さすのを見た。——いや、財宝が露わになつてゐるのを見もし、立ち去ろうと背中を向けた時、亡霊が裳袴スカートを纏つかんで引き留めるのを感じました。恐怖にとことん悩まされたフォン・エーバーシュタイン夫人は鬱鬱うつうつとして神経症になつたが、しょっちゅう亡霊が見えるのは変わらなかつた。他の者には見え、だれも信じてくれなかつたが、まだ言葉も話せない彼女の幼い息女だけがちいぢやな指で亡霊が立っている場所を指すのだった。亡霊の責め苦で夫人は絶望の淵に追い詰められた。これが四箇月に垂なんなんとした。夫人が櫓ぶりで城から出ようとした時、亡霊が橋の袂たもとに立っていた。そこで彼女は実弾を装填そうたんした二挺にしょうの拳銃けんじゆうを亡霊目掛けて発射した。しかしその結果はそれだけ一層肉体的な苛めがひどくなつただけだった。亡霊は苦しむ彼女の口や頬や胸を叩き、寢床の中でその体を投げ上げ、口を押さえ、夢魔アルプのようにのしかかつた。しかしとうとう亡霊は突然出なくなつた。奥方は教会に集まつた会衆の面前でお救いくださつたことを主に感謝しんかした。財宝は掘り出されないままに終わつた。

四二〇 生き続ける鴉かぎ

メルゼブルク(四)の城の中庭には伝説の永遠の証人として一羽の鴉(四)が生き長らえて行くことだろう。かつてこの城にティロ・フォン・トロータ(四)なる司教が住んでいた。短気で癩癩かんじやく持ちの殿だったが、慰みによく馴れた鴉を一羽飼つていた。ところがこの鴉、司教が放つておけないことをやらかすのだった。つまり他の鴉同様盗みを働いた。ご主人の司教が大事にしまつておいた貴重な指環ゆびわも掠め取かすつて、メルゼブルク城の高い塔の天辺に設けた自分の巢ねに運び込んだ。司教はいえは、指環を盗んだ泥棒は老齡の従僕に違いない、と思ひ込み、この召使きよしいを厳しく糾問きうもん、拷問に掛けて無理やり、罪を犯した、と白状させ、刑場へ連行した。老人は両手を天に挙げて無実を誓つたが——

さりながら刑吏の剣の下にその首は落ちた。しばらく経ってから嵐のために鴉の巢が塔から吹き落とされ、さまざま金銀の装身具に混じって、潔白なのにあの正直者の従僕が処刑される基となった司教の指環もその中に発見された。さしも峻厳な司教の頑かたくなな心もこれには雷に撃たれたように震駭しんがい、哀れな従僕への不当なしうちを懺悔ざんげして止まなかった。そして一族伝承の家紋を廃棄し、新たに創製した。盾型の中に指環を嘴くちばしでくわえた一羽の鴉を置き、上部の冠から胄飾かぶとりとして二本の腕と指環を掴つかんでいる二本の手が上がつているものだった。ティロ司教は、どこへ行っても己の非行を思い出し、常に懺悔するための戒めとして、この紋章を司教邸内外、大聖堂内、壁、部屋部屋、通路など、至るところに附けさせた。それから、自今ずつと生きた鴉を一羽城内に飼い続けるよう命じた。これは今日なお行われている。新たに創製された紋章はいまだに見ることが出来る。最も美しい紋章は司教ティロ・フォン・トロータのためにメルゼブルク大聖堂内に設置された青銅の記念碑上にある。

四二一 司教の猫

メルゼブルクにその名をミヒヤエルという司教があった。彼は一匹の牝猫を飼っており、この猫と極めて仲が良かった。ところでこれは尋常の猫ではなく、スピリトゥス・ファミリアリス(註)だったのである。ある時ミヒヤエル司教はメルゼブルクからライプツィヒへ旅した。とある丘にやってみると、なんとも奇怪なことに丘の上おびただに夥しい猫が群れていた。彼はこの猫の大集会に馬を近寄せて、こう呼び掛けた。「おおい、猫たち。おまえたちは残らず集まっているのかな」。すると猫の一匹が「メルゼブルクのミヒヤエル司教のこの猫以外は全員揃そろってまます」と答えた。邸に戻ると司教は飼ひ猫に言った。「なあ、おまえ、わしがライプツィヒへ出掛けた時、通りすがりの

丘で猫の総会が開かれているのを見た。そして、おまえだけが来ていない、と聞かされた。どうしておまえも出席しなかったのだね。こう言われた猫は司教に向かってなんとも厭わしい唾み声を挙げると、ぱつと窓に跳び上がり、そこから空中に飛び出し、二度と戻って来なかった。その後この窓には司教ミヒヤエルとその猫を描いた硝子絵が嵌められた。例の丘は猫山カッツェンベルクと呼ばれるようになった。

四二二 テューリゲン族とザクセン族の由来と争い

古伝説にいわく。ある種族が遠くの東国から十二隻の船に乗って今日リューベックのある地域にやって来た。この民族は自らをペトレオリ——小石族——と名乗り、その地域に居住していたテュリゲト族を駆逐した。テュリゲト族の男らは愚かにもお互いに争い合っていたので、テューリング——抜け作——と呼ばれた。テュリゲト族の方は、自分らを居住地から追った闘争好きの種族をザクセン族と呼んだ。あるザクセンの若者が——この太古の種族の風習に従って身に着けていた——幾つかの黄金の頸環や腕環と引き替えに一人のテューリングから一握りの土を買った。後者は気前よく相手の服の裾一杯に自分の土地の土を入れてやり、うまい取引をしたものだ、とほくそえんだ。ところがザクセンの若者はこの土を仲間の許に持ち帰り、土は磨り潰され、広大な地所に撒き散らされた。こうしてザクセン族はテューリングの土地を占拠・占有、これを耕作するに至り、原住民をハールツ山地の彼方に追い出してしまい、ウンシュトルト川の河畔、この川が今日のアイヒスフェルトを巡り流れている地域に、ザイレ川、エルベ川、ヴェラ川に至るまで住み着いた。一方テューリゲン族はさらに西方へ退き、Wで始まる八つの言葉でとりわけ言及・認知されている、麗しくまた豊かな土地を我が物とし、今もなおそこに住んでいる。この八

つ言葉と妙なる響きとはすなわち、草原、牧場、河川湖沼、森林、狩猟、葡萄酒、羊毛、小麦である。別してかの黄金の沃野——今日フランケンハウゼン、ザンガーハウゼン、ヘルドルンゲン、ゲホーフエン、アルシユテツト、ヴァルハウゼン、ティレダといった市町村、古の皇帝居城の数数、また少なからぬ著名な地域がある——はまことに至福の土地である。かつてエルサレムから帰還したシユートルベルク伯ボートはこの地を、パレスティナ全土よりも遙かに素晴らしい、と誉め讃えたもの。それゆえその昔のドゥーリゲン族は、ザクセン族やソルブ人を疎外するべく、ウンシユトルト川河谷に東方辺境に対する国境要塞を築き、これをシディンゲ——疎外の意——と名付けた。ここに彼らの統領が居を構え、王と同様支配した。このように統治を行った者の一人がフランク族の王侯一門の出身であるメロヴィヒで、彼はフランク王クロディオの妃——海辺で水浴びしていたところ海の怪物に襲われて受胎した——の子息である。メロヴィヒはドゥーリゲン族の地に砦を少なからず建設、エアフルト近郊には自分自身のために本城をも設けた。すなわちメルヴィヒの城がこれで、今日もなおメービスブルクと呼ばれ、人人はかつて城塞があった場所を示す。メロヴィヒの時代、神の筈といわれたフン族の王アッティラがドゥーリゲン族の地に侵入、暴威を振るつた。アッティラはイーゼナハに宮廷を開き、婚礼を挙げ、トンドルフ近傍で魚を獲り、狩猟を楽しんだそう、いまだにそこには玉座と呼ばれる場所がある。メロヴィヒにはヒルデリヒなる子息が一人あつたが、ろくでなしで、王にもならなかつた。テューリゲン族は別の主君を選んだ。その名はバジヌス。ヒルデリヒはバジヌスの許に来て、その妻を騙し取つた。亡くなつた時、バジヌスは三人の子息、バルデリヒ、ベルタール、イルメンフリートを残した。彼らは広大な王国を分割、テューリゲン族の地はイルメンフリートに相続された。イルメンフリートは東ゴート族の王テオデリヒの妹ないし妹の娘アマルバガを妻に選んだ。彼女は美しくもあつたが、高慢ちきだつた。ある時、夫の食卓に半分しか料理を並べなかつた。夫の領国

が半分しかないから、というのがその理由。夫が兄弟たちの死を惹き起す気になるようそのかしたのである。(19) ついでアマルバーガはイーリングという不実な相談役と結託して夫にまやかしの莫迦げた陰謀の数を吹き込んだ。その結果、イルメンフリート自身の義兄であるテオデリヒがテューリゲン族とイルメンフリートを撃つべくフランク族の軍勢を率いて来寇するという始末。これを聞いて喜んだのはザクセン族である。フランク族と同盟を結び、テューリゲン族と戦うことになった。かくして苛烈な争闘が何回も勃発、黄金の沃野は血みどろの野と変じ、ウンシュトルト川には戦に斃れた者の死屍累累、ために水流は堰かれた。フランク族の軍勢はこの屍の山を橋として川を渡り、イルメンフリートは部下とともに堅固な居城シャイドウンゲン指して遁走した。テオデリヒはフランク族およびザクセン族とともにこれを急迫し、双方に、シャイドウンゲン城を陥落させたら、ウンシュトルト川以遠の全域を両民族に授け、これを永代安堵する、と約束した。そこでザクセン族は猛攻を行い、フランク族は、彼らの強靱な体軀と精神、長髪、粗衣、大きな盾、重く頑丈な槍、腰に帯びたザクスと称する長い短刀に驚嘆した。ザクセン族は軍旗というか戦印というか、そうしたものを掲げており、これには一頭の獅子、一羽の鷲、一匹の龍が描かれていた。シャイドウンゲン城に追い詰められたイルメンフリート王は腹心の者を一人秘かに義兄の陣営に送り、アマルバーガと彼女の儲けた子どもたちのために慈悲を懇願した。テオデリヒの相談役たちはザクセン族およびザクセン族にテオデリヒが与えた約束に不平満満だったので、内内で和議が結ばれた。敵対し合っていた両者が、この邦に呼び込まれたザクセン族を排除しよう、と一致しただいである。ところで、あるザクセン族がテューリゲン族の一人の飼っていた鷹を捉えた。この鷹を返してもらいたい一心で、このテューリゲン族は相手のザクセン族の男に密約の一件を喋ってしまった。ザクセン族の男は急遽陣営にこれを注進したので、諸侯や隊長たちはどうすべきか鳩首協議した。何人かは、隠密裡に迅速な撤退を、との意見だったが、ハック(ハーデガスト

との説もある) 殿なる白髯(はくぜん)の武将が軍旗を擲(な)んで撤退反対を説き、攻撃を、それも敵側が眠(あ)っている間に恐ろしい騒音を立てて奇襲することを主張した。計画は実行に移され、「イルメンフリート」王は家族ともども命辛辛(からがら)逃亡し、ウンシュトルト川には鮮血が再び滔滔(とうとう)と流れ、ザクセン族はこの邦の主となつて土地を分け合った。彼らはこの勝利の日をコムニオ、すなわち「分け合い」と呼んだ。だれもが分け前に与(あ)つたからである。ザクセンの老将ハックはザクセンの城を築き、初代城主となつた。今日に至つてもザクセンブルクの両廢墟(はいきょ)(上の城と下の城)を民衆はハークの城と呼んでゐる。カール大帝(「シヤルルマーニユ」)がザクセン族の最古の国法であるザクセン宝鑑(シユビムル)を授けたのはこの城においてだ、との伝説がある。他の多くの城塞もこの時代にできた。しかしながら古王国テューリンゲンは滅びたのである。

四二三 ボニファチウスのプフェニヒ

後世、ウンシュトルト川流域のこの邦にボニファチウス聖者——テューリンゲン族にキリスト教を弘めた使徒——がやつて来た。これはフン族がドイツ諸邦を蝗(いんご)の大群よろしく侵し、荒廃させた時代だった。ボニファチウスは祈禱(きとつ)を捧げてテューリンゲン族が勝利するのを助け、その結果テューリンゲン族はフン族を何千と斃(たお)し、ためにウンシュトルト川は遙か下流まで血に染まった。それからテューリンゲン族は洗礼を受け、神の一人子を信仰した。こんな伝説がある。ザクセンブルクの城山の麓でボニファチウス聖者が異教徒のテューリンゲン族どもから嘲弄されたことがある、と。彼らはボニファチウスから金品を要求、説教は拒み、伝道者に石を投げた。そこで聖者はこの邦の全ての貨幣が石になるよう呪いを掛けた。するとたちどころにプフェニヒ貨はどれもこれも萎(し)んで

ちっぽけな扁豆レンズ豆に変わってしまった。ザクセンブルクやゼーゲ村の背後そびに聳そびえるアールンスブルク城下のポニファチウス山ベルグと呼ばれる傾斜地の森には今なおその名残が見つかり、人人はポニファチウスのプフェニヒと称する。——ポニファチウスがテューリングン族をキリスト教に改宗させると、カール大帝(「シヤルルマーニユ」)はこれを大いに喜び、庇護と援助を彼らに確約する使者をこの邦に遣わした。

四二四 髭ひげもじ(12)ゃのルートヴィヒとその子孫

皇帝コンラート二世(15)は親族の一人をテューリングンの邦に送った。その名はルートヴィヒ。長い髭を生やしているため、テューリングン族はこの人を髭もじグラウ・イム・バルドや伯と呼んだ。また、人当たりが良い上、適切な助言をしてくれたので好きになり、後には自分たちの裁判官に選んだ。コンラート二世は喜んでこれを承認、幾つかの所領を与え、テューリングンにおける代官ヴァイツェドムの一人、次いで邦裁判官ラフトリヒターに任命した。コンラートの後継者らもこうした所有権および地位を保全した。それからルートヴィヒはフリードリヒローデを見下ろす峰の上に城を建設したが、これが完成したのを目の当たりにすると、欣然きんぜんとしてこう叫んだ。「見よ、なんたる城か」と。そこでこの城はシャウアインブルクと命名され、やがてシャウエンブルクとなった。髭もじグライフ・イム・バルドや伯ルートヴィヒはうら若い寡婦かふツエチーリエと結婚、この妻は、金品、領地と領民といった夥おびただしい富に加え、ザンガーハウゼンの町を嫁資として齎もたらした。ルートヴィヒはこの妻によって子息を一人儲もちげ、やはりルートヴィヒと名付けた。この子はアルテンベルク山上の教会で受洗した。ポニファチウス聖者が初めてテューリングン族に福音を説いたのはこの山上であり、教会を建立したのはルートヴィヒ伯だった。伯爵は長子の洗礼日当日、マインツ大司教バルボの司式で教会を洗礼者ヨハネに奉獻

した。テューリリングンおよび近隣諸邦から参集した大勢の諸侯、伯爵、殿たちがこれに立ち会った。その後髭もじや伯ルートヴィヒは奥方の胎はらから二人の子息と二人の息女を授かった。子息の一人ペリンガーは母の遺産としてザンガーハウゼンをそっくり相続したが、父の死後すぐに亡くなった。ペリンガーが後に残した子息はコンラートといい——兄ルートヴィヒが彼からザンガーハウゼンを買取ったので——ハールツ山地縁辺にホーンシュタインを建設、ホーンシュタイン伯爵家の始祖となった。ルートヴィヒ（一世）の三人目の子息はハインリヒといい、ごく無口で静かな御仁だったので、衆人に、巻ラスき貝ペと、綽あだな名された。この人はラスペンベルクを作り、そこに居を構えた。髭もじやのルートヴィヒは三十年間テューリリングンの邦に住み、治め、この邦の首長として誠実に務めた。彼は皇帝ハインリヒ三世の葬儀列席のためシュバイアーに赴き、帰途マインツで没し、この地の聖アルバンス教会に埋葬された。アイゼナハのニコライ門の塔の傍にはいまだに長い髭を生やした彼の像が風雨に曝さらされて立っている。彼こそあらゆるテューリリングン方伯ランツグラーフの先祖である。

四二五 ヴァイセンブルクの奥方

髭のルートヴィヒの子息ルートヴィヒ(13)はザクセン公ウルリヒの息女と結婚したが、夫婦仲がどうにもうまくゆかず、妻を実家へ送り帰した。息女は誇り高かったので悶悶と悩み続け、その歳の内に亡くなった。若い身空で再び独り身になったルートヴィヒ伯は国中を旅して回っていたが、その途次ザクセン宮中伯フリードリヒ(14)をその居城ヴァイセンブルク(15)に訪問した。宮中伯には極めて美人の奥方があり、その名をアーデルハイトといった。ルートヴィヒ伯はすぐさまアーデルハイトにぞっこん惚ほれ込んでしまい、慇懃いんぎんを尽くしてご機嫌を取り、舞踏のお相手をした。

務めた。そこで彼女の方も伯爵を憎からず思うようになり、伯爵が自分の許に忍ぶのを許した。こうして兩人はあ
る良からぬ計画を立てるに至った。ある日、宮中伯が入浴していると、獵犬の吠え声と角笛の響きを耳にした。宮
中伯——もしかすると既に薄薄何か感じていたのかも知れない——は「わしの狩り場へかくも不遜に闖入して
いるのは何者か」と叫んだ。そこで側近が、それがだれであるか、告げた。アーデルハイト夫人自身が毒舌を振るつ
て夫に言い付けた、とする説も少なくない。とにかく宮中伯は激怒して浴槽から跳び出し、「甲冑を着けぬ」軽装
で駿馬にまたがり、ルートヴィヒ伯の追跡に掛かった。これこそまさにルートヴィヒ伯が望んだことだった。ロイ
ゼという林でルートヴィヒは宮中伯を待ち受け、宮中伯が和やかな挨拶もせず、この莫迦者、恥知らず、と叱りつ
けると、ルートヴィヒはやおら振り向いて宮中伯に槍を突き刺し、馬から突き落として殺した。この背信その極に
達する所業は諸邦に喧伝され、夥しく唄にも詠まれた。ヴァイセンブルクで寡婦となった宮中伯夫人は、殿にし
て背の君なる人の死を聞かされると、大いに嘆き哀しむふりをして、「貞淑な一年間」の喪に服し、次いで大好き
なお友だちルートヴィヒ伯と結婚することにし、シャウエンブルクの城でにぎにぎしく華燭の典を挙げた。ルート
ヴィヒ伯は長いこと彼女と至極幸せに暮らし、領土を拡張、堅固な城や防塞を数数築造、所領内の都市——フライ
ブルク・アン・デア・ウンシュトルートや川向こうのロイエンプルクなど——の防禦施設を調べた。しかしながら
彼に殺された宮中伯の親族は復讐を切願したし、彼自身皇帝に召喚されたにも関わらず出頭しなかったので、皇
帝は伯爵をそこいらの悪党同様いずれの地においても追捕するよう命じた。そこでルートヴィヒ伯はおさおさ用心
怠りなかったが、とうとうマクデブルク大司教管区で逮捕され、虜囚としてハレから程遠からぬ堅固な城塞ギービ
ヒェンシュタインに連行され監禁された。

四二六 ギービヒエンシュタインからの跳躍

ルートヴィヒ伯は長い間ギービヒエンシュタインに蟄居させられていた。皇帝が国外にあり、皇帝以外の何人も伯爵を断罪する権能がなかったからである。もともとこの件に関しては皇帝からあまり良いことは期待できなかったが……。拘留は既に二年八箇月に亘り、囚われ人は、六人の騎士に連日監視されている塔の一室からうんざりしてきてザーレ河谷を眺めていた。ギービヒエンシュタイン城はザーレ川を見下ろすこごしい巖山の上に聳えていたのである。そうこうする内ルートヴィヒ伯は、宮中伯に加えた犯行のことで皇帝が自分を処刑する意向である、と聞き込んだので、心配で堪らなくなり、病氣だ、と言い始め、死後の靈魂救済のため教会へ寄進したい、それから遺言状を作成したので、自分の書記を入室させて欲しい、と頼み、奥方のアーデルハイトに遣わす従者も一人必要だ、と言った。これが許可されると、秘かにこの従者にこう命じた。「おまえが教会への献金を受け取りにまいったら、これこれの日、これこれの時刻に、わしの白い牡馬白鳥とともに城の下のザーレ川の畔で待機しておれ。自分も馬に乗り、これに水を飼うふりをして川の中へ入っているのだ」と。それから伯爵は、重病だ、と訴え、これが数日に及んだ。遺言状も作ったし、屍衣の仕度もさせ、寒くてならぬ、との理由で、幾枚もの外套を持って来させ、これらの外套を重ね着し、杖に縋って室内をあちこちよろめき歩いた。一方六人の監視役は暇潰しに盤上遊戯をやっていた。石造りの室内はひどく寒かったが、外では八月の夏の太陽が暖かく照っていた。病氣の伯爵は大きな弓張り窓に凭れ、鎧戸を開いて日向ぼっこをした。——そして例の従者が馬に乗り、愛馬白鳥も連れてザーレ川に乗り入れており、二艘の漁り舟も川の真ん中に停泊しているのを眼下に見るなり、突然病氣ではなくなつて、一跳びするや窓に入り、二跳びで塔から出、ほんの数歩で巖山の突端に着き、「処女マリア様、そなたの僕をお救

いあれ」と叫んで、巖山から流れへと飛び下りた。纏まとっていた外套マントが車輪のように彼の体を包んだ。二艘の小舟が漕ぎ寄せ、伯爵はその一艘に拾われ、白鳥シヴァールにまたがった。上の城では盤上遊戯をやっていた連中が仰天して立ち上がり、窓辺に駈かけ寄ったが、見えたのは果敢な跳躍者が川岸に辿りつき、西を目指して馬を走らせて行く姿だった。

四二七 聖サントウルリヒの教会

後に跳躍デア・シユプリンガー伯爵と添え名されたテューリリングゲン方伯ラントグラフルートヴィヒ(15)——ギービヒエンシュタイン城の背後に聳える塔と巖山いわやまからザーレ川に果敢に飛び込んで長期の拘禁から助かった——は、空中を飛んでいる時更にもう一度「そなたの僕しもべをお救いあれ、処女マリア様」と叫び、それから愛馬白鳥シュヴァーに跨またがって脱走する折、逃亡経路を妻アーデルハイトが滞在しているザンガーハウゼンへと取ったが、途次自分の守護聖人である聖ウルリヒサントに、引き続きご庇護を願いまいらす、と呼び掛け、見事な教会を奉献つかまつる、と誓った。そこで更にローマへの懺悔ざんげ行を果たす前に、この誓言(16)を実行し、マリアと聖ウルリヒサントを讃えて教会を建立、奉献し、石碑に「処女まりあヨ、汝ナシノ僕しもべヲ受ケ止メタマエ」と彫りつけさせた。これはギービヒエンシュタイン城から跳んで脱獄した時、彼が叫んだ言葉である。救助者聖ウルリヒと方伯の石像は今もなお「ザンガーハウゼンにある」この教会で見ることができ。そして大勢の敬虔篤信けいけんな人人が多年に亘わたりこの教会で主なる神とその聖なる仲介者に祈りを捧げた。ところがある時ザンガーハウゼンにこんなことが起こった。悪魔が一团の男女、子どもらを騙だましたのである。彼らは秘かにある家に集まって悪魔を拜んだ。伝承によれば、悪魔が丸花蜂ブンメルの姿になって人人の口許くちもとに飛んで来たとか。それか

ら一同は灯火を消し、なんともおぞましい破廉恥行為に及んだ。文字通り跳ね返り娘よろしく羽目を外して。ある鍛冶屋がこれら淫蕩な邪宗徒どもの悪行を当時——一四五四年——ザンガーハウゼンを治めていた伯爵に通報した。伯爵は最初前代未聞のこんな話を信じようとしなかったが、鍛冶屋は、邪な瀆神の所業を見聞きできるよう、伯爵を変装させて集会に連れて行つた。伯爵は実地を体験してびっくり仰天、ただちに一味を拘引、裁判を行つた。彼らは一人残らず火刑を申し渡され、火炙りとなつた。

四二八 皇帝フリードリヒ

キフホイザー山上(註)に古い塔が一つ遠望される。これはかつて頂上に建つていた皇帝の居城の望楼である。城の廢墟は塔の少し下にいまだに見られる。黄金の沃野の民衆はだれもがこの塔を皇帝フリードリヒと呼ぶ。実物の皇帝フリードリヒ——添え名して赤髭——は教皇に破門されたので、あらゆる教会の門は大小となく彼の前に閉ざされ、いかなる聖職者も彼に弥撒を執り行うことは許されなかつた。そこでこの英雄皇帝はインドの地から捧呈された御衣(註)を身に纏い、香水の小壺を携えると、愛馬にうち跨り、暗い森の奥深くへ駒を進めた。ごく少数の忠臣だけが扈從を許されたが、皇帝は彼らからも姿をくりました。深い森の中で不思議な指被せを嵌め、見えなくなる呪文を唱えたのである。——殿輩の目から皇帝の姿がたちどころにかき消え、だれにも見えなくなつた。かくしてやんごとなき生まれの皇帝は行方不明となつた。年老いた農夫たちの話によれば、皇帝はいまだに時折巡礼となっているのが見掛けられ、こう告げたそう。我はいつの日にかまたローマの地で権力を揮い、坊主どもをこづき回してやり、聖墓を再びキリスト教徒の手中に収め、その回復のため剣がまたも抜かれぬようにいたそう。それか

ら我が盾を枯れ木の枝に懸け、この国と諸大陸に平和を樹立するのだ。我は全ての者に同じ権利を与え、異教諸国を従わせ、ユダヤ人の権益を決して再起できぬまで打ちのめし、修道女たちが結婚し、あるいは、仕事に就けるよう計らおうぞ。これが成就いたさば、我らに良い年が齎され、我が盾を懸けし枯れ木は滴る緑を取り戻すのだ、と。

蒼古たる昔から伝えられた伝説、歌謡、予言はかかるものだったが、時代が移ると、赤髭フリードリヒ一世の英雄像は皇帝フリードリヒ二世の像と溶け合った。なにしろ後者も領国ドイツを後にして二度と再び戻って来なかつたのだが、果たして死んだのかどうか。忠実な民草は、陛下はご存命、と信じ、還御を際限なく待ち通した。巷間伝えられるところによれば、皇帝フリードリヒが帰らないのは、その息女、全ての廷臣、武装兵、(道化の)侏儒らとともに古の皇城キフハウゼンの胎内深くに呪封されているからで、そこにまどろみながら坐っているのだ。皇帝の髭は石造りの卓子の周りに長く伸び、漸く二周になっている。そして髭が卓子を三周したら、皇帝は帰還し、領国を取り戻すのだ、とのこと。皇帝が魔法に掛けられてうつらうつらしている山の周囲を鴉たちがしょっちゅう飛んでいる。百年に一度だけ皇帝は、鴉がまだ飛んでいるか見届けて来るよう、お付きの侏儒を一人山上へ送り出す。侏儒が戻って来て、鴉たちが相変わらず飛び回っている、と報告すると、一段と悲しげに白髪頭をこっくりと頷かせ、またしても両目を閉じて半睡半醒となる。

四二九 皇帝フリードリヒの贈り物

皇帝フリードリヒが地底の大広間の玉座に就いているのを目撃した人人は大勢いる。彼はあるいは一人で、あるいは武装兵らに囲まれ、あるいは娘の皇女とともに坐っている。少なからぬ伝説では、羊飼いの前に(皇帝の道化

の) 侏儒しゅじゆが現れた、とある。これが皇女自身だったことも。ある羊飼いの少年がシャルマイ(註)で優雅な曲を吹いていると、背後に白髪頭の貴人が立ち、穏やかな声音でこう訊ねた。「坊や、だれのためにその曲を吹いたのかの。」——少年は怯おそめず臆おそさずこう叫んだ。「皇帝フリードリヒ様のおんために」。すると老人は、随ついておいで、と少年に手招きした。そこで少年は老人に導かれて腰を上げ、地面の下へと降りて行つた。そこには数数の宝物がどっさりあり、武装した兵士たちが立ち並び、老人の前で深くと頭を垂れた。そこで仰天した羊飼いは、案内人がだれなのか分かつたのである。皇帝は「この若者は朕ちんに敬意を表してくれた」と言い、少年に地底の大広間の絢爛豪華けんらんごうかな佇たなずまいを見物させた。それから一つの容器からその脚をもぎ取つて少年に渡していわく「地表へ行つてこう告げるがよい。時満ちて、主なる神がこの呪封から我らを解放してくださいさしたら、ドイツの国は自由になるのだ、と」。羊飼いの少年は地表へ出たが、一体全体自分の身に何が起こつたのか、さっぱり分からなかつた。手にした皇帝フリードリヒの贈り物は純金だつた。

これはまた別のジツテンドルフの牧人が悲しみに沈んで山上の皇帝カイザフリードリヒ塔の傍らに立っていたことがある。彼には好きな女の子があるのだが、あんまり貧乏なので、結婚できなかつたので。その時綺麗な青い花が風にゆらめいているのを見つけ、それを摘み取つて、帽子に挿した。すると塔の壁の裂け目から一人の侏儒が顔を出し、羊飼いに手招きした。そこで這はつてその後のに随ついて行つた。地底へ着くと美しい石がたくさんあつたので、それを拾い上げた。ところが屈かがんだ拍子に帽子に挿しておいた花が落ちた。薄明かりで皇帝フリードリヒが地底深くの洞窟どうくつに坐まっているのが見えたが、恐ろしかったので、向きを変えて引き下がった。「一番大事な物を忘れるんじゃないぞ」と侏儒が呼び掛けたが、牧人は慌あわてて立ち去つた。山上に戻り、再び塔の外に出ると、侏儒が壁から頭を突き出してまたしても怒鳴つた。「おまえ、あの花はどうした」。——牧人が帽子を取つて見ると、花は付いていなかった

た。「ああつ、失くしちまった」と牧人。——「おお、この大莫迦者。あの花はなあ、キフホイザーの山やローテンプルクより値打ちがあるのに」と侏儒は叫んで、姿を消した。夕方、愛しい娘の家を訪れた牧人は、どんな体験をしたか物語り、それから拾った石のことを思い出して、隠しから引つ張り出すと、うわあ、ありがたや、それらはチリンチリンと鳴り響く金貨に変わっていた。

ある貧しい羊飼いが、横笛をなんとも上手に吹いていると、皇帝フリードリヒ塔の傍らに侏儒が一人現れ、呪いに掛けられている皇帝にお目通りし、皇帝のおんために一曲演奏する気があるか、と訊ねた。羊飼いは承知して、地底に降り、笛を吹いた。——すると老皇帝はまどろみから醒めて頭を擡げ、「鴉どもはいまだに山の周りを飛んでおるか」と問い掛けた。「まだ飛んでおります」と羊飼ひ。——この返辞を聞くと皇帝フリードリヒは溜息をつき、「また百年眠るのか」と悲しげに言い、ことんと寝入った。それから侏儒は羊飼ひを山の上へと連れ戻したが、全然何もくれなかった。そこで羊飼ひは心中こう考えた。「地面の下でも地面の上とおんなじでからつけつと来てやる。気前のいいやつ、散財してくれるやつなんぞ死に絶えちまったんだ」。——さて、塔の周りには羊飼ひのちっぽけな畜群が待つていた。ちっぽけな——はてね、どうしてこんなにうじゃうじゃいるんだ。どっかのご同業が自分のもつと大きな群れを追い込んだのかな。いったいそいつはどこにいる。——いやいや、別の羊飼ひなどいはしなかった。笛吹きは羊を数えに数えた。一頭、二頭、三頭……十頭。まだまだ。……二十頭……五十頭。でもまだまだ。とどのつまり彼がこの山の上まで追つて来た群れより百頭も多かった。これが皆彼の羊、つまり皇帝フリードリヒの贈り物で、横笛一曲に対する返礼だったのである。

⑩ リートのレープリンゲン村の穀物運送業者がノルトハウゼンへ穀物を荷馬車で運ぶ途中、一人の侏儒に誘われてその貨物をキフホイザー山の胎内に持ち込んだ。丸天井の穴蔵に無数の樽があつて、それには金貨が剥き出しでぎっ

しり入っていたが、そこから「穀物の」市価以上は取らないように、と言われた。車力はその通りにした。山の外へ持つて出ると、至極古い〔純良な〕貨幣だった。別のゲホーフエンの農夫は同じ条件で同じことをやらされたが、こちらは隠しという隠しに金をぎつしり詰め込んだ。しかし日の光で見ると、それらはどれもこれも風雨に曝された古い鉛の貨幣に過ぎなかった。そこで男は城址に駆け戻り、侏儒に呼び掛けて、貨物の値段相応でいいから金を払ってくれ、と懇願したが、侏儒はまるきり現れなかった。そこで農夫は罵詈雑言を並べ始め、鉛のいかさま銭っこなどで穀物を手に入れてよう、老耄れ皇帝をだしに使うて人様をたぶらかすたあ、なんてえまあ糞忌しい取引をしやあがる、雷が落っこつて皇帝の金を全部土の下へ埋めてくれりゃあいい、とがなり立てたもの。——しかし、農夫はもつとひどい目に遭った。目に見えない手で、前に貰った貨幣の数よりずっとずっとたくさん、平手打ちを喰らわされたからである。

子どもや大人が〔キフホイザーの〕廢墟の中、あるいは道端に亜麻の胚芽が——時折は冬期でさえも——散らばっているのを見つけることがあった。また冬の夜楽器を奏でながらキフホイザーの麓を通り掛かった楽士たちが緑の小枝を貰ったことがある。こういう物を見つけた、あるいは貰った者はそれを軽んじてはいけなかった。金貨に変わったからである。吞兵衛どもが結構な飲み物を恵まれたこともある。一団の若い衆が麦酒を酌み交わしている、皇帝フリードリヒの健康を祝すと、ちっほけな給仕が一人、黄金の酒杯と飛び切り上等の葡萄酒二壘を持って現れ、一座全員をもてなし、皇帝の健康を祝う乾杯の音頭を取った者にその酒杯を贈呈した。——新年を寿ぐ唄を歌っていた合唱団が幸せにもキフホイザーの山上で冬の最中に九柱戯場と九柱戯を楽しんでいる男たちに出逢ったことがある。歌い手たちは〔唄の礼として〕柱を一本貰った。これを持って山を下ると、柱は金無垢だった。——ある少女が担保遊びで冗談にこんな品物を言い付けられた。キフホイザーへ登り、皇帝フリードリヒの長く伸

びた赤髭あかひげから毛を三本引っこ抜いて来い、と。娘は「本当に」出掛けて行って、一時間後帰って来た。燃えるように赤い三本の長い毛を持って。皆びっくりした。彼女はその毛を注意深く紙にくるんで取っておいた。一年後櫃ひつのところに来て、紙包みを手にすると、とっても重かった。包みを開いてみると——三本の毛は一寸もツオルの厚さの三本の黄金きんの延べ棒に変わっていた。

皇帝フリードリヒの賜物たまものについてのこうした伝説だけでも優に一冊の本が書けよう。

四三〇 山の惑わし

キフホイザー山のすぐ麓ふもとにあるティレダ(16)はその昔黄金ダイー・ギユルドネ・アウエの沃野に散在する皇帝居城の一つがあったところだが、ここに貧しくはあるが正直者の許婚いひなまけ同士がいた。婚礼を挙げようとしたが、あいにく台所道具が足りなかった。それでもお客を何人かは招いていたので、娘の父親は冗談半分「キフホイザーに登って、あそこのお姫様からおめえたちに要り用な品を借りてきたらよかんべえ」と言った。若者と娘が山の上へ行くと、皇女がもう待ち受けていて、二人に長いこと素晴らしいものをたくさん見物させたあげく、所帯道具を欲しだけくれた。二人はティレダへ戻ったが、その頃には担いだ荷物が重くて堪たまらなくなっていた。着いたティレダはなにもかも妙ちきりんだった。道こそまだ元のままだったが、花嫁の父親の小屋があった場所には大きな百姓屋敷が建っていたし、逢う人、逢う人、だれもかれも見知らぬ顔ばかり、彼らが着ている物も異様だった。二人は訝いぶかしくてならなかったが、村の人の方うらも二人のことを訝いぶかしんだ。一人も知人がいないので、二人は牧師を訪ねた。ところがこの御仁にも馴染みが無い。もつとも牧師は親切にこう訊きいてくれた。「さてさていったいどなたかな、お年寄りがた。ぜんたいどこか

らおいでになった」。——「おやまあ、あたしら、キフホイザーから下りて来たところです。二時間前に登ったんで」と許婚同士の若者と娘は答え、牧師が自分たちを、「お年寄り」なんて呼んだのが不思議でならなかった。牧師は途方に暮れて頭を振り振り教会記録簿を調べた。すると、なんと、二人の名前が見つかったのだ。二人は二百年前に山の惑わしに遭った、と記されていた。極老の男女は結婚式を挙げてもらい、教会墓地の自分たちの墓の上に坐り込んで泣いた。なにせもはやこの世に身の置き所が無かったので。それから二人はくたくたと倒れ、体は塵と化した。

ジッテンドルフの山羊飼(16)いペーター・クラウスにも同様のことが起こった。群れから離れて(「キフホイザーの」)廃墟に紛れ込んでしまった牝山羊を追って行ったのだが、やっとこ見つけた山羊は九天井の穴蔵の中で、上の穴から落ちて来る燕麦を食んでいた。穴蔵にいと頭上で馬の蹄の音がした。しばらくして辺りを見回すと九柱戯をしている騎士たちがいた。騎士たちの許(もと)に行くと、柱を立てる仕事をさせられた。それから容器になみなみ入っている葡萄酒をご馳走になったが、この容器は一向空っぽにならず、とうとう彼は酔って眠ってしまった。目を覚ますと、廃墟の外の高く生い繁った草むらに寝転んでいたが、頭上に聳える木木はこれまで見たことがないものだった。クラウスは口笛を吹いて犬を呼んだ。犬は来なかった。山羊の群れを探したが、一匹も姿が見えなかった。むしろくしゃしながら村に下りて行くと、牧夫小屋は崩れかかっており、傍に痩せこけた犬が一頭いて、こやつはけしからぬことに彼に向かって唸った。そして男の子が「やいやいや、あのおんぼろ爺さん、何しに来たんだろう」と叫んだ。クラウスは幾人かの村人に質問した。村人たちはじろじろ横目で彼を眺めるだけで、返辞してはくれなかった。最後に「クルト・シユテフェンはどこに住んでるだね」と訊くと、一人のおつかあが叫んだ。「ほう、お爺さん、あの人はこの十二年ちゆうものここにやあ住んでねえだよ。ザクセンブルクの下のオルディスレーベンへ引越

たでね」。——「ベルテン・シュタイアーは」。——「あれまあ」と別の女が金切り声を出した。「あの衆は十五年このかた墓場で眠ってござるだ」。——その時一人の若い女がクラウスの目に入った。彼女は片腕に子どもを一人抱き、四歳くらいの子の手を引いていた。この三人の顔はクラウスの女房そっくりだった。そこでクラウスはこの女に訊ねた。「あんた、なんちゆう名前だ。それからあんたのお父つっあんは」。——若い女は答えた。「あたしはマリーエ。お父つっあんはクラウスっていったわ。神よ、靈魂を救いたまえ。お父つっあんは二十年前キフホイザーに上がってった。犬と山羊たちはお父つっあん抜きで村に戻って来た。お父つっあんは二度と帰って来なかつた。わたしら夜昼捜し続けたけど、どうしても見つかなかつた」。——「ああ、神様」とペーター・クラウスは溜息をついて叫んだ。「おらの娘、おらの愛しいマリーエや。おらだよ。おめえの父つっあんがもう分からねえだか。それじゃあおらは二十年も皇帝フリードリヒと一緒に山で夢を見てたのかなあ。おらにやあほんの二、三時間としか思えねえだがよう」。

キフホイザー山麓で豚番をしていた別の牧人だが、前述の山羊飼いのように、群れの一頭がいなくなった。三日後城址の壁の裂け目からもがき出ようとしてるところをやっと見つけた。もつとも穴くぐりは難行苦行だった。なにしろこの牝豚、ちよつとの間に文字通りのでくでく豚姫になつていたからである。以前はがりがりの瘦せつぱちだったのだが、今は体中ぶるんぶるんと震えるばかりの肥えかた。この話が評判になると、シユヴァルツブルク伯は真偽を確かめたくなり、一人の死刑囚をその山の穴に潜り込ませた。地底に何があるか、見届けて来い、と命じて。囚人は命を賭けてこれを遂行した。囚人は豚が通つた道を下り、皇帝にお目に懸かつた。皇帝はまことに厭しい眼差しで男をご覧になり、黄金の指環をよこして、こうのたもうた。「この指環を伯爵に持つてまいれ。して、かように申せ。人をここに送つて、内部を窺わせるようなことは二度とまかりならぬ。ここにはそちが穿鑿せね

ばならぬことなど何も無い、とな」。——使者は指環と御言葉——前者は後者より結構だった——を伯爵に持ち帰り、無事に釈放された。

四三一 皇帝フリードリヒの宮廷の人人

伝説は皇帝フリードリヒの地下の宮廷を構成している集団および個々の人人に言及している。皇帝に次いで最も高位にあるのは皇女である。彼女はフリードリヒの息女ということにされているが、本来は姪に過ぎない。皇女には一群の貴族令嬢が仕えており、夜ともなれば皇女とともに白馬に乗り、白衣を纏い、キフホイザーの尾根を騎行、荒れ狂う同勢やヘルゼルベルクの女たちと仲間になったりする。また更に大勢の騎士輩、僧侶たち、侏儒らといった皇帝の廷臣、召使いらがもろともに山の胎内に呪封されている。さてどんじりに控えしは、お伽話の主人公ユーターボックの鍛冶屋で、彼もまた地下に滞在している。ペトルス聖者が本人自身わざわざ鍛冶屋の許にやって来て、三つの願いを叶えてやる、と言ってくれたのだが、鍛冶屋さん、なんとも莫迦げた願いかたをやらかした。もつとも、訪れた死を「庭の梨の木のうで」動けなくしたり、悪魔をしたたかにぶん殴ることができたという効用もあった。そこで、とうとう死んだ鍛冶屋が、永遠の浄福を願わなかったため天国に入れてもらえず、しからば、とばかりてくてく地獄へ下りて行くと、悪魔は震え上がって、すぐさま地獄に防禦設備を構築、戒厳令を布いた。かくしてユーターボックの鍛冶屋はかわいそうに天国へも地獄にも入れず、さればとて煉獄は御免蒙りたかった——あそここの火は自分には熱過ぎるというわけ——から、涼しい場所を探して地底のキフホイザー城に参着、いまだにそこにいる。そうして皇帝や皇女、それから皇女お付きの空中を飛行する上臈がたの馬にピカピカの黄金で作った

蹄鉄ていてつを打っている。彼女らは空ばかり飛んでいるわけではなく、時時蹄鉄を落とすことがあるのだろう。けれどもそうした拾い物は当てにしない方がよろしい。ヴェネチア人(註)、寶石掘り、宝探し、悪魔祓はらいなどの面々はキフホイザー山頂、山中、山麓で昔から頻繁に活動して来た。その活動ぶりについてはやはり伝説や物語がたくさんある。彼らはしばしばキフホイザー地下宮廷の眷属けんぞくによって脅かおびされている。

ローテンブルク(註)の城で偶像とおぼしき物、あの有名なピュステリヒ(註)が発見された。これは今なおゾンダースハウゼン(註)に保管されている。これについては夥おびしい本が書かれて来た。ピュスターに言及している小冊子、論説、覚え書きたぐいの類を正確に数え挙げれば総計九十四編で、この本は九十五番目となる。

四三二 穀棹からざお使い

一四二二年のこと、黄金デューギールドネアウエの沃野に兇暴な一揆いっげいが起こった。農民、木樵きこり、森棲まいの者たちが穀棹(註)を軍旗とし、その旗印の下に結集したのである。彼らはある山賊、フリードリヒ・フォン・ヘルドルンゲン(註)なる男を首領に選び、荒れ狂う狩りの一団デューワイルデ・ヤークトながら黄金デューギールドネアウエの沃野とハールツ山地を席捲せきけん、ホーンシュタインの城塞(註)およびその他の城を破壊し、焼き払い、略奪し、獲物を分配した。なにしろ現世の物は全て共有でなくてはならない、というのが彼の信条だったからである。だから彼らを歌った古い唄にもこうある。彼らの暴れかたは、

狂える犬どもさながらにして、

共有、共有、と二六時中叫べり。

殻棹使いたちは財産の分配・共有をそそのかして止まぬ古い唄を歌い、口笛で吹いた。この唄は、雷鳴が雲に当たって碎け、殷殷と反響して止まぬように、その後数世紀に亘り継ぎ続けたが——これを圧殺する動きも起こらずにはいかなかった。騎士たちは同盟して、見つけしだい農民たちを虐殺、あるいは捕虜にして獵犬のように二人ずつ繋ぎ合わせ、死ぬまで鞭打った。一味徒党の頭目(「フリードリヒ」)は、殻棹使いの一員だったハールツの炭焼き男に火掻き棒で殺された。げに不義背信は身の破滅である。

不思議なことに歴史と神の摂理の予兆が年数の中に示されていることがしばしばある。一四一二年の一、四、一、二という数字を取り上げて、掛け算してみよう。一×一は一、四×二は八。これを書き記すと十八となる。それから年数の数字を数えると四箇である。数字を足すと八となる。これらの数字を書き並べると、一、八、四、八、すなわち一八四八年という年数が現れる。この年には殻棹も殻棹使いもどっさり見掛けられた。彼ら殻棹使いは一四一二年の古い唄に歌われ語られた無頼漢(ならしもの)どものように振る舞った。それゆえこのように述べたソロモンは正しい。「曩(むかし)に有りし者はまた後にあるべし曩(むかし)に成りし事はまた後に成るべし日の下には新しき者あらざるなり見よ是は新しき者なりと指して言ふべき物あるや其は我等の前にありし世々に既に久しく在りたる者なり」

四三三 懺悔の事業

テューリンゲン伯ルートヴィヒ——人呼んで跳躍伯——はザンガーハウゼンに聖ウルリヒ教会を建立して誓言を成就したが、今度は妻のアーデルハイトともども、宮中伯に加えた悪逆に対する悔恨に苦しむようになった。ある年の聖金曜日、二人の前に肉料理が供された。そこでルートヴィヒは妻に、大斎を守るべき聖なる日に

肉料理を食べるといふ罪にどうして誘おうとするのか、と訊ねた。——するとアーデルハイトは、二人がこれよりずっと罪深い肉欲に身を任せ、そのため卑劣な謀殺にまで及んだことを、悲痛な口調で夫に思い出させた。こう言われた伯爵は奥方とともに涙を流し、ローマへ懺悔の巡礼をし、かの地で教皇に贖罪を課して戴き、教皇の裁きにはなんであれ二人とも従いまいらせよう、と誓いを立てた。事はこの通りに行われ、教皇ステファヌスは、夫妻を離婚させ、彼らの子どもたちの相続分から資産をたっぷり引き去り、これを二つの修道院——できるだけ互いに隔たっている——の建立と内装費用に当てしめるのがなよりの贖罪と考えた。かくしてルートヴィヒ伯はテューリンゲン山地のある谷にラインハルツブルン修道院を、アーデルハイトはオルデイスレーベン修道院を建て、修道士を住まわせた。アーデルハイトはまた自己所有のシャイブリッツ城を貴族の令嬢たちを教育する修道院に変え、その初代修道院長となった。一方オルデイスレーベンには彼女の遺灰が憩うている。

さてこのオルデイスレーベン修道院だが、ここには一一三六年人頭大の石が天から降って来た。また修道士の幽霊どもが出没した。更には仕返しをする墓石があつて、それらに対する冒瀆行為を目に見えぬ手があからさまに処罰した——五行証書の授与(「平手打ちを喰らわせること」)によつて。オルデイスレーベン修道院に隠されているという財宝は、古いシトー会派の修道院ジッティンヒェンバハやギユンター聖者が埋葬されているゲリンゲン修道院の財宝に劣らず噂の種となっている。

四三四 啼き叫び

古き塩の町フランケンハウゼン——往昔ザクセン族、フランク族、テューリンゲン族がこの一帯で血みどろの戦

いを交えた頃、フランク族からその名を貰ったのがこの町の由来、とフランク族は主張したものの——には、アルテンブルクのハウスマンスタ塔とか古いフランケンハウスなどで、ザクセン族への押さえた古要塞の遺跡がいまだに見られる。ここにはシトー会派の聖ゲオルク女子修道院もあり、修道院附属教会には聖処女マリアの奇蹟の像が立っていた。この像はほんのりと紅の差した天使のように愛らしい顔をしており、ありがたい至福の時代にはいとも優雅な御姿だった。しかしやがて濁世ともなると、像の顔色は褪せ、愛らしい輝きは消えた。かくして一五二五年、荒荒しい熱狂に駆られた農民たちが大暴動を起こし、数数の城や修道院を破却し、劫略し、灰燼に帰せしめるといふ事態に至ったのである。かの年にはイーレフェルト、ヴァルケンリート、フォルケンローデ、ケルブラ、ジッティヒエンバハ、オルデイスレーベンその他の修道院がその壮麗な附属教会もろとも完全に荒廃した。遂には主の懲らしめの筈が稲妻のごとく強盗どもの群れに下されたのであるが。これはトーマス・ミュンツァーが煽動役を演じ、民衆を教唆し、虹の旗を靡かせ、その旗色に足らずがちの唐紅を諸侯から送られた特使らを闇討ちにした血で補ったあの時代である。農民軍にはフランケンハウゼンの町と周辺のあらゆる村から来たギデオンの戦士たち——いずれもミュンツァーに眩惑されて群れ集った——の妻子らも付き随っていたが、これらとはある森に隠れた。この森からはフランケンハウゼンを見下ろす山——その頂きに農民軍の陣営があった——を望むことができた。さて農民軍とこれに対抗すべく進軍して来た諸侯——選帝侯ヨーハン、ザクセン公ゲオルク、ブラウンシュヴァイク公ハインリヒ、ヘッセン方伯フィリップ、ハールツ山地その他の伯爵たち、といったいずれも和解のために送った使者を殺された殿たち——の同盟軍との戦いの火蓋が切られると、トーマス・ミュンツァーが駆使して農民たちを瞞着・狂乱させた妄言の弁才は全くのこまかしだったことが明らかになり、七千三百以上の農民がその血みどろの身体で戦場を覆った。さりながらそっくり野牛の革に縫い込まれた勇者は——口舌の英雄はおおかたそ

うしたものだ——戰場から唾棄すべき逃亡を行い、どこかの寝台の中あるいは下に潜り込んだ。そこであの森からは、ミュンツァーの謀叛心に惑わされた市民や農民の罪もない妻子たちの恐ろしい悲嘆の啼き叫びが響き渡った。妻子たちは自分らの父、息子、兄弟、許婚、男女たちが情け容赦なく殺戮されるのを目の当たりにしたのである。その後この森は啼き叫びなる名で、そしてあの山は戦の山なる名で、いついつまでも呼ばれるようになった。これが起こったのは教会で典礼歌唱が歌われる〔復活祭後の第四〕日曜日明けの月曜のこと。農民たちも会戦の前美しい唄「我ら聖霊にねぎたてまつる」を歌いさえした。しかし聖霊は、天国と地獄が隔たっているほど、彼らの所業とは懸け離れていた。そこで農民たちの願いを聞き入れることはできなかったのである。

四三五 ゲリンゲンのギウンター聖者

フランケンハウゼンとゾンダースハウゼンの間のヴィッパ―谷には、周辺の諸地域で特別に評判の高い二つの修道院があった。ゼーゲとギウンツェローデの間、アールンス城の麓なるカペレンの聖ゲルトルト修道院——一般にカペレンで通っている——とゲリンゲンの聖ヴィッパート修道院である。カペレンは一九七年ドイツの諸侯がシユヴァーベンのフリーツプをドイツ皇帝に選出した場所だとのこと。ゲリンゲンには十一世紀にギウンター聖者が暮らしていた。この人はテューリンゲンの豊かな地域伯だったが、若気の過ちの贖罪のためヘルスフェルトで聖職の道に入り、所領の地域を聖ヴィッパート修道院に献納、ゲリンゲンだけをおのが居所に残しておいたもの。ギウンター伯はエツカルト辺境伯の子息の一人で、ケーフェルンブルクとシユヴァルツブルク伯爵家——その後裔は今日なおゾンダースハウゼンとフランケンハウゼンの領主で、代代一族中にギウンターなる名を

継承している——の祖先だ、ということである。ギウンターは、決して「鳥獸」肉を食べない、との誓いを立てていたが、ある時さる大諸侯の許もとに客となった折、食卓へ運ばれて来た丸焙まるやきの孔雀くじやくを食べるよう、この殿様にしつこく無理強いされた。そこでこの敬虔けいけんな御仁が、この難儀がまから救いたまえ、と神に呼び掛けたところ、なんと、皿に盛られた丸焙まるやきの孔雀は羽根を生やし、生き返って、翔とんで行ってしまった。この信心深い奇蹟きせきの男はテューリゲンから遠く離れたボヘミアの地で亡くなったが、死後も夥おびただしい奇蹟きせきを行った。ヴィッパカール谷の両修道院はお互い大層仲が良く、親交を結んでおり、訪ね合うのが人目に触れぬようカペレンからゲリンゲンへ秘密の地下道で行き来していた。修道士と修道女がこれをやった、とそう伝説は語るのだが。

四三六 シュヴァルツブルク伯爵家の起源

古きシュヴァルツブルク伯爵家はギウンター聖者を源とする、とは認めたがらない向きもたくさんいる。偉大なるザクセン公ヴィッテキントの親族で軍勢を指揮していた黒デア・レンネアルツェのヴィッテキントなる者がシュヴァルツブルク一門およびグライヒェン伯爵家の先祖である由。また一説には、グライヒェン伯爵兄弟——ゲッティンゲン近郊に城塞を構えていたがそこから追放され、テューリンゲンに来て、ミュールベルクの傍のグライヒェン城とヴァクゼン城を築いた——が現今の大貴族シュヴァルツブルク家の祖先に他ならないとか。ある年代記編者に至っては、前述の起源を先史時代のぬばたまシユワルトツァルトの黒シユワルトツァルト森、すなわちベルンのデイトトリヒ(註)が活躍し、テューリンゲン族がザクセン族やフランク族と激しく抗争していた時代へと一層押し上げる。いわく。ある伯爵がある山上で炭焼き場に出くわし、その真つ黒けな山に城を築いたのだ、と。——ほうら、これで黒い城誕生だ。はたまたこのように

主張する者もいる。グンター、すなわちギュンターなる皇帝ロタールの第六子がアルンシュタット近郊にケーフェルンブルク城を築造したが、これぞかの名門の眞の遠祖である、と。シユヴァルツブルク一族は早い時代に花開き、数世紀に亘つて脈脈と継続、名高い修道院を幾つも建立、神聖ローマ皇帝も一人出した。クンツ・フォン・カウフンゲンがザクセンの公子たちを拉致したことは世上遍く知られているが、シユヴァルツブルク伯の二人の御曹司がヨースト・ハーケのためにそうした目に遭わされたこともこれに劣らず有名である。ハーケは大胆不敵な軍人で、シユマールカルデン戦争中マンスフェルト伯フリーゴを伯爵自身の城から夜捉えて連れ去った。ハーケは二年も経つてから漸くグルデン金貨一千枚と引き替えに伯爵を釈放した。

四三七 聖女がたのお引越し

テューリンゲンの町ゾンダーハウゼンとミュールハウゼンの間にシトラー会の修道院フォルケンローデ——元はフォルコデスローデと呼ばれた——があつた。この敬虔な院長が、聖ウルズラと共にケルンに埋葬されている一万一千の扈従の処女の内三人の夢を見、ケルンへ赴いてその屍骸を掘り出し、自院へ連れ帰った。この聖遺物は修道院で大いに尊崇された。しかし戦の大騒乱が到来すると、教会の秘宝はこっそり隠された。三人の処女の遺骨も屋根裏部屋に移され、やがて忘れられてしまった。もつともかくも閑却された三人の処女——生前の名はテウマータ、エレウマータ、クリスタンチア——は甚だおもしろくなかつた。そこで寝かされている櫃を中から何度もとんと叩いたが、聞いてもらえずじまい。次いで聖物保管係修道士の前に出現、猫や鼠が跳梁跋扈する屋根裏部屋などよりもっとしかるべき場所に移すよう警告した。けれども聖物保管係は白河夜船で言いつけを何度もうやむや

にしてしまった。かくしてこういう事態となった。ある夜修道士たちが院長と共に朝課マドック・デーで合唱していると、三人の処女が教会に入ってきて来て、祭壇にお辞儀をし、次いで院長にお辞儀をし、それから修道士一同にお辞儀をし、次いで教会の扉の一つ——いつも堅く錠が下ろされていた——の真ん中を通して出て行った。修道士たちはいずれも、こうした姿を見たのは自分だけ、と思っていたが、やがて全員が同時に目にしたことが判明、あれはかの三人の処女だったのでないか、と考えるに至った。そこで屋根裏部屋に上がったところ、聖遺物の櫃は無事にそのままだったが、開けてみると処女の遺骨は無かった。修道院長はケルンのウルズラ聖女女子修道院の院長の許もとに赴いた。そしてかの処女たちの亡骸なきがらが以前掘り出したのと同じ場所、フォルコデスローテ修道院長が夢で教えられたその場所に戻っているのを発見した。修道院長は遺骨を持ち帰らなかったが、女子修道院長はこう言った。「いいえ、猥下げいか、それはなりません。この上臈じょうろうがたはわたくしどもで大切にかしずかせていただきます。そちらさまがもつとちやんとおもてなしなさっておられれば、御許おんしよテューリンゲンにご滞在あそばさしたでしようがね」。そう拒まれて大層気落ちした修道院長に女子修道院長はキリスト教徒らしく同情、骨の山の中からいくらか壊れている処女の頭蓋骨を一つ探して、せめてもの代償として提供した。そこで院長はこれを携しよせえて悄然しんぜんと戻って行った。

四三八 茶色の丘

デア・フラウネン・ビュエル

ノルトハウゼンとハールツ山地からアイヒスフェルトのドゥーダーシュタットへ行く途中棒砂糖状(8)〔円錐形〕の丘がある。人工でこうした金字塔型に積み上げたかのような外見である。周辺の村民は「ブルーネ・ビューデル(茶色の巾着)」と呼んでいるが、おそらく元来は「丘ヒュール」だったのだろう。知識層は巨人の丘リシヒュールと呼ぶ。かつて一

人の巨人が山上に立ち、下に拡がる「黄金の国境地域」のドゥーダーシュタットを見遣った。この光景は気に入ったが、なんだか靴の中で足に当たるものがあるので、振るい出してみると砂粒だった。これがこの丘となった。——「ブルーネ・ビューデル」をこんな風に誘う説もある。いわく、これは天界の産物なのだ。かつて掃除した後、小さな穴から下界へ落とされた芥屑なので。これがビューデルになった、と。

巨人の丘およびゾンネンシュタインとオームベルクといった近くの山からアイヒスフェルトの大部分——おひただ 夥しい古城、町町、村村、修道院や礼拝堂、ハールツ山地とテューリンゲン山地、レーンの山並みの一部——を一望することができると、いや、天気が好ければ薄霞む遠方にトイトブルク山地(註)さえも見える。ドゥーダーシュタットの彼方に目を遣ると、DSB三八七で語っているゼーブルクに行き当たる。

四三九

「デー・ヴァイルデー・キルヒエ」教会

ポニファチウス聖者が伝道の旅の途次、アイヒスフェルトのオームベルクにやって来たことがある。そして今なお「デー・グーゼンシュタイン大きな石」と呼ばれている巖の上にあつた異教の供儀の場を破壊した。聖者はそこに十字架を立てると、オームベルクから裂き取られて、ぼつんと離れて屹立しているおそろしく峻険な巖——後代になって漸くまた行けるようになった、アルテンシュタイン城近傍のポニファチウス巖(DSB七四三) さながら——から説教を行つた。この巖と場所は現今も人呼んで「デー・ヴァイルデー・キルヒエ」教会」という。ポニファチウスは山麓に三人アンナなる修道院を建立した。かつて恐怖の黒死病がアイヒスフェルトを荒廃させ、聖職者たちを一掃してしまつた時、新生児はこつこつ教会へ連れて来られ、さる隠者に洗礼を授けてもらったそう。この辺りはまことおどろおどろしい雰圍

気である。不思議な鐘の響きを聴いたという者も少なくない。ある女などはその鐘そのものを目にした。鐘は銀色に輝いて開豁かいかつな鐘楼にぶら下がり、下にはこれまた開豁かつ壮麗な聖堂があり、聖堂内には数数の蠟燭ろうそくが点り、年老いた司教が聖務を執り行っていた、とのこと。この女は仰天して急いで夫を呼びに走った。——けれどもやつと夫を見つけて現場へ連れて来た時、教会は消え失せていた。牡牛オウセンゴブの頭山麓のヴァルトシユタイン城に現れた幽霊教会（DSB六九八および七〇二）と同様である。

四四〇 病癒えたるダゴバート王

アイヒスフェルトの首邑しゅいふは聖者ハイルイゲンシユタウトの町と呼ばれている。加えてアイヒスフェルト全地域に聖堂の香煙のごときものが漂い、修道院の鐘のごとき音が響き渡る。伝説はこの町とこの地域のために黄金の光輪を幾多も織り成している。昔むかしのその昔にまで遡さかのぼるが、フランク王国国王ダゴバート（四）は老境に入つて悪しき病癘風れいふうに罹患りかん、政務を子息と忠実な相談役たちに委ね、なんとか治癒の道はないものか模索するため、妃きと共に遠隔の地に引き移つた。こうしてアイヒスフェルトにやつて来た彼は、人目を避け、この地方の人跡稀なところで暮らすことにし、そこに住まいを造り、聖処女ザンクトと聖ペトルスに奉献した礼拝堂で勤行ごんぎやうに励んだ。祈りを捧げていない時間は狩りをして過ごしていたダゴバート王は、こうした獵の一つでひどく疲れ、草むらにごろりと寝転ぶなり、すぐさま寝入ってしまった。目を覚ますと、草がしとどに露に濡れているのに気付いた。しかし露でびっしよりの自分の体がどこもかしこも癘風から癒え、幼な子の肌さながら清らかとなつていたので大喜びした。王は欣然として妃の許もとに急ぎ、奇蹟きせきを告げた。すると妃は王に向かい、これからもしげしげとその場所に通い、露に濡れた草の中に横たわるよう

勧めた。このようにした結果王は快癒した。そこでいわく「まことこの地は治癒の場にして聖者の場じゃ」。

——その後王は夢で、この場所にアウレウス聖者とユステイヌス聖者が埋葬されていることを啓示された。これらの聖者はエツツエル王の時代マインツで捉えられたが、神のご加護で脱出し、アイヒスフェルトに向かったのだ。アッティラの代官が二人を追跡、ルステベルクで逮捕、再び異教に転ばせようと、考えられる限りの拷問を加えた。しかし徒勞に終わった。釘 靴を履かせたにも関わらず、毅然としたキリスト教徒は傷一つ負わなかった。真つ赤に灼いた鉄の帽子を被せたが、これは冷たくなって下に落ちた。樹に鎖で繋いでみたが、荒荒しい野獣どもは恐れ憚った。なにしろ二人の前に何本も蠟燭が燃えていたし、天から天使が下りて来て、二人と一緒に祈っていたからである。とどのつまり代官は敬虔な殉教者たちを斬首、その屍骸を森の中に埋めたい。ダゴバート王は自分が快癒した場所に聖堂を建立させ、司教座聖堂首席司祭と司教座聖堂参事会員をここに任命、そこを聖者の町と名付けた。それからこの聖堂をマインツ〔大〕司教座の管轄下に置いた。〔大〕司教座の管轄下にずつと残ったこの名の都市は叙叙に成長し続けた。ダゴバートの仮寓はいまだに「古き城」と呼ばれている。

四四一 悪魔の説教壇

これはおれ様の説教壇、と悪魔が悦に入っている巖が数多ある中でも、アイヒスフェルトには一番素晴らしいやうがある。ゲルマルマルクにあるのがそれ。昔むかし(18)の山城でハンシユタイン一門発祥の城の廢墟から程遠からぬ。ある時悪魔は例のお気に入り、ブロッケン山の夜会を開いて上上のご機嫌、ブロッケン山上に集まった魔女の会衆を相手に、この上なく広汎な経験に基づく飛び切り素晴らしい——ということば、飛び切りひどい——演説を

国会議員(註)そのけに行い、己(おのれ)の強大な力を自慢した。「おれ様はかかる力を用いて、これでもう何千年もの間、かの老耄(おいぼ)れ世界君主の絶対専制に対する反対党首として極左連中の権利を代表して来たのである。極左連中てえのは——それ、なににそう書かれておるな——山羊(やぎ)だつちゆうわけで、永久に、おれ様、つまり元祖臭牡山羊(くさお)とおれ様の使いどもに仕えることになつとるのだ」(註)。——悪魔(トイフェル)の説教壇(カウツネル)からの説教が終わると、酒杯が一座をひとしきり経巡つたが、やがて委員会代議員とも申すべき面々が親玉にこう訊ねた。「そんなにすごい力をお持ちだつて威張つてらつしやるんですから、あの説教壇くらしいの大きさの巖の塊なんか、ヘッセンのマイスナー(註)へ運んでけるんでしうねえ。ほら、あそこにはやまだ説教壇がありませんのよ」。悪魔は「自分が説教をした」ブロッケン山頂の巖をつらつら眺め、大したこたあねえや、と思つた。これはまあそう軽はずみに考えたわけではない。そこで幾樽かの葡萄酒を賭け、巖の塊を担ぎ上げると、ただちにヘッセンの邦を指して歩き出した——あるいは飛んで行つた。けれども道は凍りついている上でこぼこ、アイヒスフェルトに差し掛かるととりわけそうだった。かくなるしだいで悪魔は海岸の砂丘をアーヘンへ運んだあの時(DSB一二二)と同様なんとも往生し、おりゃあ、なまじ民衆の意向など斟酌(しんやく)して我が身を犠牲にした抜け作だわい、とむしゃくしゃしたものを。ハンシユタイン城の近くまで辿り着くと、辺りは森閑としていて人氣(ひとけ)がなかったので、ここならだれも見ちゃいめえ、ちよつくら休めるつてもんだ、と思ひ、高く伸びた柔らかな草むらにごろりと横たわり、休息を取つた。ところが間もあらせず可愛らしい小娘魔女が一人、箒(ほうき)の柄に跨(またが)つてブロッケン山から飛んで来た。そして悪魔が長長と寝そべっているのを目にするなり、こう呼び掛けてからかった。

ハンス坊ちやま、何していざる。

眠っているの、起きてるの。
笑っているの、泣いてるの。

悪魔はひゅつと飛び上がり、小娘魔女を追い掛けてとつ捉まさえ、ヴィッツェンハウゼンへ一杯やりに連れて行き、自分がどんなことをするのか教えてやった。巖の説教壇はそこにはつぼらかしたまんなにしたが、その代わりヴィッツェンハウゼン産葡萄酒の大樽を何本か帰り荷としてすぐプロッケン山に運んで行き、賭けの負債を支払った。夜会の客人たちは件の葡萄酒を飲んで身震いし、親玉の声望はぐらついた。

四四二 ちびっこの仕立て屋さん

「黄金の国境地域」のドウーダーシユタットに仕立て屋が住んでいた。背丈は三脚尺半ほどしかないが、女房は太った大女。で、この女房がある時もすぐ出産ということになった。お産婆さんがやって来て産婦とひそひそ話を交わしたが、そうしながらしょっちゅう小さなご亭主の方を振り向いたもの。あちらは仕立て屋の勘定書を書いていたのだが、産婆にはそれが何だか分からなかった。とうとう産婆は、産婦との内輪話に男の子が聴き耳を立てているのはどうにも不都合だ、と思い、そちらに面と向き直つてこう言った。「坊や、おめさんの練習帳持つてどっかへ行くか、下で遊んで来な。おら、おめさんの母あちゃんと喋らにやならんことがあつてよ、男の童が聴くなあまずいだ。——こう言われてちびっこの仕立て屋さんは赤くなつたり青くなつたりで、おいおい泣きだしていわく「おらあ、これの亭主だによ」。お手長女もこれにはびっくり仰天、「どうかどうか気い悪くしねえでけろ」と

謝った。

四四三 ライフェンシュタインの修道士

アイヒスフェルトのヴォルビスとミユールハウゼンの間にライフェンシュタインという修道院(20)があった。その起源はごく古い。フン族の王アッティラの武将の一人リーフェなる者がこの地方にやって来て、ある山の頂きに城を築き、それをリーフェシュタインと名付けた。その遺跡はいまだに残っていて「古グー城アルテブルク」と呼ばれている。城の周りの森の名は「城の森」ブルグスレーゼン。時移り、グライヒエンントーナ伯爵家(21)——近くの城グライヒエンシュタインの主あるしだった——がライフェンシュタインを獲得。グライヒエン伯爵家の一人でその名をエルンストという者が、子息に恵まれなかったので城山の下の谷にフォルケンローデ修道院から何人もの修道士を移らせてシトー会派の修道院を建立、たつぷり資産を喜捨した。当時界限の土地はほとんど開墾されておらず、近くにはアルボルデローデなる小村しかなかった。ライフェンシュタイン修道院は有為転変の諸時代(22)をけみ存続し続けたが、とうとう最悪のご時世、すなわち農民戦争パウエルンリョウに遭遇した。この時修道院に、ろくでなしの修道士ハインリヒ・プファイファー(23)——元の名乗りはシユヴェーアトフエーガー——という男がいた。こやつ、法衣・宗規に馴染まない陰險狡猾ごうかちゆうな根性悪だったので、その行状のために再再苦行を課されたもの。そしてこれにうんざりしたので、修道院から出奔、法衣をかなぐり捨てたが、それと一緒にキリスト教徒であること、いや、人間であることも捨ててしまった。あらゆる修道院、とりわけライフェンシュタインを激しく憎んでいたプファイファーはミユールハウゼン(24)へ走り、そこで彼一流の教唆きょうさうを開始し、市参事会と市民の間に混乱と確執を持ち込み、アルトシュタットからここへ逃げて来た聖職

者トーマス・ミュンツァーと手を組んで、聖書の言葉を口実と偽装に利用、働かずに食べる物、着る物を富裕層から「キリスト教徒の権利として」要求するほどけっこうなことはない下層の民衆を煽り立てた。これら一五二五年の共産主義者らのいわく。キリストは仰せられた、渴ける者と「分け合え」、と。進んで資産を提供しようとしないう者は無理やり奪われた。叛乱したならず者どもの徒党にしつかり座を占めた、と見て取ったプファイファーは、大群の鼠を袋の中に追い込んだ、という好い夢——こうした一味の首領は好い夢を見るのが常である——を見た。彼プファイファーはこれを、アイヒスフェルトとテューリンゲン邦の貴族と僧侶たちを悉く根絶駆除せよ、と神の思し召しの啓示だ、と考え、ミュンツァーが反対したにも関わらずアイヒスフェルトへの略奪行を企て、数数の修道院と城塞を破壊・焼き討ちした。一方ランゲンザルツァの暴民はシュロートハイムとフォルケンローデの両修道院を劫略、次いでミュールハウゼン近郊のゲルマル村へ略奪に赴いた。プファイファー一味は教会の鐘、家具、聖器、金銀の調度を満載した九輻の荷馬車を連ねてそこへ合流、ミュンツァーは彼らを真のキリスト教同胞として温かく迎え、馬を下りて自由と博愛について説教を行い、略奪物を分けた。それからエーベレーベンとアルメンハウゼンの城を略奪して燃やし、他の幾つかの修道院をも襲い、もう一度アイヒスフェルトへ侵入、そしてハイリゲンシュタットを攻囲した。いつの世でもそうしたものが、ハイリゲンシュタットの市民連中、あるいは以前から心臓が一揆がたに傾いていたり、あるいは心臓そのものが膝の裏に落っこちていた(臆病で膝ががくがくしていた)ので、断固として強盗団に立ち向かい、その穢らわしい所業を止めさせる代わりに、彼らを市に引き込み、ごろつきどもにへつらった。聖者の町は、二股熊手や殻棹で武装し、汚い上っ張りを着込んだ九人の素晴らしい聖者たちを、本物の聖者様をだつて——仮にいらしてくださったとして——これほどには、というくらいお愛想たらたらで迎え入れた。かくして修道院や城塞でまだ劫略されていないものも今やその運命を辿った。大工のミヒヤ

エルとかいう男はバルトロフへ走り、そこから火を取って来ると、それでライフェンシユタイン修道院を燃やした。——こうした埒まちもない叛乱が頂点に達した時、トーマス・ミュンツァーは卓抜なプファイファーをミュールハウゼンの代官に据えた。農民戦争におけるフランケンハウゼンの会戦が起ると、この英雄殿も恥はずすべきことに夜陰に乗じて逃亡したが、追跡され、連れ戻され、拘禁され、その後ブットシユテットに至る凹道くぼみちで首を刎よねられた。彼は悔悟の色も見せず、傲然として死んだ。プファイファーは私利を図らず、私欲もなかつたが、ミュールハウゼンの町に後後まで残る悲嘆、重い贖罪しよくざい、そして諸侯同盟軍のこの帝国直屬都市に対する高かさに掛かかつた圧迫おぼを齎もたらしたのである。

四四四 王の偉業

ミュールハウゼンの聖サンクトゲオルク教会の傍わらわにそう大きくもない古い像が今なお幾つも見られる。これは都市ミュールハウゼンの来歴を示すもので、同地にはそれに関するまことに不思議な伝説がある。

昔むかしテューリングンに王がいた。この王がある時狩りに出た。すると引き連れた風グレイハウンド犬いぬどもが繁しげみの中にある大きな樹の幹の周りを跳ね回り、どうしてもそこから引き離せなかつた。そこで王の従者の一人がその樹に攀よじ登ると、幹の上から下へ空洞うらうらになっていて、中に何かが隠れていることが分かつた。さればこそ獵犬どもが吠え止まなかつたわけ。樹の洞にいたのは小人の野ヴァイグー・マン男おとこだつた。従者たちはこれを洞から引つ張り出した。王はこの珍物をおもしろがり、野ヴァイグー・マン男おとこを馬車の自分の傍に乗せ、狩りの獲物としたしだい。王は捕とらまえた野ヴァイグー・マン男おとこをノアと名付け、穴蔵の一つに閉じこめて、自ら番をし、かつ世話をした。さてしばらくして王は旅に出なければならな

くなつた。「その留守中」王の子息のゲオルクが城内で毬遊びをしていると、毬が穴蔵の天井に開いた穴から中へ落ちてしまった。そこで小さな王子は下の穴蔵へこう呼び掛けた。「野男のノア、ぼくの毬を返しておくれ」。
 ——野男の返辞「おまえの毬は返してやれない。だつてな、おいらが放り上げようもんなら、うんとこさ遠くへ飛んじまつて、おまえにや二度と見つかりっこないからな。さ、お父つあんの部屋へ行き、ここの鍵を取つて来て、おいらを出しとくれ。そうすりや毬を返すよ」。——そこで王子が父親の部屋から鍵を持って来た。なにしろ他のだれにも穴蔵を開けることができなかったのだから。穴蔵の扉を開けてやると、野男が出て来て、王子に毬を渡し、こう言った。「おまえはおいらが困っているのを助けてくれた。だからおまえが困つたことになつたら、森に入つておれを呼ぶんだ。そうすりや、おいら、おまえを助け出してやる」。——その後間もなく王が帰宅し、なによりもまずご秘蔵の珍物を見に行つた。ところが穴蔵が空っぽなのにびつくり仰天、すぐさま、野男を逃がしたのは余の王子であるう、と疑いを掛け、御前へ呼び寄せると、「ゲオルク、鍵を持ち出して、穴蔵を開け、野男のノアを逃がしたのはおまえだな」と問い質した。——小さな王子は正直に自分がしたこと白状した。そこで王は腹を立てて王子を勘当した。なにしろあの珍物をなにより大事にしていたので。王子は泣く泣く父の城と別れを告げ、哀れな男の子としてあちこちさまよい歩いたが、とうとうある羊飼いに雇われた。この羊飼いはすぐに、この少年は賤しからぬ出だ、と察してずつと手許に置いてやり、立派に羊の番ができるように教え込んだ。——やがて牧童ゲオルクは成年に達し、可愛らしい容姿の娘と知り合い、許嫁にした。——その頃この地方には一頭の怪物が棲んでいた。皆この怪物を無翼龍と呼んだ。この無翼龍には毎年人間を一人生贄にしなればならなかつた。昔の人はこういう怪物を呪いと考へたのである。定めの日に生贄が供えられないと、無翼龍は嵐のように吼え猛り、一帯が破滅しそうになるのだつた。さて、界限の民衆が呼び集えられて、籤を引かされる

時期がまた到来した。籤に当たった者は無翼龍リントウリュウの生贄シヅメにならなければならなかった。籤はよりにもよって羊飼いがオルクの許嫁に当たった。その時ゲオルクは野男ワイルドマンがしてくれた約束を思い出した。彼は皆の前に進み出て、「生贄シヅメを供えるのを延期してください。ぼくが無翼龍リントウリュウを殺してみせる。さもなきや、ぼくの許嫁の代わりにぼく自身が怪物の生贄シヅメになります」と言い、それから急いで森に入り、野男ワイルドマンのノアの名を呼び、助けと力添えを頼んだ。すると野男ワイルドマンが出現、ゲオルクに白馬一頭と剣一振りをくれ、「白い服を着て、この白い馬に跨りまたが、この剣を馬の頭の脇に構えて、怪物目掛けてまっしぐらに進め。怪物はがつがつして口をでっかく開けるから、そしたらおまえは剣を龍の咽喉のどの奥へ突っ込むんだ」と教えた。——何もかもその通りになり、ゲオルクの許嫁もこの邦全土も怪物から解放された。民衆の間に盛大な歓呼の音が響き渡り、至るところ歓びで満ち満ち、ゲオルクは騎士に叙任された。この時素性を訊かれたゲオルクは、自分はこの国の王の子息だ、と打ち明け、身の成り行きを物語った。すると、父王はもうこの世にいない、安心して家に帰り、王国を受け継ぐことができる、と告げられた。こうしたしでいで、王の子息が牧童となり、牧童は騎士となり、騎士が今度は王になったわけ。

王国を継承したゲオルクは国中を旅して廻り、王国を巡検すると共に、自分も武者修行をやつてのけられることを身をもって知った。こうした折ちつぽけな村が目に入った。これは一軒の粉挽き小屋ミユールハウズの周りにできた集落で、ここにはまだ教会がなかった。若き王は神様に感謝したかったので、この開墾地に教会を建立した。教会は王の名を貫もつてゲオルク教会となった。建立を請け負った棟梁はゲオルク王の物語を石に刻まねばならなかった。これが都市ミューールハウゼンの始まりである。

訳注

- (1) ローレ Lohre. 「ローラ」Lohraの誤り。所領名。現テューリンゲン州北部ノルトハウゼン郡にローラ城なる十一世紀の山城の廢墟がある。ヴァルケンリート修道院の女創立者をアーデルハイト・フォン・ラーレ Adelheid von Lareとする歴史小説もある。
- (2) クレッテンベルク伯フォルクマール殿 Herr Volkmarr, Graf von Klettenberg. クレッテンベルク伯爵領はハールツ山地南部とその縁辺部だった。クレッテンベルク——現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡ホーエンシュタインHohensteinの一部——に城壁の名残が見られるかつてのクレッテンベルク城(一〇八七年築城)が拠点だった。伯爵領は一二五三年ホーンシュタインHornstein伯爵家の所有に帰する。以降ホーンシュタインクレッテンベルク伯爵家。
- (3) ヴァルケンリート Walkenried. 現ニーターザクセン州オステローデ・アム・ハールツ郡にある小さな町。ハールツ山地南部縁辺部に位置する。一二一七年アーデルハイト・フォン・ヴァルケンリートがここにドイツ語圏で三番目のシトー会派修道院を建立、修道士たちの手によって、元来森林で覆われた湿地帯に過ぎなかつた周辺の土地は、十二世紀以降、たくさんの養魚池のある豊かな耕地に生まれ変わった。十四世紀半ば修道院の衰退が始まる。農民戦争中数百の農民兵が修道院を襲撃して占拠。一五五七—一六六八年ラテン語学校が修道院に置かれる。これが閉鎖された後、修道院の建物は近隣の住民のいわば採石場として利用された。
- (4) 農民戦争 Bauernkrieg. 「ドイツ農民戦争」Deutscher Bauernkrieg(一五二四—二五)のこと。ルターの「九十五箇条の論題」を端緒とする宗教改革が与えた大きな社会運動の一つといえよう。一五二四年シュヴァーベン地方の修道院隷下の農民が賦役・貢納軽減、農奴制廃止などの要求を掲げて叛乱を起し、これはドイツ語圏全域に波及する。しかし、一五二五年五月聖職者トーマス・ミュンツァー(DSB四三四および注参照)の率いる六千の農民軍がフランケンハウゼンの戦いで諸侯軍に粉碎され、農民側の敗北に終わる。この間約十万人の農民が殺された。ルターはミュンツァーを厳しく非難し、諸侯軍を激励している。
- (5) バルテフェルト出の羊飼いで向こう見ずなハンス・アーノルトなる男 ein kecker Schafhirte aus Barthelfelde, hieß Hans Arnold. 地名・人名ともに未詳。「バルトルフェルトBarthelfeldの羊飼い」としている伝説もある。
- (6) 兄弟エルンスト Bruder Ernst. 「兄弟」。農民軍では身分差はないとして、男はお互いこのように呼び合ったわけ。すなわちフランス革命下の「市民」、ロシア革命下の「同志」。
- (7) クレッテンベルク伯エルンスト Graf Ernst von Klettenberg. ホーンシュタイン伯にしてクレッテンベルクおよびローラの殿エルンスト五世 Ernst V., Graf von Hohnstein, Herr von Klettenberg und Lohra(一五一五—二)か。諸侯軍が勝利した後、ホーンシュタイン伯エルンストは農民軍に荷担した罰としてタルデン金貨千枚を払わねばならなかつたとか。
- (8) 滅 Heft. 「屑」「粕」の意もある。「社会の滅」die Heft der Gesellschaftは「社会の最下層の人人」。

- (9) プラウンシュヴァイク公クリスティアン・ルートヴィヒ Herzog Christian Ludwig zu Braunschweig. プラウンシュヴァイク＝リューネブルク公クリスティアン・ルートヴィヒ Christian Ludwig, Herzog von Braunschweig-Lüneburg (一六二一―一六五)。カーレンベルク侯国、リューネブルク侯国の君侯。
- (10) エルリヒ Ehrlich. 現テューリンゲン州最北の都市。ノルトハウゼン郡に属する。
- (11) 教区監督 Superintendent. キリスト教において一定地域にある教会を纏めて「教区」と称し、これを治める教区長を新教で「監督」、カトリック教で「司教」、聖公会で「主教」という。
- (12) 薄型貨幣 Brakteaten. 半面にだけ刻印された中世の薄い金銀貨。
- (13) オルッターラー銀貨 Orsthaler. 四分の一ターラー銀貨。
- (14) 占い棒 Wünschelrute. 金属製あるいは木製の道具で、先が曲がっている、あるいは二股に分かれている形状の棒。水脈や鉱脈を知ることができる、という俗信に基づく。これを作成できるのは、そうした能力がある、とされる者に限られる。この棒の一端を両手で持ち、もう一端を上に向けて歩行していると、水脈ないし鉱脈がある箇所、棒がひとりで地面を指す、とのこと。
- (15) 十九世紀初頭バイエルンにさへこの俗信に対する信奉者が存在したようだ。
- (16) 仏蘭西王太子御用 ad usum Delphini. ラテン語「アド・ウスム・デルフィニ」。ルイ十四世の長男で成人した唯一の子ルイ・ル・グラン・ドーファン Louis le Grand Dauphin (一六六一―一七一)、すなわちフランス王太子教育のため、相応しからぬ部分を検閲・削除したギリシア・ラテンのテキスト集六十四巻の名称。王太子傅育官モントーシェ公によって使用された。フランス国王の法定推定相続人は「ル・ドーファン」(海豚 Le Dauphinの称号を持ち、紋章に海豚と三つの百合を用いる。さて、ペヒシュタインがこの言葉をどういう意味で使ったのか、訳者には分からない。本来なら「未成年者用」くらいに転化できると思われるから、「ラテン語学校の生徒たちのため」なのか、それとも……。識者のご高教を俟つ。
- (17) バジリウス・ヴァレンティヌス Basilius Valentinus. 錬金術の文献を著したドイツ語圏の著者の一人ではあるが、まだ同定されていない。その文献は一五九九年以降印刷され、十七世紀初頭以降筆写されて伝わっている。ペネディクト会派遣道士として文献に登場、また伝説によればエアフルトの聖ペテロ修道院に在籍した。十五世紀の人、と考えられる。
- (18) 賢者の石 der Stein der Weisen. 中世の錬金術師が探し求めた、卑金属を貴金属に変えるという物質。
- (19) ノルトハウゼン Nordhausen. 現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡の郡庁所在地。ハールツ山地南縁に位置する。エアフルト、イエナ、ゲラ、ヴァイマル、ゴータに次いでテューリンゲン州で六番目に大きい都市。
- (20) マインツ大司教 Erzbischof von Mainz. DSB三三三三注参照。マクデブルク大司教だった上マインツ大司教をも兼任(こうい

- (21) エルリヒ Eilrich. 現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡の小都市。テューリンゲン州最北の町。ハールツ山地の南縁に位置する。
- (22) プライヒャーオーフ Bleicherode. 現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡の小都市。
- (23) あゝの農夫のハンスくん^{ハンス} dem Bauernhänsel. DSB三九五では「羊飼ひ」となっている。
- (24) エルンスト七世伯 Graf Ernst VII. ホーンシュタイン・クレッテンベルク伯エルンスト七世 Ernst VII. Graf von Hohnstein-Klettenberg (一五六二—一九三)。初婚で儲けた子どもらの内たった一人の子息は一五八三年に夭折、他は息女。再婚では子無し。
- (25) 燧炬部屋 Kennate. ドイツ中世の城塞の居館^{居館}(DSB九注参照)にある燧炬を備えた居心地の良い部屋。普通城主夫妻や令嬢などの居室に充てられた。
- (26) 管財人 Administrator. この訳語が適切かどうか自信がない。識者のご高教を俟つ。
- (27) ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン騎士の Ritter Götzens von Berlichingen. 「鉄の手のゲッツ」として有名なこの騎士についてはDSB二九〇と注を参照。
- (28) ケレ Kelle. 現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡エルリヒ、アッペンローデ、ヴォッフレーベンの間に広がる山林にある一種独特な石灰岩地形。
- (29) ケーレ Kelle. ドイツ語「咽喉」。
- (30) 咽喉 Schlund. ドイツ語「咽喉」「深い口」「深淵」。
- (31) リスボンが恐ろしい地震のため倒壊したあの日 An jenem Tage, der Lissabon durch ein entsetzliches Erdbeben zerstörte. 一七五五年十一月一日、万聖節の午前九時四〇分西欧の広い範囲で地震(震源はサン・ピセンテ岬西南西約二〇〇キロと推定される)が発生、ポルトガル王国の首都リスボンは八割以上が崩壊、次いで、津波と大火に襲われた。当時のリスボンの人口は二十七万五千だったが、最大で九万が死んだ、とされる。
- (32) 先例はないし、本来許されないことだった)、後には枢機卿にまで陞^昇ったアルブレヒト・フォン・ブランデンブルク(一四九〇—一五四五)は「贖宥状」すなわち、いわゆる「免罪符」販売をドイツ語圏で盛んに行わせた人物。免罪符販売はルター^{ルター}の教会批判を触発した大きな事由の一つ。従って彼はルター^{ルター}の最も重要かつ最も有名な敵手。
- (20) 鉄の処女のようなもの eine eiserne Jungfrau. 「鉄の処女」は、中世の処刑・拷問道具、と伝えられるもの。実際には存在しなかった、空想の産物ではないか、との説もある。聖母マリアをかたどった、とされる女性の形をした木製あるいは鉄製、内部が空洞の高さ二メートルほどの人形。前面が左右に開く扉になっており、扉には内部に向けた長い鉄釘が一面に植えられている。
- (19) ホーエンシュタイン Hohenstein. 「ホーンシュタイン」Hohnsteinの誤り。尤もDSでもそう表記されていることがある。

- (33) ザルツング湖 Salzungsee. ブルクゼー Burgsee とも。現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡郡庁所在地にして保養地バート・ザルツングの中心にある陥没湖。最深二〇五メートル。ペヒシュタインは一八二〇年代バート・ザルツングで薬剤師主任助手として就業する傍ら、著述に励んでいた。
- (34) ボニファチウス Bonifacius. 「ボニファティウス聖者」der heilige Bonifatius (六七三頃—七五四または七五五)。ゲルマン人へのキリスト教伝道者。DSBに再再登場。DSB六二注参照³⁾。
- (35) ハイリゲンシュタット Heiligenstadt. 現テューリンゲン州アイヒスフェルト郡郡庁所在地。DSB四四〇、四四三に「聖者の町」として訳出。DSB四四〇注をも参照³⁾。
- (36) ブロッケン山 Brocken. ハールツ山地の最高峰。標高一四一四メートル。現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡。山頂は三百日に亘って霧に閉ざされ、九月から五月に至るまで積雪がある。俗信では、悪魔を主と仰ぎ、魔女たちが参集して乱痴気騒ぎをする「ヴァルブルキスの夜」Walpurgisnacht (四月三十日から五月一日にかけての夜)＝魔女の夜宴 Hexennacht の舞台ということになっている。古代ケルト人が夜を籠めて登頂し、山上で日の出を待ち、春の到来を寿いだ習俗が民間伝承でこのように転訛したようである。
- (37) ターレ Thale. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の小都市。ハールツ山地が険しく切り立つ北東縁辺部に位置する。ターレの上部でボーデ河谷が始まる。
- (38) レーゲンシュタインあるいはラインシュタイン der Regenstein oder Reinstein. レーゲンシュタイン (ラインシュタインとも) 一門は下ザクセンの伯爵家。ハールツの伯爵の一つに数えられる。その名はハールツ山地のブランケンブルク近郊の山城レーゲンシュタイン城に基づく。男系最後の人レーゲンシュタイン伯ヨーハン・エルンストは一五九九年に死亡。
- (39) ハイニンヒ捕鳥帝 Kaiser Heinrich der Finkler. DSB三八九注参照³⁾。
- (40) 聖母マリアの日 Marienitag. 「聖母マリアの祝日」Marienfest. 幾つかある。
- (41) ヘルモルト・フォン・レーゲンシュタイン Helmholt von Regenstein. 未詳。
- (42) ブランケンブルク Blankenburg. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の歴史ある都市。
- (43) クヴェードリンブルク Quedlinburg. DSB三三二に修道院の名として初出。現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の歴史ある都市。ハールツ山地の北、ボーデ河畔に位置する。
- (44) 高く尖った巖山 hochgeigte Felsenreihen. 二の断続的に連なる奇怪な形をした巖山が「悪魔の壁」Teufelsmauer である。現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡にある。堅い砂石から成る岩石形成物。パレンシュテットからリーダーとヴェッターズレー

- ベンを経てブランケンブルクまで二〇キロに及ぶ。突き出た険しい巖にはそれぞれ名が付いていることが多い。
- (45) 元祖共産主義者 Urkommunist. カール・マルクス／フリードリヒ・エンゲルスによる『共産党宣言』Karl Marx / Friedrich Engels: *Manifest der Kommunistischen Partei* もしくは『共産主義者宣言』*Das kommunistische Manifest* が発表されたのは一八四八年。従ってスピシュタインは本書編著時「共産主義」「共産主義者」なる概念を知っていたわけ。
- (46) ターレ近くの悪魔の淵 sein Pfuhl bei Thale. 二二で「悪魔の淵」と訳したのは原文では「彼の淵」。「彼」は「悪魔」を受けているので意識した。次の話の「クレートの淵」の別名。
- (47) ボーデ川 die Bode. ハールツ山地の最も有名、最も重要な河川の一つで、総延長一六九キロにも及ぶ。
- (48) 悪魔の踊り場 des Teufels Tanzplatz. DSB一九〇参照。
- (49) クレートの淵 Crepfuhl. DSB一九原注には「これは悪魔の淵という意味である。因みに北部ハールツの住民は悪魔の子のことをクレートの子と呼ぶ」Das heißt Teufelspfuhl, wie die nördliche Harzbewohner Kreckind ein Teufelskind nennen. とある。
- (50) ゴスラール Goslar. DSB一六四、三九〇注参照。またゴスラールは中世——DSB三九一にあるように——近傍の鉱山ランメルスベルクから産出する豊富な銀で銀貨を製造したのである。
- (51) 娘たちの跳躍 Magdesprung. メークデシュプリングは現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡ハールツゲローデの一部。ゼルケ谷にあり、ゼルケ川に貫流されている。
- (52) ハールツゲローデ Harzgerode. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の大都市。初出DSB三九一。
- (53) 乙女ヘルヴェツィア Jungfrau Helvetia. スイス(ラテン語「ヘルヴェツィア」)を擬人化した槍と盾を持った女神。十七世紀頃から登場。スイスの象徴。
- (54) ファルケンシュタイン城 Schloß Falkenstein. ハールツ山地にある中世盛期の山城(築造一二二〇—一八〇)。メークデシュプリング(現ハールツゲローデ北部)とマイسدルフ(ファルケンシュタイン／ハールツ南西部)の間、ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡ファルケンシュタイン／ハールツにある。城郭の本質的な部分は保存されている。
- (55) ファルケンシュタイン伯ホイアーなる人 ein Graf Hoyer von Falkenstein. 一二五二年没。『ザクセン宝鑑』の編著者アイケ・フォン・レプゴウの重要な支援者としてファルケンシュタイン伯家で最も名がある。
- (56) ザクセン宝鑑 Sachsenspiegel. 東部ザクセンの騎士アイケ・フォン・レプゴウEike von Repgow(一一八〇頃—一二三三以降)によって一二二五年纏められたドイツ最古の法記録集。ファルケンシュタイン伯ホイアーの要請に拠る。初めラテン語だったが、ドイツ語に翻訳された。私撰の法記録集ではあるが中・近世ドイツ——特に東ドイツ、北ドイツ——において公の法典同様に扱わ

- れた。
- (57) ティーディアンの森 der Wald Tidian. 今日もなお深い森として保たれているようだ。
- (58) ティーディアン洞 Tidiānsöhle. ゼルケの山の麓にあるが、洞窟の口は低く、入り難い由。
- (59) 例の魔法の花 die Wunderblume. これまでの伝説(たとえばDSB二九七)にもたびたび登場している、宝庫の門を開いてくれる花。この後DSB四二九にも出る。
- (60) ヴァーターレーベン(ヴァッサーレーベン) Waterleben (Wasserleben). 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の村ノルトハー
ルツの一部ヴァッサーレーベン。
- (61) ハルバーシュタット Halberstadt. DSB三七六注参照。八〇四年カール大帝(＝シャルルマーニュ)によって司教座が置かれた
歴史の古い都市である。
- (62) 凹道 Hohweg. 両側が急斜面の道。切り通し。谷あいの道。
- (63) シュトールベルク伯ボート七世 Graf Botho VII. von Stolberg. シュトールベルク＝ヴェルニゲローデ伯ボート七世(一四二二-
一五五)。
- (64) シュヴァルツブルク伯ハインリヒ Graf Heinrich von Schwarzburg. ロイテンベルク＝ラウエンシュタイン＝シュヴァルツブルク
伯ハインリヒ二十世(一四二一-一六一)か。
- (65) 剛胆伯と添え名されたホーンシュタイン伯ハインリヒ Graf Heinrich der Kühne von Hohnstein. ホーンシュタイン＝クレッテン
ベルク＝ローラーウターベルク＝シャルツフェルト伯ハインリヒ十一世(一四〇二-一五四)。
- (66) 領土相互相続契約者 Erverbrüderete. 訳語には自信がない。識者の「高教を俟つ。ただし「Erverbrüderungsvertrag」なる成語
はある。
- (67) ハルバーシュタット司教ブルヒヤルト三世 Bischof Burchard III. von Halberstadt. ブルヒヤルト・フォン・ヴァールベルク(在
位一四三七-一五八)である。
- (68) 黄金の沃野 die güldne Aue. 「ディー・ゴルデネ・アウエ」die goldene Aue。現テューリンゲン州とザクセン＝アンハルト州
の州境、ノルトハウゼンとザンガーハウゼンの間の地方。北はハールツ山地南縁、南はヴィントライテ丘陵とキュフホイザー丘陵
に接する。ゾルゲ、テュラ、ライネ、ゴンナなどの河川が貫流している。
- (69) ザクスヴェルフェン村 Dorf Sachsenfen. 現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡の町ハールツトアの一部下ザクスヴェル
フェンである。

- (70) ロスラ Robla. 現ザクセン＝アンハルト州マンスフェルト＝ジュートハールツ郡の小さい町ジュートハールツの一部。
- (71) ヴァルハウゼン Walhausen. 現ザクセン＝アンハルト州マンスフェルト＝ジュートハールツ郡の小さい町。
- (72) マンスフェルト伯領の村ロータ Rota, einem mansfeldischen Dorfe. マンスフェルトは現ザクセン＝アンハルト州マンスフェルト＝ジュートハールツ郡の都市だが、ここではマンスフェルト伯爵家のことであろう。「マンスフェルト家」の家名の謂われはDSB四一三で説かれる。
- (73) アンハルト Anhalt. ドイツの極めて古い大貴族の家系アスカニア家の領土分割によってアンハルト君侯家が発祥。家名はこのアンハルト城に基づく。一旦廃墟となったものを一四七年以降アスカニア家のアルブレヒト熊辺境伯が再建。ハールツ地方で最も強力な要塞となり、ほぼ一三〇〇年頃まで居住され続けた。現在ハールツゲローデの市域に城址がある。
- (74) 碧玉の巖根に auf einem Jaspisfels. 原文は上記の通り。「碧玉」は宝石の一種なので、首肯し難いが……。
- (75) ファウスト博士 Doctor Faustus. 一般的知識としてはDSB一四一注参照。ただし、G・シュヴァープ『民衆本ファウストゥス博士』Gustav Schwab: *Das Volksbuch vom Doctor Faustus*, 1888. (民衆本の再話) 冒頭に、ファウストゥス博士はアンハルト伯爵領で生まれたと記されている。また、第三章では、唄を歌って物乞いをしていた若者クリストーフ・ヴァーグナーを、その機転が利くこと、狡猾なことを見込んで、学僕(助手)として雇い入れた、とある。
- (76) 空濠 Zwinger. 中世城郭の外壁と内壁の間の空濠・空き地。循環道路・闘技場・練兵場・猛獣飼育場など多目的に使用された。
- (77) ファウスト博士の学僕クリストーフ・ヴァーグナー Doctor Faustus' Famulus, Christoph Wagner. 前掲注参照。彼もまた黒魔術師だったと云々。
- (78) 皇帝ハインリヒ Kaiser Heinrich. 神聖ローマ皇帝ハインリヒは数多い。ここではハインリヒ四世(在位一〇八四―一一〇五)か、その息子ハインリヒ五世(在位一一一一―一二五)か。両者についてはDSB四一五注参照。いずれにせよこの話は史実ではあるまいから、穿鑿は無用であろう。
- (79) これぞかの男の地所なる Das ist des Manns Feld. 原文は上記の通り。
- (80) マンスフェルト Mansfeld. マンスフェルト伯爵家はドイツ最古の貴族の一つだった。一七一〇年マンスフェルト城に居住していた最後のマンスフェルト伯ゲオルク三世が亡くなり、一七八〇年男系の末裔ヨーゼフ・ヴェンツェル・ネポムク・マンスフェルト伯が馬車で事故死し、伯爵家は絶えた。
- (81) 家紋 das Wappen. マンスフェルト伯爵家の家紋は二本の羽根飾りの付いた胄(面頬が下ろされている)と盾から成り、盾には白地に赤い菱形が六箇描かれている。

- (82) 円卓の騎士たち die Ritter der Tafelrunde. 「円卓の騎士」なる概念は——一一五〇年頃か——アングロ・ノルマン系の司祭にして詩人口ペール・ウァース Robert Wace (一一一〇頃—七四以降) によって「アーサー王物語」に導入された由。
- (83) 聖ゲオルク St. Georg. DSB四四四にもそのドイツ版が登場する。十四救難聖者の一人にして、龍退治で極めて有名なこの聖者の伝説は以下のようなものが一般的であろう。
- レバノンのベイルト界隈でのごとく、ある湖に恐ろしい龍が巣くって人人を不安に陥れていた。しばしば町の外にまでやって来て、その吐く毒の息吹で大気を汚染した。町の者たちは一日に二匹の羊を生贄としていたが、ほどなく羊が絶えてしまった。神託を伺うと、龍に人間の生贄を捧げねばならぬ、だれが死ぬかは籤で決めよ、という始末。ある日籤は王女のマルガレーテ(真珠) 姫に当たった。姫が湖岸の巖の上で涙を流していると、聖ゲオルクがそこを通り掛かり、嘆きの乙女に理由を問ひ質した。さて、龍が湖中から出現すると、聖ゲオルクは乗馬に跨り、神に祈念を凝らし、龍目掛けて突進、槍を深深と突き刺した。龍はまだ死んではいなかったが無力となり、聖ゲオルクの言いつけでその帯を龍の頸に巻いたマルガレーテ姫に牽かれて町へ連れて行かれた。かくして聖ゲオルクは民衆に言った。「あなたがたが神を信するなら、わたしはこの怪物を完全に殺そう」と。マルガレーテの父なる王は二万の人人と共に洗礼を受けた。
- (84) 少なくともあのクレッテンベルク伯のような所業に及んだからである thatens dem Grafen von Klettenberg zum mindestens gleich. DSB三九七参照。
- (85) この石 derselbe Stein. 拳大の穴が一つ開いているかなり大きなこの石は「ホイアー石」Hoyerstein と呼ばれ、現ザクセン＝アンハルト州マンسفエルト＝ジュートホルツ郡の都市ゲルプシュテットの町外れヴェルフスホルツ Welfsholzに残っている。
- (86) マンスフェルト伯爵家の祖先ホイアー伯 der Anherr der Grafen von Mansfeld, Graf Hoyer. マンスフェルト伯ホイアー一世(一一一五年二月十一日陣没)。神聖ローマ皇帝ハインリヒ五世の元帥としてヴェルフスホルツの会戦で戦死。この戦いはハインリヒ五世と叛乱を起こしたザクセンの諸侯たち——統領はザクセン公ロタール(後の神聖ローマ皇帝。後掲注参照)——との抗争の頂点と言えよう。これもザクセン人ではあったが皇帝に忠実な将帥マンسفエルト伯ホイアーが、果敢な攻撃の最中、グロイチュ伯ヴィーブレヒトによって斃されたため、勝敗が決し、皇帝は逃亡せざるを得なかった。なお、ヴェルフスホルツは森でもあるが、集落名でもある。ゲルプシュテット(前掲注参照)の一部。DSB四九二はマンسفエルト伯ホイアーをザクセン軍の司令官としていて史実とは反対。尤もこのDSB四一五の内容も訳者にはよく分からない。
- (87) 皇帝ハインリヒ五世 Kaiser Heinrich V. ドイツ王(在位一一〇六—一一二五)・神聖ローマ皇帝(在位一一一一—一一二五)ハインリヒ五世。父皇帝ハインリヒ四世に謀叛して、これを追放。DSB四四四は両者に纏わる伝説。

- (88) グロイチュ伯ヴィープレヒト Graf Wiprecht von Groitzsch. ホイアー伯の宿敵グロイチュ邊境伯ヴィープレヒト二世(一一五〇頃—一二二四)の子息ヴィープレヒト三世(一〇八八頃—一一一六)であらう。
- (89) 帝王切開で世に出た aus seiner Mutter geschnitten. 直訳すれば「母親の体から切開で取り出された」。従って、「(女によって)生まれたのではない」「angeboren」になる。シェイクスピアの悲劇『マクベス』で、魔女の一人が、マクベスは女によって生まれた者に斃されることはない、という意味の予言をするが、帝王切開で世に出たマクダフに殺される。
- (90) 我、ホイアー伯、「女により」生まれざりし者 Ich Grave Hoyer ungebom. 因みに別の伝説——こちらの方が筋が通っている——によれば、会戦前夜マンスフェルト伯ホイアーは配下の騎士を呼び集め、この石を握り締めて、こう言った由。「生まれ正しきそれがし、ホイアー伯 Ich Graf Hoyer echt geboren は、いまだかつて戦に敗れしなした。この石をしっかりと握りしごとく、この合戦も我がものとなるは必定」。
- (91) マンスフェルト家の城アルンシュタイン die Mansfeldische Burg Arnstein. アルンシュタイン城——一三八七年レーゲンシュタイン伯爵家からマンスフェルト伯爵家がい取った——は現ザクセン・アンハルト州マンスフェルト・ジュートハールツ郡にある山城の廃墟。主塔(DSB七九注参照)と居館(DSB九注参照)は残っている。
- (92) 皇帝カール五世 Kaiser Karl V. DSB八五注参照。
- (93) クヴェーアフルト Querfurt. 現ザクセン・アンハルト州ザーレ郡の都市クヴェーアフルトにある同名の城は、本質的部分が保存されている中世の城郭としてドイツ最大のものの一つである。
- (94) ブルーノ聖者 der heilige Bruno. この名のカトリック教会の聖人は三人いるが、ここではブルーノ・フォン・クヴェーアフルト。アーダルバート聖者に続きプロイセンでキリスト教伝道に努めた使徒。一〇〇九年ダンツィヒ近郊で殉教。
- (95) これまでも再再、双子とか三子といたように一人以上の子を産む女どもはけしからぬやつらだ、と言明していた hatte schon zum öftern sich ungünstig über Frauen geäußert. 同時に複数の子を産出する女性は、夫以外の男と通じたためだ、との荒唐無稽な俗信があった。DSB一四五、DS五二一、五八四参照。
- (96) 皇帝ロタール Kaiser Lothar. ザクセン公(在位一一〇六—一三三七)・ドイツ王(在位一一二五—一三三七)・神聖ローマ皇帝ロタール三世(在位一一三三—一三三七)。
- (97) 歳の市 Jahnmakt. 中世以来の市で数日に亘る。「メッセ」とか「キルメス」と呼ぶ地方もある。後者は「教会堂開基祭」だが、実際に教会が建立された記念日の祝祭というわけではない。野外に屋台が出て、行人が小間物を始めとするさまざまな品物売り、旅回りの香具師がこれまたさまざまな見せ物を繰り広げ、偽医師やら歯抜きやらが開業した。近郷近在から夥しい人が集まるので、

- (98) これを利用して木材市、家畜市、ワイン市等が開かれることがあったし、現在でも開かれる。ヘルドルンゲン *Heldringen*。現テューリンゲン州キュフホイザー郡の小さな町。町には水濠を回らした堡塁ヘルドルンゲン城がある。DSB四三二注参照。
- (99) ゲホーフエン *Gehofen*。現テューリンゲン州キュフホイザー郡の小村。小さな口許マウス隠カウし *Vorstücken*。顔の下部を覆うヴェールの一種。十七世紀の女性風俗。
- (100) トレブラ *Trebra*。現テューリンゲン州キュフホイザー郡の小村。ノルトハウゼン郡の町ホーエンシュタインの一部トレブラではない。「トレブラ一族」については未詳だが、十一—十二世紀頃この地名を名乗る貴族一門があったらしい。それ以降は一九一八年までシュヴァルツブルク＝ゾンタースハウゼン伯爵家→侯爵家の支配下にあった。
- (101) メルゼブルク *Merseburg*。現ザクセン＝アンハルト州南部、ザーレ川左岸、クヴェーアフルト高地にある都市。中部ドイツ最古の都市の一つ。
- (102) テイロ・フォン・トロータ *Thilo von Trotha*。一四四三—一五一四年。メルゼブルクの司教にしてライプツィヒ大学管理官カレッジ。中世後期の最も重要なドイツの司教の一人とされる。
- (103) 盾型の中に指環を嘴くちばしでくわえた一羽の鴉を置き、上部の冠から胃飾りカモとして二本の腕と指環を掴つかんでいる二本の手が上がついているものだった *setzte in das Schild einen Raben, der einen Ring im Schnabel trug, und oben aus der Krone hoben sich als Helmkleinod zwei Arme und Hände, deren Finger einen Ring faßten*。後段は何を言っているかとやら。この話の結びに挙げられているメルゼブルク大聖堂内にある青銅板の紋章を見る限り、図柄は以下のようなものである。上部に一匹の狐、中央に胃の面頬（冠）には見えない）、面頬（冠）の下に指環をくわえた鴉を描いた盾。これらの周囲には唐草様の蔓が伸びている。「指環を掴んでいる手」などはどこにも無い。
- (104) スピリトゥス・ファミリアリス *Spiritus familiaris*。ラテン語。「くっつく魔物」くらいの意。DSの英訳者D・ウォードはGLにおいてこれを「妖術師の使い魔」*the familiar of sorcerers*と意識しているが、いわゆる「使い魔」は魔女や妖術師が身近に置いて仕事を手伝わせる小動物（猫、犬のような小家畜、あるいは、蛙、鼠、鼯（カモ）、梟（カモ）など）であり、DS八五「スピリトゥス・ファミリアリス」の記事にはそれを窺うかがわせる点は皆無である。
- (105) DS八五でグリム兄弟は二つの印刷された資料を基とし、適当に繋ぎ合わせて、これに関する伝説を紹介している。記事の過半を占めるアウクスブルクの博労の話は「ライプツィヒ奇譚」*Der Leipziger Aventureur* 1756。第二部に、それから冒頭の三段落はグリーンメルスハウゼン著「駁ジンプリチウス、あるいは、稀代の女詐欺師ならびに放浪者なるクラーシエの詳細にして世にも珍しき生涯

の物語」 Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen: *Trutz Simpler oder Ausfährliche und wunderseitsame Lebensbeschreibung der Erzbeknigen und Landstörzern Courasche*. 1670. の十八章「二十一章に抛った」と兄弟自身の注に明記されている。これらによれば、「スピリトゥス・ファミリアリス」なる伝説登場形態は、容器に入った正体不明の生き物で、一旦その所有者となった人間から離れることなく、その人間の望む通りの物を与え続ける。ただし、これを無理に排除するとその人間は破滅する。または、これを所有したまま死ぬと、地獄へ堕ちる。

十九世紀ドイツ最大の女流作家A・フォン・ドロステーヒュルスホフはDS八五のアウクスブルクの博労の話に感興をよそられ、四二〇行に及ぶ長大な物語詩「馬商人のスピリトゥス・ファミリアリス」Anette von Droste-Hülshoff: *Der Spiritus familiaris des Robärschers*. 1842. を書き上げた。

ドイツロマン派のF・ド・ラ・モット・フーケには、望みの物を何でも与えてくれるが、それを持ったまま死ぬと地獄となる——人に売ることはできるが、買った時より安く売らねばならない——ガラス壺に入った黒い小悪魔「紋首台小人」をモチーフとした小説『紋首台小人の物語』Friedrich Heinrich Karl Freiherr de la Motte-Fouqué: *Eine Geschichte vom Galgenmännlein*. 1810. がある。

R・L・ステイヴンソンの『島の夜嘶』に収められた「壺の妖鬼」Robert Louis Stevenson: *The Bottle Imp*. In *The Island Nights' Entertainments*. 1893. のガラス壺に入った小妖魔もガルゲンメンラインと全く同じ属性だが、ステイヴンソンはフーケの作品からヒントを得たわけではないそうなので、

ところで、ベヒシュタインが紹介するこの伝承では、どうしてこの猫がスピリトゥス・ファミリアリスなのかさっぱり分からない。これは劫を経た古猫が魔物になった(日本の「化け猫」に過ぎない)。

ザクセン族 Sachsen. DSB一八七注参照。

(107)(106) ウンシュトルト川 Unstrut 「ウンストルト」のように発音されることもあるが、ここでは標記の片仮名表記で統一する。ザーレ川に注ぐ支流で長さほぼ一九二キロ、支流中最も水量が多い。テューリンゲン盆地の全体がおおよそその流域である。

(108) アイヒスフェルト Eichsfeld. 現ニーダーザクセン州南東部、現テューリンゲン北西部、現ヘッセン州北東部の歴史的地域。ハールツ山地とヴェラ川の間にある。

テューリンゲン族 Thüringer. 原文は上記の通り。テューリンゲン族。

(110) 黄金の沃野 die güldne Aue. DSB四〇八注参照。

(111) シュトールベルク伯爵ボート Graf Botho von Stolberg. 至福伯爵と添え名されたシュトールベルク伯爵三世 Botho III., der

- (114) Glückselige, Graf zu Stolberg (一四六七—一五三八) である。一四九三年渡海してエルサレムに赴いている。彼はシュトールベルク伯爵領、ヴェルニゲローデ伯爵領、ホーンシュタイン伯爵領を治めた。
- (112) ドーリンゲン族 Düringer: 原文は上記の通り。テューリンゲン族。
- (113) ソルプ人 Sorben. ソルビア人。ヴェンド人とも。現ドイツに居住する西スラヴ系の種族。ヴェンド人についてはDSB二二三注参照。
- (114) メロヴィヒ Merovig: 原文は上記の通り。フランク族の王。おそらくはクロディオの子息。トゥルネーの王(在位四五七—四五八)。DS四二四参照。
- (115) クロディオ Chlodio. 原文は上記の通り。サリイ族出身としては最初のフランク族の王。後にトゥルネーの王(在位四二六—四四七)DS四二四参照。
- (116) ヒルデリヒ Childerich. 原文は上記の通り。フランク族の王。メロヴィヒの子息。トゥルネーの王(在位四五八—五一二)。キルデリク一世。その子息クロヴィス一世は最初トゥルネーの王(在位四八一—五一二)。後にフランク族の大部分とガロローマ、すなわちローマ帝国支配下にあつたガリアを征服した。DS四二五参照。
- (117) イルメンフリート Immentried. 原文は上記の通り。
- (118) 東ゴート族の王テオデリヒ Ostrothoenking Theoderich. 日本では「テオドリック」と表記される。民族大移動時代の最も重要な人物の一人。「大王」と添え名された。四五二—五六一—五二六年。
- (119) ある時、夫の食卓に半分しか料理を並べなかつた……夫が兄弟たちの死を惹き起す気になるようそそのかしたのである Sie deckte einstmals ihres Gemahls Tisch nur halb ……und reizte ihn an, seiner Brüder Tod herbeizuführen. DS五五〇参照。
- (120) コムニオ Communio. ラテン語。「共有」「共同宴」。
- (121) ザクセン^{ザクセン}の城 Sachsenburg. 現テューリンゲン州キュフホイサー郡オルデイスレーベンの一部ザクセンブルク近郊にある山城。築城者としては、十一世紀半ばまでの領主オルラムィンデ伯爵家、ないし、遅くとも十二世紀以降領主となつたテューリンゲン方^方伯家が考えられる。^方伯家が考えられる。^方伯家。
- (122) ザクセン^方宝鑑^方 Sachsen Spiegel. DSB四〇六注参照。
- (123) アールンスブルク Arnsburg. アールンスブルク Arensburg (シュレスヴィヒ^方ホルシュタイン州の同名の都市ではない)とも。現テューリンゲン州キュフホイサー郡ゼーガ村の南西は^方一・五キロにある山城の廢墟。
- (124) 髭もじ^方のルートヴィヒ Ludwig mit dem Barte. 下フランクテンのライネック伯爵家出身で、近縁であるマインツ大司教を後ろ

- (125) 盾として、一〇四〇年テューリングン山地^{ツアタ}北部に封土を与えられ、フリードリヒスローダ近郊にシャウエンブルク城を建設。一〇五六年没。ザリーアー家 Sailer の一門。中世テューリングンの豪族ルードヴィンゲン家 Ludowingar の始祖。
皇帝コンラート二世 Kaiser Konrad II. ザリーアー朝初代ドイツ王(在位一〇二四—三九)、神聖ローマ皇帝(在位一〇二七—三九)。
- (126) ザンガーハウゼンの町 Sangerhausen, die Stadt. 現ザクセン＝アンハルト州マンスフェルト＝ジュートハールツ郡郡庁所在地の
中都市。同州南西部、現テューリングン州との州境附近に位置する。
- (127) 兄ルートヴィヒ sein Bruder Ludwig. 「伯父ルートヴィヒ」sein Onkel Ludwig (すなわち「ルートヴィヒ二世」)でないとおかしいが、原文のまま。
- (128) ホーンシュタイン Hohnstein. DsB 四三三注参照。
- (129) 巻き貝 Raspe. 従つてこの人は「ハインリヒ・ラスペ」となるわけ。この名はルードヴィンゲン家にしばしば現れる名だが、多くは当主の弟に附けられている。後代ハインリヒ・ラスペ四世は十字軍で陣没した兄テューリングン方伯^{グロト}ルードヴィヒ四世の遺子で方伯位を継いだ甥ヘルマン二世の後見人を務めたが、ヘルマン二世の母、すなわち兄嫁のエリーザベト(後世聖女とされる)を居城ヴァルトブルクから追い、一二四一年ヘルマン二世が十四歳で急死すると、テューリングン方伯(在位一二四一—四七。最後の方伯)となった。
- (130) ラスペンベルク Rasperberg. 「ラステンベルク」Rastenburg の誤り。現テューリングン州北東部ゼンマーダ郡の小さな町。一〇七〇年文献に初出。この年数は同地の城ラスペンブルク Rasperburg の築工(一〇七〇—七二)と同時期である。築城者は跳躍^{ツルン}伯^{グロト}ルードヴィヒかその弟ハインリヒ・ラスペだ、とする説がある。ハインリヒ・ラスペ三世(一一五五—八〇)の居城。
ルートヴィヒ Ludwig. シャウエンブルク伯ルードヴィヒ(一〇四二—一一三三)。「跳躍^{ツルン}伯^{グロト}」der Springer と添え名された。しかしながら、「ザリーアー」すなわちザレ川流域に住むフランク族のラテン語「ザリクス」Salicus が Springer と誤訳された。その由来として伝説が作られたのかも知れない。ルードヴィヒがザレ河畔のギービヒェンシュタイン城に監禁されたことはないのでは。テューリングン方伯領の萌芽となったヴァルトブルク城を築いたのは彼だ、とされる(DsB 四五二参照)。彼の子息テューリングン方伯^{グロト}ルードヴィヒ一世を嚆矢として、彼の後裔は一一三〇年から一二四七年までテューリングン方伯の称号を帯びた。テューリングン方伯^{グロト}ルードヴィヒ二世についてはDsB 四五二、四五四、四五五、四五八参照。
- (132) ザクセン宮中伯^{グロト}フリードリヒ Platzgraf Friedrich zu Sachsen. 横死したフリードリヒはまだザクセン宮中伯^{グロト}になってはいなかった(しかしながら、この称号を冠している文献は少なくない)。この人はザクセン宮中伯^{グロト}フリードリヒ二世(?—一〇八八)

- の唯一の子息プーテレンドルフ伯フリードリヒ三世・フォン・ゴゼック Friedrich III. von Goseck. Graf zu Putendorf (一〇六五頃—八五)である。一〇八一年シユターデ伯にしてノルトマルク辺境伯ロタール・ウード二世の息女アーデルハイト(？—一一一〇)と結婚。一〇八五年二月ウンシユトルト河畔のチャイブリッツ Zschalitz (現ザクセン＝アンハルト州南部ブルゲンラント郡フライブルク・アン・デア・ウンシユトルトの一部)近くで狩猟中殺された。犯行の背後関係は闇の中である。同年、彼の死後少しして生まれた彼の子息フリードリヒ四世は、後に三世の寡婦アーデルハイト・フォン・シユターデ(すなわちフリードリヒ三世のの実母)と結婚した跳躍伯ルートヴィヒ(すなわちフリードリヒ四世の継父)を殺人者として糾弾した。フリードリヒ三世のものであったテューリンゲンの世襲領の大半が継父の所有に帰したことも疑惑を強めたことであろう。フリードリヒ三世がその父より前に死んだので、フリードリヒ四世は父の称号プーテレンドルフ伯とその残余の所領の他に、祖父ザクセン宮中伯フリードリヒ二世の遺領と称号を継いだ。
- (132) ヴァイセンブルク Weisenburg. この城はチャイブリッツ(前掲注参照)にあった。跳躍伯ルートヴィヒと再婚したフリードリヒの寡婦アーデルハイトが、一〇八九年、聖マルツイニウス山上の聖ポニファツイウスなる名称のベネディクト派女子修道院に変えた。
- (133) ギービヒェンシユタイン Gleichensheim. 現ザクセン＝アンハルト州の大都市ハレの市区ギービヒェンシユタインにある海抜ほぼ八七メートルに位置する平城。ザーレ川に臨む。上城と下城から成る。九〇〇—一〇〇〇年築造。一三八二年以降マクデブルク大司教の居城となった。
- (134) 後に跳躍伯と添え名められたテューリンゲン方伯ルートヴィヒ Der Landgraf Ludwig von Thüringen, der Springer zubenahmt 前掲注に記したように、初代テューリンゲン方伯ルートヴィヒはこの人ではなく、この人の子息である。
- (136) 「処女まりあヨ、汝ノ僕ヲ受ケ止メタマエ」 suscipe servum, virgo Maria! ラテン語。なお聖書には以下のような言葉がある。「汝のしもべの中保となりて福祉をえしめたまへ、高ぶる者の我をしへたぐるを容したまへことなかれ」 suscipe servum tuum in bonum non calumniantur me superbi. (旧約聖書詩篇百十九篇百二十一節)。
- (137) キフホイザー山上に auf dem Kiffhäuserberge. ベヒシユタインは終始一貫上記のように表記しているが、一般には「キユフホイザー」Kyffhäuserである。現テューリンゲン州と現ザクセン＝アンハルト州の州境に沿う黄金の沃野と下ハールツ山地の南東にある山の尾根。DS二三「キユフホイザーのフリードリヒ赤髭帝」によれば、皇帝は死んだのではなく、最後の審判の日までこの山中の洞窟で石の円卓に向かって坐っている、とのこと。眠っているのだが、時には目覚めることも。ある羊飼いが皇帝お付きの侏儒に案内されてフリードリヒの許に行った話では、赤髭帝は、鴉どもがまだ山の周囲を飛んでいるか、と羊飼いに訊き、羊飼いの

が肯うと、それではまたあと百年眠らねばならぬ、と言ったそうなる。

この伝説は十九世紀になると、強力な君主の下でドイツ諸邦の統一を目指す政治運動ととりわけ結び付けられた。一八七一年プロイセン王国の主導によりドイツ統一が成し遂げられ、ドイツ帝国が誕生すると、一八九〇年から九六年に掛けて、キユフホイザー山山頂にある古のキユフハウゼン城の廃墟に「キユフホイザー記念碑」Kyhäuserdenkmal —— 「赤髭記念碑」Barbarossadenkmalとも呼ばれる——が建立された。

フリードリヒ伝説を素材とした作品の内でも有名なものの一つはF・リュッカートの詩「老バルロッサ」Friedrich Rückert: *Der alte Barbarossa*. 1817. による。

(138) 教皇に破門された vom Papst in den Bann gethan ward. この伝説は次の二人の神聖ローマ皇帝フリードリヒを混ぜ合わせたもの、との指摘がDS四九四の原注にある。

赤髭、バルバロッサと綽名された神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世(在位一一五二—一九〇)はホーエンシュタウフェン家出身の皇帝で、歴代皇帝屈指の有能ぶりを発揮し、ドイツでは宿敵であり従弟でもある強大な領邦君主バイエルン公・ザクセン公・ハインリヒ三世(獅子公)を無力化するなど諸勢力を統御できたが、イタリア政策は失敗した、といえよう。教皇アレクサンデル三世から破門された。第三次十字軍の総司令官として一一八九年出征、翌年イコニウムの会戦で大戦果を収めたが、同年小アジア南東部キリキアのサレフ川で水死した。不死伝説は有名。DS、DSBに再登場する。

また、一世の孫の神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世(在位一二二〇—一五〇)・シチリア王(フェデリーコ一世。在位一一九七—一二五〇)は、極めて開明的な君主であり、治世をイタリア統一のために費やしたが、教皇と諸都市国家の抵抗に遭い、挫折してイタリアで病死した。教皇グレゴリウス九世によって二度破門されている。遺体はシチリア島パレルモの司教座聖堂に安置されているが、不死伝説もある。イタリアで生まれ、イタリアで没し、シチリア王としてパレルモに宮廷を開いた彼はフェデリーコとしてイタリア史に名を残しており、ドイツに赴きはしたが、母国はむしろイタリアである。

(139) 私は全ての者に同じ権利を与え、異教諸国を従わせ、ユダヤ人の勢力を決して再起できぬまで打ちのめし、修道女たちが結婚し、あるいは、仕事に就けるよう計らおうぞ Das gleiche Recht werde er allen bringen, die heidnischen Reiche sich unterwerfen, die Kraft und Macht der Juden niederwerfen, daß sie nimmer wieder aufkommen, die Nonnen verheirathen und zur Arbeit leiten. 念のため記しておくが、これはまさに十九世紀のドイツ人新教徒、すなわちペヒシュタインなどの言いそうな台詞。彼一流の冗談である。

(140) シヤルマイ Schallmei. 普通 Schalmel と綴る。ダブルリードの付いた中世の木管楽器。オーボエの前身。

- (141) リート Rieth. 現テューリンゲン州都エアフルトの一部。
- (142) ちっぽけな給仕が一人 ein kleiner Kellner. 皇帝のお付きである道化の侏儒に他ならない。
- (143) 担保遊び Pfänderspiel. 「罰金遊び」とも訳される。六一二人程度でやる集団遊戯。ある競技——たとえば注意力を競う——でだれかが失敗すると、担保として所定の品（これは後で請け戻せる）を提出、もしくは、所定の行為をしなければならぬ。
- (144) 時 Zoll. 十分の一脚尺。インチ。
- (145) テイレダ Tilleda. キュフホイザー山麓のテイレダ城はおそらく十世紀前半既に存在した。一一四二年フリードリヒ赤髭帝はここに滞在している。
- (146) ジットENDORF Sittendorf. 現ザクセン＝アンハルト州マンスフェルト＝ジュートハールツ郡の町ケルブラの一部。キュフホイザー山地の北東にある。
- (147) シュヴァルツブルク伯 der Graf von Schwarzburg. D S B 四三六でその家門の起源が説かれている。一族発祥の城は現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシュタット郡のザールフェルト西方シュヴァルツア谷のシュヴァルツイン城 Schwarztzinnburg。
- (148) 荒れ狂う同勢 das wilde Heer. 荒れ狂う獵師に率いられる魍魎魍魎の群れ。
- (149) ヘルゼルベルクの女たち Höselsberginnen. ベヒシュタインがいかなる伝説登場形態を考えているのか不明。ヘルゼルベルク、又の名ヴェーヌスベルクは現テューリンゲン州西部ヴァルトブルク郡の山並みで、アイゼナハ近くにある。騎士タンホイザー（D S 一七一参照）が誘惑されて快樂の時を過ごした妖女ヴェーヌスの洞窟がここにあった、と言われるし、洗礼を受ける前に死んだ赤児の霊を連れて、あるいは数数の妖魔を伴って（D S 七参照）、空を経巡るホレ夫人 Frau Holle はこの山地と関係あるかも知れない。D S B 四五七に「ヘルゼーレンベルクの話」Von den Höselenberg（D S 一七四「ヘルゼルベルク」Der Höselsberg に相当）があり、魂が啼き叫ぶ声が聞こえる、とする。
- (150) 例のユーターボックの鍛冶屋 der Schmied von Jüterbogk. ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』所収七「ユーターボックの鍛冶屋」7. Der Schmied von Jüterbogk. In Ludwig Bechstein: Deutsches Märchenbuch. 1857. —邦訳。鈴木滿訳・注・解題・ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』（一八五七）試訳（その一）、「武蔵大学人文学会雑誌」第四十巻第四号、平成二十一年三月——の主人公。名前はペーター。洗礼名であやかっている守護聖人ペトルスに庇護され、三つの願いを叶えられたのはよいが、その結果死ぬことができなくなり、生きるのに飽きてこちらから出向いた天国にも地獄にも入れてもらえず、しからば、と昔仕えたご主人様——武具師として奉公したのは実は二世の方だから、間違いなのだが——である皇帝フリードリヒが呪封されて

- いるキユフホイザーへ赴いた御仁。
- (151) ヴェネチア人 Venetianer. 中近東との中継貿易によりヨーロッパで群を抜く先進国家だった中世ヴェネチア共和国の住人ヴェネチア人の中には——良い意味でも悪い意味でも——山師としてドイツの鉱山地帯を跋渉した者も少なくなかったようである。ドイツの伝説にしばしば登場。DSB三九四最後の話と注参照。
- (152) ローテンブルク Rothenburg. 現テューリンゲン州キユフホイザー郡シュタインタールエーベン村にある山城の廃墟。十五世紀に城は最後に補修・拡張されたが、この時崩壊していた城の礼拝堂から謎めいた像が見つかった。これはゾンダースハウゼンのシュヴァールツブルク伯爵家に収納され、「ゾンダースハウゼンのピュストリヒ」der Püstrich von Sonderhausenと呼ばれる。
- (153) ピュステリヒ Püsterich. <ピシユタインは上記のように綴っているが、前掲注にあるように「ピュストリヒ」Püstrichなる綴りもある。その他「ピュストリヒエ」Püstriche「ポイスター」Peusterとも。中空で、腹の突き出た男ないし少年の像。陶製または青銅製。二世紀後半以降の物が伝えられているが、その使用はおそらく紀元前に遡ると思われる。ゲルマン人の一部族が崇めた神の像ではないかとの説がある。スコラ哲学者にして神学者アルベルトゥス・マグヌスも十三世紀にその著作『デ・メテオリス』Arbertus Magnus: *De Meteoris* に言及。最も有名なのは「ゾンダースハウゼンのピュストリヒ」で、一五九一年以降無数の書き物で触れられている。
- (154) ゾンダースハウゼン Sonderhausen. 現テューリンゲン州の中都市でキユフホイザー郡郡庁所在地。宗教改革と農民戦争バウerner Kriegeまでの都市はイエヒャブルク修道院があるので北部テューリンゲンの宗教的中心だった。一九一八年までシュヴァアルツブルクゾンダースハウゼン侯爵領の首邑。
- (155) 殻棹 Dreschflegel. 「殻棹シュテグ使シュテグい戦争」Flegelkrieg. は一四二二年から一四一五年に及んだ農民蜂起であり、ハールツ山地方の貴族間の武装抗争である。根本的要因は農民の権利剥奪がますます強化されたからで、農民、草刈り労働者、打穀労働者、木樵、日雇い人夫およびその他の田舎の民衆が、殻棹を武器として、あるいはこれを旗印として立ち上がり、賦役・貢納の撤廃を求めたもの。次いで彼らは私闘を行っている貴族たちの道具とされ、抗争に組み込まれた。
- (156) フリードリヒ・フォン・ヘルドルンゲン Friedrich von Heldringen. ヘルドルンゲンの殿一門 die Edlen Herren von Heldringen はテューリンゲンの古い下級貴族の一族。その根城であった水濠を回らした堡壘ヘルドルンゲン城は現テューリンゲン州バート・フランケンハウゼン南東、黄金の沃野Goldene Aueの南縁、ヘルドルンゲンの町にある。一四一三年農民に刺殺されたヘルドルンゲンの殿フリードリヒ、あるいはその子息たちがこの一族の最後になろう。
- (157) ホーンシュタインの城塞 die Veste Hohnstein. DSB四二四に初出。現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡ノイシュタット近郊

にこの山城の廃墟が残っている。ホーンシュタイン伯爵家の根城だったが、殻棹戦争の折、攻囲・占領された（——ただし焼かれて破壊されるのは一六二七年になってから）。これは一族間の抗争にフリードリヒ・フォン・ヘルドルンゲン率いる殻棹使いが介入したものである。この結果ホーンシュタイン伯爵領は荒廃し、伯爵家の没落に繋がる。

(158) 一八四八年という年数 die Jahrzahl 1848. 一八四八年はヨーロッパ各地に革命が起こった年である。フランスの首都パリでは二月に労働者主体の革命が起こり、国王ルイ・フィリップは退位、第二共和制が開始された。オーストリアではウィーンにおける三月革命の結果宰相メッテルニヒは英国に亡命、ウィーン体制は崩壊した。プロイセン王国のベルリンでは暴動が起き、自由主義内閣が成立した。イタリア統一運動もこの年が起点といえよう。DSB三四三でもベヒシュタインはこの年数を引き合いに出している。「曩に有りし者はまた後にあるべし曩に成りし事はまた後に成るべし日の下には新しき者あらざるなり見よ是は新しき者なり」と指して言ふべき物あるや其は我等の前にありし世々に既に久しく在りたる者なり」。Was ist's, das geschehen ist? Eben das herrnachen geschehen wird. Was ist's, das man getan hat? Eben das man hernach wieder tun wird, und geschehen nicht Neues unter der Sonne. Geschichte auch etwas, davon man sagen möchte: Siehe, das ist neu! Es ist zuvor auch geschehen in den langen Zeiten, die vor uns gewesen sind.* 上記ドイツ文は現行ルター訳に従った。ベヒシュタインの原典には明らかな誤記あるいは誤植が散見するので。旧約聖書伝道之書一章九—一〇節。

(160) テューリンゲン伯ルートヴィヒ Ludwig, Graf von Thüringen. ルートヴィヒ跳躍伯はテューリンゲン邦の伯爵の一人には違いないが、シャウエンブルク伯 Graf von Schauenburg なのであって、テューリンゲン伯ではない。

(161) 聖金曜日 Charfreitag. 普通 Karfreitag と綴る。キリスト受難記念日。復活祭前の金曜日。復活祭の四十六日前——カーニヴァル直後——から聖金曜日翌日の土曜日までが四旬節だが、中世キリスト教社会では四旬節中厳格な節食・素食が行われた。カトリック教会では現代でも四旬節中の「灰の水曜日」Aschermittwoch と「聖金曜日」には大齋 jejunium（一日三回の食事の内一回は充分に摂るが、後の二回は少なくする）と小齋 abstinentia（食べてよいものは鳥獣肉、卵、乳製品以外とする摂食規制。一九六六年以降は鳥獣肉のみが規制対象）を行うように定めている。中世ドイツであつてみればなおさらのこと、この日肉料理を食べるのは大いに戒律に背くわけである。

(162) 教皇ステファヌス Papat Stephan. 最後の教皇ステファヌスは十世（在位一〇五七—五八）。尤もシャウエンブルク伯ルートヴィヒ（一〇四二—一一二三）は、この時期まだ成年にも達していない。

(163) ラインハルツブルン修道院 das Kloster Rheinhardsbunm. 現テューリンゲン州ゴータ郡の小さな町フリードリヒローダにあり、テューリンゲン方伯家菩提修道院にして時代の奥津城の所在地。一〇八五年シャウエンブルク伯ルートヴィヒ跳躍伯により、そ

の根城シャウエンブルク城の近くに建立されたベネディクト派修道院。現在はその廃墟の上に一八二七年に建てられたラインハルツブルンの館がある。この修道院の縁起についてはDS五五五に詳しい。

(164) オルデイスレーベン修道院 *das Kloster Oldisleben*. クーン・フォン・バイヒリンゲン Kuno von Beichlingen の奥方クニゲンデ・フォン・オルラムシュンデ Kunigunde von Orlamünde によって一〇八九年に建立されたベネディクト派修道院をもって嚆矢とする。

バイヒリンゲン家は十八世紀に湮滅したテューリンゲンの貴族一門(バイヒリンゲン殿↓男爵↓伯爵)。

(165) 更には仕返しをする墓石があつて……五行証書の授与(「平手打ちを喰らわせること」)にまつて *und rächende Grabsteine* …… durch Ertheilung fünfzeiliger Diplome. 因みに、ベヒシュタインが依拠したであろう資料と同様のものに從つたと覚しき他の伝説の該当箇所を参照する(「こんな文章である」)。

「修道院附属教会にはかつて二つの墓石があつた。〔生前〕お互いに侮辱し合はずにはいられなかつたバイヒリンゲン伯ヨーハンと一修道士のものである。こんな話が伝わっている。ある者が——うっかりしてだが——修道士の墓を損傷したところ、白昼、姿も見えず音も聞こえないのにしたたかに平手打ちを喰らわされ、目も見えず耳も聞こえなくなつてしまつた、と」(J・G・Th・グレッセ『プロイセン国伝説集』所収五二五「仕返しをする墓石」Johann Georg Theodor Grässe: *Sagenbuch des preussischen Staates*. 2 Bde-1. Glogau 1868/71. S.473. 525. Die rächenden Grabsteine.)。

右の文では仕返しした墓石は一つなのだが、ベヒシュタインでは複数形となつている。尤も前掲伝説のタイトルは奇妙なことに複数。フランケンハウゼン *Frankenhausen*. 現テューリンゲン州キュフホイザー郡の保養地バート・フランケンハウゼン。

(167)(166) トーマス・ミュンツァー *Thomas Münzer*. *Müntzer* と綴る。シュトールベルク伯爵領の首邑シュトールベルクに一四八九年頃生まれ、一五二五年帝国直屬都市ミュールハウゼン郊外で処刑される。聖職者。ドイツ農民戦争の指導者。一五二五年五月十五日フランケンハウゼンの会戦——彼が糾合した農民軍は完全に撃破された——後捕虜となり、ヘルドルンゲン城に禁錮、ザクセン公にしてザガン公ゲオルク(添え名して髯もじゃ公)立ち会いの下、マンスフェルト伯エルンスト二世の命令で拷問を受け、五月二十七日ミュールハウゼンの市門外、諸侯軍陣営内で斬首、その首は杭に刺されて曝された。DSB三九五注をも参照。

(168) ギデオンの戦士たち *Gideonstreiter*. かつては「民衆から召集された兵士」くらしいの意味であろう。旧約聖書士師記七章参照。そっくり野牛の革に縫い込まれた勇者 *der ganz in Büffelleder eingewähete Held*. もよりトーマス・ミュンツァーを指しているのだが、譬喩的表現なのか実際そうだったのか不明。識者の「高教を俟」。

(171)(170) ゲリンゲン *Göllingen*. 現テューリンゲン州キュフホイザー郡のキュフホイザー村の一部。シュヴァーベンのフィリップ *Philipp von Schwaben*. フリードリヒ一世の子。シュヴァーベン公。選出されたのは一一九七年で

はなくて一一九八年。

(172) ドイツ皇帝に zum deutschen Kaiser. 「ドイツ王・神聖ローマ皇帝に」ということである。

(173) ベルンのデイトトリヒ Dietrich von Bern. DSB 一一一注参照。

(174) クントツ・フォン・カウフンゲン Kunz von Kaufungen. 下ザクセンの貴族。一四一〇—一五五年。ザクセン＝テューリンゲン史

で有名な「アルテンブルクの公子誘拐」der Altenburger Prinzenraub——十四歳と十一歳の二人の公子拉致事件——の首唱者。一四五五年七月八日早暁、クントツ・フォン・カウフンゲン騎士らはアルテンブルク城からエルンストとアルブレヒトのザクセン両公子を誘拐した。ただし既に初日からまずいことになった。公子たちは結局ある炭焼きに救われたし、クントツは逮捕されてフライベルク（現ザクセン州中央部の大学都市）へ連行され、早くも一週間後の七月十四日斬首された。現在フライベルク市庁舎の張り出し窓の先端に彼の石造の頭部が飾られている。

ヨースト・ハーケ Jost Hake. 未詳。後掲注参照。

(176) シュマールカルデン戦争中 im Schmalkaldischen Kriege. 「シュマールカルデン戦争」der Schmalkaldischer Krieg（一五四六—四七）とは、新教諸侯が結成したシュマールカルデン同盟と神聖ローマ皇帝カール五世との戦い。戦いは当初南ドイツで行われたが、やがてザクセン・テューリンゲン地域にも波及した。同盟の二人の旗頭、ザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒとヘッセン方伯フィリップが捕虜となり、戦争はカール五世の勝利で終了。敗北後同盟は解散した。

(177) マンスフェルト伯フーゴ Hugo, Graf von Mansfeld. 教育のためゾンダースハウゼン城にいた幼いマンスフェルト＝フォルダーオルト伯フーゴ Hugo, Graf von Mansfeld-Vorderort（一五三六—一五八）は、ヨースト・ハーケ Jost Hake なる男に誘拐され、巨額の身代金を要求されたとか。

聖ウルズラ St. Ursula. DSB 一一一注参照。

(178) 朝課 Matutine. ラテン語「マトゥティヌス」matutinus から。聖務日課の一つ。元は夜半、後には午前二時に挙げる祈り。

(180) ドウターシュタット Duderstadt. 現ニーダーザクセン州ゲッティンゲン郡の都市。中世の面影濃い美しい町で、木骨家屋が多

(181) トイトブルク山地 Teutoburger Wald. 現ニーダーザクセン州と現ノルトライン＝ヴェストファーレン州に広がるニーダーザクセ

ン・ベルクラントの高い中級山岳地帯。紀元九年、ゲルマニア総督・ライン方面軍総司令官プロピウス・クインクティリウス・ウァルスの率いるローマの三個軍団が、ケルスキ族の族長ヘルマン（アルミニウス。DSB 二九一注参照）指揮下のゲルマン諸部族連合軍に破れ、壊滅した戦いの舞台として有名。日本では「トイトブルクの森」なる訳語が普通。

- (182) 三人アンナなる修道院 ein Kloster, das hieß zu den drei Annen. 未詳。
- (183) 聖者の町 Heiligenstadt. 現テューリンゲン州アイヒスフェルト郡郡庁所在地で保養地であるハイルバート・ハイリゲンシュタット。その名の由来は九六〇年頃建立された聖マルティン修道院に拠る。
- (184) フランク王国国王ダロバート der Frankenkönig Dagobert. DSB五に登場。
- (185) アッティラ Attila. もろろりすく前の「エッセル王」のこと。不統一だが原典に従う。
- (186) ルステベルク Rusteberg. ルステンベルクとも。現テューリンゲン州アイヒスフェルト郡にある山城の廃墟。
- (187) 釘靴 Stachelschuh. 中世の拷問用具の一つ。内側に釘の突き出た靴状の物。
- (188) ゲルマールマルク Gernmark. Gernar-Mark. テューリンゲンとヘッセンの一部で、ウンシュトルト川とヴェラ川に挟まれた地域に対する呼称。十世紀、十一世紀に登場。
- (189) ハンシュタイン一門発祥の城 der Stanschlöß Hanstein. ハンシュタイン家はアイヒスフェルトを発祥の地とする古い貴族一門。やがてヘッセン、テューリンゲン、ボンメルンにも拡がり、今日まで血統が続いている。現テューリンゲン州アイヒスフェルト郡ボルンハーゲン近郊にハンシュタイン城 Burg Hanstein の廃墟が残っている。これは中部ドイツ最大の城址の一つ。
- (190) ブロッケン山の夜会 Blocksbergnacht. Blocksberg は「ブロッケン山」Brocken (DSB四〇〇注参照) の異名。そこで直訳すれば「ブロッケン山の夜」となる。普通「ワールブルギスの夜」Walpurgisnacht (四月三十日から五月一日にかけての夜) を指すはずだが、悪魔の迫る行程が途中凍りついている、との叙述からするとそうした時期ではなさそうだ。土曜の夜、玉座に就いた悪魔(黒い牡山羊の姿に描かれることが多い)を主人役として、魔女たちが集まって催す「サバト」(魔女の夜宴)か。まあ、どうでもいいことだが……。DSB四〇〇注参照。
- (191) 国会議員 Reichsparlamentarier. 1793年レヒシュタインが「国会」Reichsparlamentと表現しているのはいわゆる「フランクフルト国民議会」Frankfurter Nationalversammlung (一八四八―四九)のことか、と思われる。憲法を制定し、自由主義的ドイツ統一を目指したが、流産に終わった。
- (192) 元祖臭牡山羊 Ur=Stinkbock. 前掲注「ブロッケン山の夜会」で記したように、悪魔はしばしば黒い牡山羊の姿に描かれる。また種牡である牡山羊の歳を喰ったのは体臭がひどい。
- (193) 極左連中てえのは——それ、なににそう書かれておるな——山羊だつちゅうわけで、永久に、おれ様、つまり元祖臭牡山羊とおれ様の使いどもに仕えることになつてゐるのだ。der äußersten Linken von denen geschrieben steht, daß sie als Böcke ihm, dem Ur=Stinkbock, und seinen Engeln, für ewigen Zeiten angehören sollten. 悪魔は聖書に引書されてゐる、と言つてゐるのぢやあ。

「人の子その栄光をもて、もろもろの御使いを率ゐたる時、その栄光の座位に坐せん。斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、これを別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、羊をその右に、山羊をその左に置かん。(中略)斯てまた左に在る者どもに言はん「誼はれたる者よ、我を離れて悪魔とその使らとのために備へられたる永遠の火に入れ。(後略)」（マタイ伝二十五章三十一—四十一節）。

「左翼」をこのように地獄落ちの輩としているのはベヒシュタイン一流の諷刺。彼は若くして、ザクセン＝マイニンゲン公ベルンハルト・エーリヒ・フロイント（ベルンハルト二世。在位一八〇三—一六六）の眷顧を蒙り、公爵家の司書を務め、公爵を畏敬していたので、身量もあつて、十九世紀半ばに澎湃として起こった西欧の自由主義的思潮に反発しているのである（DSB三四三、三三四、四三三、四四一およびこれらの注をも参照）。因みに公爵は歴史的には毀誉褒貶相半ばする人物。端麗な容貌で、あらゆる階層の人間と親しみ、臣民に愛され、「臣民の友」 Freund seiner Untertanen と呼ばれた。しかし彼の政治的決定はしばしば軽率かつ失敗だった。

(194) ヘッセンのマイスナー Meisner in Hessen. ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通 Meisner。現ヘッセン州北東部ヴェラ＝マイスナー郡の町。

(195) あるいは飛んで行った oder flog. ところが次に、道が悪い、との話になる。はてさて、飛行したのであれば道路事情など関係あるまい。

(196) ヴイツェンハウゼン Wizenhausen. 現ヘッセン州ヴェラ＝マイスナー郡の小都市。
大樽 Stückerl. 二〇〇リットル入りの大樽。

(198) 夜会の客人たちは件の葡萄酒を飲んで身震いし Die Gäste schauderten als sie sieben Wein tranken. ヴイツェンハウゼン産ワインはよほど風味が悪かったであろう。これを皮肉ったラテン語の論述もあるらしい。中世盛期にはマインツ大司教の許へ租税として毎年ワインが納められていたが、近世にはワイン栽培は途絶え、近近二〇〇八年に至って漸く——氣候変動のため——栽培再開が試みられている、というから、無理をしてワインを作っていた時期にはおそらく酸っぱくてどうしようもない代物だったのではあるまいか。中世ヨーロッパは現今よりずっと寒かったらしいので、その不味さは察するにあまりある。

(199) ドウターシュタット Duderstadt. DSB四三八参照。
お手長女 die langfingerige Frau. 直訳「盗癖のある女」。唐突で分からぬ。

(200) ライフェンシュタインの修道院 ein Kloster, des Namens Reifenstein. 一一六二年、トンナ＝グライヒェン伯エルンスト（二世）が建立、ミュールハウゼン近郊のフォルケンロータ修道院からシトー会派の修道士を何人か呼び寄せ、定住させたのが起源。

ドイツ農民戦争中の一五二四年、農民軍が修道院を取り壊し、元同修道院修道士で農民軍の幹部ハインリヒ・プファイファー(後掲注参照)が基礎に至るまで焼却した。

(202)

グライヒェン＝トンナ伯爵家 die Grafen zu Gleichen und Tonna へ来てでもたびたびその名がDSBに登場したグライヒェン伯爵家だが、ここで詳しく記しておく。グライヒェン伯爵家はテューリンゲンの豪族の家系。ゴータとアルンシュタットの間にある三つの互いに近接している城山、ヴァンダースレーベナー(あるいはヴァンダースレーバー)・グライヒェ、その南のミュールベルク、ミュールベルクの東のヴァクセンブルクを三グライヒェン die drei Gleichen と称するが、その一番目の城山に因んで名づけられた。この城がおそらく一〇八八年にその名が文献に挙がっているグライヒェン城であり、トンナ伯爵家の分家がここの城主となつて、グライヒェン伯と名乗つたのである。一五三九年には既に完成していた二人妻を持つ伯爵の伝説で有名になった。この伝説はエアフルトの大聖堂にある墓石と結び付いている。尤も史実のどの伯爵が「重婚」(教皇の特別認可は得ている)したのか、伝説は示していない。テューリンゲンの文人J・K・A・ムゼーウスは、民話を素材とした物語集『ドイツ人の民話』Johann Kai August Müstius: *Volksmärchen der Deutschen*. 1782-86. に収めた物語「メレクザーラ」Melechala (邦訳。鈴木満訳『メレクザーラ』ドイツ人の民話)、国書刊行会、平成十九)にこの伝説を用い、主人公の名をエルンストとしている。グライヒェン伯エルンストは三人いる。一世は一五二二年、二世は一七〇年に没している。三世は二世の甥にして後継者であり、一二四六年以降グライヒェンシュタイン伯爵家と言われるようになった分家をも創始した。在世の時期を考えるとムゼーウスはこの人を考えていたようだが。なお、エルンストでなくルートヴィヒとする伝説もあり、グリム兄弟がDS五八一「グライヒェン伯」Der Graf von Gleichenで紹介しているのはこの名である。

(203)

ハインリヒ・プファイファー Heinrich Pfeifer. ベビシュタインは上記のように綴っているが、Pfeifer が普通。一五〇〇以前二五年。生まれ名はハインリヒ・シュヴェアトフェーガー Schwerteger (「刀剣研ぎ師」)。「武具師」の意。この家系の職業が通り名となつたのであろう)。ミュールハウゼン市民。シトール会派の修道士となり、後改革派教会の説教師。トーマス・ミュンツァーと並びドイツ農民戦争の指導者。ミュンツァーと共にミュールハウゼン市郊外の諸侯軍陣営内で斬首された。

(204)

ミュールハウゼン Mühlhausen. 現テューリンゲン州北東部ウシシュトルト＝ハイニヒ郡郡庁所在地。中世にはテューリンゲン地方でエアランゲンに次ぐ強力な都市だった。一五二五年農民戦争の際ミュールハウゼンは、説教師トーマス・ミュンツァーと彼の戦友ハインリヒ・プファイファーのため彼らの過激な改革運動の中心とされた。叛乱農民と諸侯同盟軍との間に戦われたフランケンハウゼンの会戦(DSB四三四参照)にはミュールハウゼン市民軍も参加した。農民軍の敗北後ミュールハウゼンは諸侯同盟軍から莫大な賠償金を課され、管下の村村を失い、一時的に帝国直屬都市の自由をも奪われ、ザクセンやヘッセンの諸侯が領主となつ

- た。トーマス・ミュンツァーは同市郊外の諸侯軍陣営内で斬首された。現在ミュンツァーの記念碑が最後に残った市門「聖母マリアア門」の傍にある。
- 〔205〕共産主義者ら *Kommunisten*. DSB四〇二注参照。
- 〔206〕キリストは仰せられた、渴ける者へ「分け合え」 *Christus habe geboten.....mit den Dürftigen „zu theilen.“* 新約聖書出典箇所未詳。識者のご高教を俟つ。
- 〔207〕ランゲンザルツァ *Langensalza*. 現テューリンゲン州ウンシュトゥルト＝ハイニヒ郡の保養地バート・ランゲンザルツァ。あるいは心臓そのものが膝の裏に落っつちていた *teils das Herz selbst in der Kniekehle haben* 「心臓を膝裏に持つ」 *das Herz in der Kniekehle haben*. なる慣用句は算間にして知らない。「臆病者の心臓はスボンの中に落ちる (滑り込む)」 *Dem Feigling (Eilt (rutsch) das Herz in die Hosen.* を援用して「臆病で膝ががくがくする」の意を表したもののか、と思うが……。識者のご高教を俟つ。
- 〔209〕バルトロッフへ走り、そこから火を取って来ると *hief nach Barthoff holte Feuer allda*. バルトロッフは現テューリンゲン州アイヒスフェルト郡の小村 *アイヒスフェルト* と小バルトロッフ。現小バルトロッフはライフエンシュタイン修道院があった場所のすぐ近く。点火具を持っていなければ火種を取りに行く他はない。
- 〔210〕聖ゲオルク *St. Georg*. DSB四一四注参照。
- 〔211〕小人の野男 *ein kleiner wilder Mann*. 「ワイルトマンリ」 *Wildmannli* 「ワイルデス・メンレ」 *Wildes Männe* などと称える地方もある。若木を根抜きにして杖にするような身の丈の大きき「ワイルダー・マン」 *Wilder Mann* もいる。大小に関わらず各々の一族には女も子どもも存在するが、いずれにせよ、毛むくじやらで半人半獣の容姿らしい。すなわち森や山野の精霊である。ギリシア神話のサテュロスの類か。DSB二七七にも登場。